Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-06

現代中国における農民出稼ぎと社会構造変動に関する研究ー農民出稼ぎ者・留守家族・帰郷者の生活と社会意識に関する実態調査をふまえてー

江，秋鳳

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
2012-03-25
(Date of Publication)
2012-10-24
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲5568
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1005568

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

博士論文

現代中国における農民出稼ぎと社会構造変動に関する研究

——農民出稼ぎ者・留守家族・帰郷者の生活と社会意識に関する実態調査をふまえて——

神戸大学大学院　人間発達環境学研究科
人間環境学博士後期課程
指導教員　浅野　慎一
学籍番号　069D846
学生氏名　江　秋鳳

2011年12月

目次

序章　課題と方法
第1節　本論文の課題
第2節　先行研究の検討
　第1項　中国における出稼ぎの史的変遷
　第2項　人口移動に関する基礎理論
　第3項　実態調査に基づく出稼ぎ研究
　第4項　留守家族に関する先行研究
　第5項　帰郷者に関する先行研究
第3節　調査の概要
第4節　調査対象地の概況
　第1項　北京市の出稼ぎ概況
　第2項　山東省鄆城県南趙楼の概況

第1章　農民出稼ぎ者の生活と意識
　　――北京の農民出稼ぎ者の事例を中心に――
第1節　基本属性
　第1項　出身地と学歴
　第2項　家族構成
　第3項　故郷での生業と所有耕地面積
第2節　出稼ぎにみる労働――生活史
　第1項　出稼ぎの動機・目的
　第2項　出稼ぎの手づる
　第3項　出稼ぎにみる職歴
　第4項　賃金不払いの経験
第3節　出稼ぎ先での労働過程
　第1項　業種
　第2項　労働時間・休日
　第3項　賃金と労災保険
第4節　出稼ぎ先での生活過程と社会諸関係
　第1項　居住環境
　第2項　消費生活と送金・貯金
　第3項　生活面の苦悩と楽しさ
　第4項　北京での差別と社会諸関係
第5節　出稼ぎを通した意識変化
　第1項　人生観
　第2項　結婚観
　第3項　子供の将来への期待

第4項　本人の将来について
第6節　小括

第2章　出稼ぎ農民留守家族の生活と意識
——山東省鄆城県南趙楼郷の事例研究——
第1節　生業と家計構造
第1項　生業と役割分担
第2項　農業・農村における諸問題
第3項　収入構造
第4項　支出構造
第2節　生活過程と社会関係
第1項　生活上の諸問題
第2項　家族関係の変化
第3項　村の社会関係と教育
第3節　社会意識とその変化
第1項　出稼ぎについての意識
第2項　子供への期待
第3項　政府への要望
第4節　小括

第3章　出稼ぎからの帰郷者の生活と社会意識
——山東省鄆城県南趙楼郷の事例研究——
第1節　帰郷者の家族構成と農業生産
第1項　家族構成
第2項　土地所有
第3項　農業生産
第2節　帰郷者の出稼ぎ体験
第1項　動機
第2項　出稼ぎ先での労働・生活
第3項　出稼ぎ先の労働環境
第4項　出稼ぎ先の生活環境
第5項　出稼ぎ先の社会関係
第6項　帰郷へ
第3節　帰郷後の労働・生活
第1項　帰郷後の労働
第2項　帰郷後の生活・家計
第3項　家族関係とその変化
第4節　出稼ぎ・帰郷と社会意識の変容
第1項　労働観

第2項　結婚・夫婦観
第3項　子供観・教育観
第4項　人生観
第5節　都市と農村をつないで
第1項　農村観の変化
第2項　農村の変化
第3項　行政への要望と諦観
第4項　将来の定住志向
第6節　小括

終章　中国農民出稼ぎ者に関する研究
第1節　出稼ぎの動機と背景
第2節　出稼ぎ者と留守家族の生活
第1項　出稼ぎ先での労働・生活
第2項　留守家族の生活
第3節　帰郷という選択
第1項　帰郷の選択
第2項　帰郷後の生業・生活
第4節　農村社会の変貌と展望
第1項　家族の変貌
第2項　子供と教育
第3項　農村社会関係の変容

序章　課題と方法

第1節　本論文の課題

本論文の課題は、現代中国における農民出稼ぎがもつ社会的意義を、出稼ぎ者本人・留守家族・帰郷者の三者の労働－生活と意識の実態をふまえ、考察することにある。

1978年以降、中国の農村では生産請負制の導入に伴い、農業技術の進歩、農業機器の改良が急速に進み、農村労働力の余剰化が顕著となった。またその後、中国は驚異的な経済成長を遂げ、特に北京・上海・経済特区および東部沿海地区では労働力不足が深刻化した。こうして農村から都市への巨大な人口流動が必然的に生まれた。農村で余剰労働力となった人々は、様々な方法で非農業部門や都市への出稼ぎを始めた。こうして中国では、空前の規模で出稼ぎという社会現象が広がっていった。出稼ぎ者の移動は、都市－農村が厳密に区分された従来の中国社会の二元的構造を打ち破り、農民が工業化の利益と都市の文化を享受する新たな社会環境を生み出した。中国国務院『中国農民出稼ぎ労働者調査研究報告』によれば、2007年、都市への農民出稼ぎ者数は約１億５千万人に達する。農民出稼ぎ者の動向は、現代中国の社会変動にとって、もはや無視できない要素となっている。既存の全国調査によれば、農民出稼ぎ者は16～40歳の青壮年層に集中し、平均年齢は28.6歳である。男性が66.3%、女性が33.7%を占め、女性には未婚者が多い（湯、2004、200）。こうした青壮年の男性、および未婚の女性が出稼ぎに出ることにより、中国の農村には“386199”現象が、広範にみられた（馮、2009、129）。ここでいう“386199”とは、国際婦人デーの３月８日、国際子供の日の６月１日、そして長寿の高齢者を示す９９という数値に由来し、要するに農村に女性・子供・高齢者だけが取り残される現象である。そして近年、戸籍制度が変更され、都市での長期居住や定住が一定の範囲で認められるようになった。これにより、農民の出稼ぎは一層長期化しつつある。

一方、これとは一見対立するかのような現象もある。出稼ぎを中断し、都市から農村へと帰郷する「回流」である。こうした出稼ぎ農民の農村への帰郷も、すでに目新しい現象ではない。1990年代、「民工潮（中国の農村から都市への出稼ぎ）」が全国的に発生した際、当時の主な出稼ぎ就労先であった郷鎮企業の崩壊に伴う「農民労働力の回流」（李、1990、3）がみられた。また1990年代後半、国有企業改革によって大量に発生した都市失業者の雇用が優先され、出稼ぎ農民の就職が困難になった際も、農村への帰郷が増加した。そして2008年以降、国際的な金融危機により外需が減少し、中国の沿海地域の輸出関連製造業企業が経営難に直面した。これに伴い、農民出稼ぎ者の帰郷がさらに増加している。『人民中国』（2009年８月号）によれば、「2009年の春節に総民工数の1/3である7000万人が帰郷したが、そのうちの2000万人は失業して帰郷した」である。

21世紀以降、ようやく中国でも、こうした出稼ぎや帰郷が、都市と農村をつなぐ構造的問題として明確に位置づけられ始めた。2002年11月、中国共産党第16回大会は、都市・農村・経済・社会の統一発展計画の一環として、三農（農業・農村・農民）問題の解決を提起した。その後、農業税の撤廃・農村における義務教育の無料化等、農民の負担を軽減する政策が実施された。2006年には、「工業が農業を育て、都市が農村を支援する」ことで、「生産を発展させ、生活を豊かにして余裕を生み出し、農村の気風を文明的にし、農村を清潔に整え、管理を民主的にする」という新農村建設計画が開始された。また地方都市（小城鎮）建設や地方経済の活性化のため、帰郷した出稼ぎ労働者に対して、農村のインフラ建設への参加が奨励された。帰郷した農民労働者の起業支援など、出稼ぎ者を農村に呼び戻し、彼らの

内発的な起業心理の惹起を図る政策も生じた。いわば出稼ぎや帰郷を適正にコントロールし、それを通して都市と農村の関係を調整することは、現在および近い将来の中国社会の安定にとって極めて重要な課題と位置づけられるに至ったのである。

このように出稼ぎや帰郷の動向は、決して諸個人の個別事情で説明しうるものではない。それは、現代中国の政治・経済的な変動を背景とし、したがって都市と農村をつなぐ社会構造変動に巨大な影響を与える現象にほかならない。しかし同時に、こうした出稼ぎや帰郷は、あくまで一人ひとりの農民自身の生活の必要に基づく主体的選択・意思に基づいてなされている。したがって、単なる上からの政策やその実施過程の分析にとどまらず、出稼ぎや帰郷という体験を通して、農民たちがいかなる主体形成を遂げ、いかなる新たな社会を模索しているのか、さらには意図せざる結果としていかなる社会変動を現に作り出しているのかを捉える、いわば下からの社会変動論の視点が重要になる。いわば、諸個人の主体的な生活とマクロな社会構造変動を貫く内在論理を把握しなければ、出稼ぎや帰郷が現代中国の社会変動論にもたらす真の社会的意義は、十分に把握しえないのである。本論文が、出稼ぎ者やその家族、帰郷者の労働－生活や意識のレベルに降りて問題を把握する理由は、そこにある。

第2節　先行研究の検討

以下、先行研究の到達点と課題を明らかにしよう。

第１項　中国における出稼ぎの史的変遷

現代中国の農民出稼ぎとその変化を、国家政策および経済の発展段階との関連で明らかにした研究として、朱（2005）がある。

朱によれば、中国の農民出稼ぎはこれまで４つの画期をもって大きく変化してきた（朱、2005、30-32）。

第１段階（1949年～58年）は、工業発展の開始期である。この時期、第２次世界大戦や内戦が終わり、国民経済が回復し、人々の生活も安定し、都市の発展が加速した。国家は、交通・運輸と製造業の発展を重視し、都市は労働力の受け入れ能力を高めた。そこで大規模な農民出稼ぎ者の移動が起こった。国家は、これを制限する政策を特にとらなかった。

第２段階（1959年～77年）は、国家が農民出稼ぎ者の流動を厳しく抑制した時期である。特に1961年～65年、政府は工業調整策を取り、都市人口を減らし、農業生産を強化した。農村から都市への労働力の移動は厳しく制限され、反都市化といわれる現象が見られた。さらに1966～77年の文化大革命期には、知識青年と国家幹部の「上山下郷（都市から農村への移動。農村に長期間定住し、思想改造を図るとともに、農村の社会主義建設に協力する農業生産への従事）」が実施され、都市工業の発展は完全に停滞した。

第３段階（1978年～84年）は、農村経済改革が実施され、農民が農地から解放され、農業経営方法や職業選択の自由を獲得した時期である。農村の余剰労働力が、再び都市や農業以外の産業へと自発的に流動し始めた。土地公有制は維持されたが、郷鎮企業や村による多様な所有制が並存し、非農業部門における労働力の受け入れ能力が高まった。労働力移動を抑制する政策は次第に緩和され、多数の農民が都市への出稼ぎを開始した。

そして第４段階（1985年以降）は、農村から都市への労働力流動を抑制する政策が徐々に撤廃されていく時期である。この時期には、戸籍制度は依然として存在しているものの農民は自由に都市へ出稼ぎ

に向かい、都市に長く滞在することが可能となった。特に沿海地区の工業化と都市化の加速によって、中国国内の地域間格差が拡大し、大規模な農民出稼ぎ現象が発生した。

第２項　人口移動に関する基礎理論

ここから直ちに明らかなことは、中国における都市－農村間の人口流動が、単なる経済の一般的な発展段階だけでは説明できず、国家政策の独自の役割をふまえなければ、理解できないという事実である。石（2003）は、大規模な農民出稼ぎ者の移動が、計画経済の時代から持ち越され、今なお市場経済の歩みを阻んでいる「旧制度」の問題点も顕在化させたと述べている。中国の「旧制度」が市場経済の歩みを阻んでいるのか、それとも市場経済をむしろ推進しているのかは、多様な見方がありうる。しかし少なくとも、旧来、「中国独自の社会主義」と称されてきた政策や制度の存在を抜きにして、中国の出稼ぎのあり様を捉えることは難しい。

例えば、従来、発展途上国における労働力移動の分析においては、多くの研究がルイス・モデルを応用してきた（ルイス、1969）。ルイス・モデルによれば、発展途上国の経済は、行動原理が異なる伝統部門と近代部門の二重構造をもつ。そして伝統部門から近代部門への労働力移動を基軸として、工業化が達成される。しかし中国の現実は、こうしたモデルの想定とは大きく異なっていた。改革開放以前の中国経済は、農村部門と都市部門の２部門から構成され、政府のマクロな経済政策によってコントロールされてきた。1980年以前は、人口移動を厳しく制約する戸籍制度や食糧分配制度が実施された。また文化大革命期には農村に大量の人口が還流させられ、農村に大量の過剰労働力が堆積してきた。こうした状況を背景として、1980年代には、都市への大規模な労働力移動という「返城」現象が発生した。しかし、そうした都市への労働力移動・流入もまた、戸籍制度（暫住証保持の義務づけ）や、計画生育政策（例えば、既婚女性が毎年定期的に出身地に帰って、身体検査を受けなければならない）など、政府の政策による影響を受けた。近年、暫住証保持義務など、人口移動を制約する制度は緩和しつつあるが、制約は依然として残存している。

また、労働力移動要因をめぐる研究においては、プル（pull）・プッシュ（push）理論も広く用いられてきた。この理論によると、流出地における自然資源の減少、農業生産コストの高騰、農業余剰労働力の発生、比較的低い経済収入などが労働力移動のプッシュ要因となり、それに加えて、流入地の比較的多くの就業機会、より高い収入、良好な生活レベル、多くの良好な教育機会、文化施設などが移動のプル要因となる（馮、2009、9）。1978年以降、経済改革と市場経済の導入により、中国の経済は著しく成長してきた。農村地域では、生産請負制の導入および人民公社の解体によって、生産性が大幅に上昇した。これにより、従来、人民公社内で潜在化していた農業余剰労働力が、土地への強制的拘束から解放された。それと同時に、都市部の発展はより急速に進み、労働力不足が顕著になった。ここまでは、プル・プッシュ理論があてはまる。しかしながら、この理論は、市場化および労働力の自由移動が重要な前提となっている。中国では市場システムの導入が進んできたとはいえ、法律が未整備な部分がなお多く存在しており、完全な市場化の実現には至っていない。しかも独自の戸籍制度が存在するため、多くの出稼ぎ労働者は一時的に都市部に流入した後、故郷に戻ることを余儀なくされてきた（李、2003、132）。そこで農民出稼ぎ者は、都市部と故郷との間を振り子のように往復する。こういった現象は、中国に特有の現象に他ならない。そのため、プル・プッシュ理論をそのまま適用することはできない（馮、2009、106）。

第３項　実態調査に基づく出稼ぎ研究

国家政策の役割を重視し、しかも農民出稼ぎの実態を捉えた研究として、中国国家統計局が2006年10月に公表した「都市部出稼ぎ労働者生活の質に関する調査報告」がある。これは、全国規模で実施した29,425人の実態調査に基づく報告書である。こうした調査の実施と報告書の公表それ自体、中国政府の出稼ぎに対する政策の変化を示す出来事といえる。馮（2009）によれば、2003年頃までは、中国政府は基本的に出稼ぎ労働者をコントロールする姿勢をとってきた。公表された多くの通達も、いかに出稼ぎ労働者の移動を政府の管理下に置くかを目指したものであった。しかしその後、政府は出稼ぎ労働者に対する管理を緩和し、彼らの就業、子女教育、権益保護に対する関心を高めてきた。具体的には、新条例の策定と実態調査といった２つの措置をとってきたのである。2003年頃から出稼ぎ労働者に関する通達が一気に増え、2005年までのわずか３年間に20以上の条例や通知が公表された。こうした傾向のピークとして現れたのが、2006年３月の「農民工問題の解決に関する若干の意見」の公表である。また、それらの条例の策定の基礎となったものこそ、前述の「都市部出稼ぎ労働者生活の質に関する調査報告」であった。その意味において、この報告書は重要な意義を有している。ただしそれでもなお、この調査結果から明らかになるのは、出稼ぎ労働者の生活のごく概観にすぎない。調査結果のほとんどは単一変数に対する叙述的な集計にとどまり、出稼ぎ労働者の生活実態やそこでの問題点、さらに出稼ぎ者自身の主体的な行為や選択が十分に解析されているとは言いがたい。

政府以外の研究者による実態調査研究として、まず若林（2005）がある。若林は、人口センサスおよび現地でのインタビュー調査に基づいて、戸籍制度を中心とした制度改革と移動人口の変化について分析を行った（若林、2005、237-322）。そこでは、現代中国の人口問題の一つとして、農村余剰労働力および流動人口の問題があげられている。また、農村から都市への大量の労働力移動は、農村の余剰労働力問題を緩和させるとともに、都市の経済開発にも大きく寄与しているが、都市の交通、住宅、および治安に関する様々な社会問題も引き起こしていると分析されている。このような分析は、その限りでは適切である。ただし、それにとどまらず、農民出稼ぎ者がどのような問題を抱えているか、都市へ流入した彼らがどのような生活を送っているのか、農村と都市の「二元社会」の生活体験を通して、彼らの意識にどのような変化が見られるのかといった問題の分析は、課題として残されたままである。

そのような出稼ぎ労働者の生活と意識の実態に踏み込んで論じている研究としては、熊谷（2002）の調査研究を挙げることができる。熊谷は、江蘇州太倉市で211人の女性出稼ぎ者に対するアンケート調査を行い、その調査に基づいて、「戸籍上の移動は極めて難しい」、「彼女たちは急成長する都市や先進地域社会で“３Ｋ”労働を担う重宝な限界労働力としてマージナルな位置を占める」、「同時にその社会から差別、疎外され、孤独、不安などの感情を抱いている」、「公的セクターの支援が欠如し、彼女らの人間関係は狭い血縁や地縁のネットワークに依存している」等の問題を明らかにした（熊谷、2002、150）。これらの知見は、極めて貴重である。ただし、熊谷の調査の対象はあくまで女性の農民出稼ぎ者に限られている。農民出稼ぎ者の大部分を占める男性も含め、農民出稼ぎ者の総体的特徴の把握を行うことは、依然として大きな課題として残されている。また、熊谷の調査は1997年と98年に行われ、その対象は内陸農村から沿海農村へ移動してきた農民出稼ぎ者である。しかし、2001年以後、新しい戸籍制度に向けた改革（注１）が全国の一部の省と市（例えば、江蘇、浙江、四川、河南、河北など）で推進され、自由な移動と居住地の選択を可能にした。この時期から農民出稼ぎ者の移動の特徴は「農村から農村へ」から「農村から都市へ」に大きく変化した。その点からも、この調査結果に基づいて、現在の農民出稼ぎ者の実態を推し量ることは難しい。また、熊谷の認識も、出稼ぎ先での労働－生活実態

の分析にとどまっている。つまり、女性たちが出稼ぎの経験を通していかなる主体変容を遂げ、出身地の農村社会にどのような変化をもたらすのかについては、全く触れていない。女性であれ男性であれ、出稼ぎ農民は単に「かわいそう」な被害者・被害の客体ではない。彼・彼女らが出稼ぎに出ることを選択し、出稼ぎを通して何を学び、どのような変化を遂げ、出身地である農村に何をもたらしたのかをみなければ、出稼ぎがもつ真の社会的意義を見逃すことになるだろう。

2001年以後の出稼ぎについて、最も詳細な実態調査研究として、馮（2009）をあげることができる。馮は、多くの先行研究（注２）を比較・批判し、さらに現在の中国の政策動向を押さえた上で、北京・上海・広州の農民出稼ぎ者本人の調査、および四川の留守家族の調査を行い、農民出稼ぎ者の生活実態や留守家族・村落への影響、子弟教育などを多角的に分析している。その中で彼は、出稼ぎの移動行為が第一義的には、流入地と流出地の収入格差に基づくことを示している。また馮は、人的資本・経済資本・制度資本・流入地適応・家族形態の５つの影響要因を取り上げ、序数回帰分析を通じて農民出稼ぎ者の都市定住意識も分析している。そこでは、高い教育レベルを持ち、滞在期間が長く、「夫婦と子供」で出稼ぎにきている人ほど、より強い定住意識を示すこと、収入ではなく職種が定住意識に影響を及ぼしていること、そして農業戸籍所有者の定住意識は低いことなどが明らかにされている。これはもとより貴重な研究ではある。ただしこうした定住意識をより深く解明するためには、詳細な質的事例研究が不可欠であろう。また定住意識だけではなく、それ以外の分野に関する意識の変容も、残された解明課題である。

以上、先行研究の到達点と課題をふまえれば、都市に流入した農民出稼ぎ者がどのような問題を抱えているのか、どのような生活を送っているのか、そして都市での生活体験を通してどのように意識を変化させているのかといった実態の把握は、決して十分になされているわけではないことがわかる。そして、それらをより深く解明するには、統計的研究のみならず、詳細な質的事例研究が不可欠である。

第４項　留守家族に関する先行研究

では次に、農民出稼ぎ者の留守家族に関する先行研究を検証しよう。

ここでは従来、出稼ぎに伴う、①家族形態の変化、②配偶者への影響、③子供への影響、④老親の扶養問題等の諸側面に区分して、いくつかの調査研究が試みられてきた。そしてそのいずれの側面においても、複数の見方が並立し、共通認識が得られていないのが現状である。

すなわちまず家族形態については、「労働力の流出が家族形態を拡大家族から核家族へと変化させた」（Yuan、1987、36-46）、「農村家族の息子の流出に伴い、…隔代家族（祖父母と孫の同居家族：著者補足）の割合が著しく増加した」（張・李、2004、48）等の指摘がある。また、「出稼ぎ者の生活様式と価値観の変化によって、老親との世代間ギャップが拡大し、最終的に農村家族構造の小規模化につながっている」（杜、2000、77-99）との指摘もみられる。さらに、「人口の流出が家族規模の縮小につながっている。（ただし）縮小しても拡大家族は中国農村社会の中で比較的に多い」（馮、2009、135）との指摘もある。いわば家族が全体として小規模化しつつあることはほぼ共通認識となっているが、しかしその具体的な形態、およびそれと出稼ぎを含むトータルな生活過程との連関については一致した見解がみられない。

配偶者への影響については、一方で、「農業生産活動や家事における女性の貢献度の拡大は、家庭内における女性の交渉力の上昇をもたらした」（Zhang、1998、193-211）、「夫が流出した後は、妻による決定の増加・夫による決定の減少・夫婦双方による決定の減少という３つの変化が見られることから、

夫の流出は家族内における妻の勢力の拡大をもたらしている」（馮、2009、146）等、妻の意志決定権の増大が指摘されている。しかし他方で、「農業生産活動および家事における妻の役割の変化は男性の流出によって生じた空白を埋めることにすぎず、従来の夫婦間の勢力関係には影響していない」（Entwisle etc.、1995、36-57）との指摘もある。

子供の教育への影響については、「人口流出が子供の生活の質の低下をもたらし、彼らの性格にも影響を与え、一部の子供の間に自閉症、劣等感、またはコミュニケーション障害などの問題が発生した」（呂、2006、49-56）、「親からの関心と愛情が欠如したため、孤独感を持ち、学習への意欲も失われ、成績が悪くなった留守子供が多い」（黄、2004、4）等、マイナスの影響を指摘する研究が多い。しかし他方で、「親の流出は、留守子供の物質的生活にはプラスの影響を与えてきたが、子供の教育にはそれほどの影響を与えなかった。一方、子供の性格についての調査結果からは、自閉症や劣等感の発生、学習意欲の低下などの問題現象は見られない」（馮、2009、149）との指摘もみられる。

そしてこうした留守家族に関する先行研究の中で、最も総括的かつ体系的な研究として、前述の馮（2009）がある。ただしこの研究成果にも、一見、矛盾する指摘が散見される。たとえば一方で「配偶者の流出は夫婦関係の疎遠化をもたらしていない」としつつ、他方で「配偶者には、孤独感を感じている人々の割合が高い」との指摘もある（馮、2009、129～150）。出稼ぎ先からの送金の用途も、一方で「留守家族の老親扶養、子供の教育、そして家計の維持といった、より基本的な生活ニーズにとどまっている」と述べつつ、他方で「（流出人口の送金により）留守家族の経済状況は大きく改善されてきた」との指摘もある。さらに「人口が流出後、農業活動のピークに合わせて流出地に戻って農業活動に携わる人は低い割合にとどまる」との分析が、農業生産過程の分析を経ず、直ちに「（人口流出が）農業活動に負の影響を与えている」との結論に結びついている。同論文では「家族成員流出後、農業生産の最も重要な担い手は老親と配偶者になる」との記述もあるが、そのことによって生まれてくる農業生産の新たな変化については明示されていない。

このような一見、矛盾した考察・論述は、多様な生活諸局面について「影響・変化があった／なかった」という二分法によるアンケート調査や数量的相関分析の限界によるものと思われる。一見矛盾するかにみえる諸要素・諸側面が、いかなる内的連関をもっているのか、またそれらを根底で両立させている生活過程をトータルに把握する必要があるだろう。

第５項　帰郷者に関する先行研究

最後に、帰郷者に関する研究の動向を検討しよう。

出稼ぎ者本人や留守家族の研究に比べ、出稼ぎを辞め、農村に戻ってきた帰郷者に関する研究は多くない。

そのような中で、安徽省と四川省で農家調査を実施した白・宋編（2002）は、代表的な帰郷者研究として知られている。そこでは、「農民工の帰郷は、都市部での継続就業や定住を制度的に拒否されたことによる、消極的な選択」であり、また「帰郷者数は現役出稼ぎ者に比べてごく限られ、起業した人数も帰郷者のほんの一部にすぎない」とされている。同様の指摘は、厳（2010）にもみられ、「帰郷の要因は故郷で事業を起こすといった積極的なものではなく、社会的、経済的、あるいは制度的要因で帰郷を余議なくされたという、消極的なものである。そこで、帰郷者のほとんどは伝統的な農村社会に回帰し、出稼ぎ経験がない者とあまり変わらない就業の仕方をしている」（厳、2010、207）とされている。

一方、帰郷後に農村で起業した農民に注目する研究もある。王・崔・超（2004）は、「出稼ぎ者が継

続的に増加するとともに、帰郷する民工にも増加傾向がみられる。帰郷して起業する者は大部分が農業以外に従事している。出稼ぎは起業のための前提であり、出稼ぎ経験こそが起業行為に影響を与え、物的資本と人的資本、すなわち資金・技術・情報・経歴などの蓄積が起業の決定要因である」（王・崔・超、2004）と指摘する。また韓（2009）も、「出稼ぎの過程で得た資金や技術を生かし、故郷での起業を通して地域経済の振興に貢献するなど、農民工の帰郷は資金や人的資本を都市から農村へ移動させることで、農村経済の振興に大きな意味を持つ」（韓、2009）と述べている。

農村での起業の困難を指摘する研究もある。小松（2010）は、帰郷後の起業が直面する資金難の原因を、農村における金融システムの不備に求め、小額信用貸付制度の必要を提起している（小松、2010、79-86）。また上記の厳（2010）は、アンケート調査結果の計量分析を通して、「若者や教育水準の高い人は、…自身のことを、農民より労働者だと見なす意識が強い」、「労働者と自認する人は農民と自認する人と比べ、現に住んでいる都市への帰属感が強い」、「身分意識および都市への帰属意識は、定住か帰郷かの意思選択において、比較的重要である」（厳、2010、210-217）と述べている。すなわち起業に適した人材が農村に戻らず、都市に定住する傾向を示唆しているのである。

このように、帰郷者に関する先行研究では、帰郷の要因、帰郷後の生活や就業、出稼ぎに対する目的意識、出稼ぎの経験が帰郷後の起業に与える影響、出稼ぎ者の帰郷および起業が農村経済に与える影響、起業が直面する問題およびそれをサポートする制度等について、議論がなされてきた。しかし、これらを踏まえてもなお、帰郷（者）に関わる諸要素・諸側面が、個別的にしか扱われていない感は否めない。それらがいかなる内的連関をもっているのか、またそれらを根底で並立させている構造はいかなるものなのかを明らかにするためにも、帰郷者の生活過程をトータルに把握する必要があるだろう。また出稼ぎ体験が農村に与える影響は、起業の成否だけに土間るまい。農村での生活・社会関係・社会意識に出稼ぎ与える諸影響を総体的に捉えない限り、本質的な意味で出稼ぎや帰郷の社会的意味が把握されたといえない。

第3節　調査の概要

以上、先行研究の到達点と課題をふまえ、本稿では、①出稼ぎ者、②留守家族、そして③帰郷者の生活と意識の実態をトータルに把握し、それを通して出稼ぎ・帰郷が現代中国の社会変動にいかなる意味を有しているのかを考察したい。

実態調査の基礎になる方法論は、日本の地域社会学研究の中で培われた生活過程分析に基づく社会変動論（注３）である。調査の具体的方法は、インテンシヴな面接聞き取りと参与観察である。出稼ぎ先と故郷での労働－生活とそれに根差す社会意識をトータルに把握するには、質的な面接調査法が最も適切である。また調査の性質上、対象者との信頼関係が不可欠であるため、対象者の確保には機縁法を用いた。インテンシヴな面接調査を実施しえたのは、①出稼ぎ者本人（51名）、②留守家族（53名）、そして③帰郷者（33名）の計137名である。

実態調査は、計３次にわたって実施した。

第１次調査は、2007年９月、北京市内で農民出稼ぎ者本人に対して行った。調査対象は、北京市内で働く農民出稼ぎ者（男性34人、女性17人、計51人）である。

第２次調査は、2009年８月～９月、山東省鄆城県で、留守家族を対象として実施した。農民出稼ぎ者の留守を守る父母（21名）、妻（26名）、夫と息子をともに出稼ぎに出している女性（６名）、計53名にインタビューを行った。

第３次調査は、2010年９月～10月、山東省鄆城県南趙楼で、出稼ぎから帰郷した農民（男性28名、女性５名、計33名）を対象として実施した。

第4節　調査対象地の概況

では、本調査の対象地域の概況を紹介しておこう。

第１項　北京市の出稼ぎ概況

第１次調査の対象地である北京市は、いうまでもなく中国の首都であり、最も多くの出稼ぎ労働者を吸収している大都市の一つである。

北京市における農民出稼ぎ者の流入人口は、2008年時点で510万人を超え、同市の総人口1,700万人の３分の１を占めるに至った。郝在今（1997）は、「巨大都市の内部に、もうひとつ別の大都市があるようなものだ」（郝在今、1997、205）と表現している。また2008年には北京オリンピックが開催されたため、地方からの建設労働者の流入はさらに加速した。もちろん、北京市における農民出稼ぎ者の仕事は建設労働のみに限らず、製造業労働者、自動車等の修理工、マンションやビルのガードマン、清掃係、住み込みの家政婦、商店や新聞スタンドの販売員、レストランのウェイターやウェイトレス、自転車による宅配人、野菜売りなどにも広がっている。このような都市生活には欠かせない仕事を、主に農民出稼ぎ者が引き受けているのである。

こうした北京市における出稼ぎ農民の実態については、意外に先行研究が少ない。また、北京市は他都市以上に戸籍制度が厳しく、この制度に縛られた農民出稼ぎ者の意識を把握する上でも、調査地として適していると考えられる。

第２項　山東省鄆城県南趙楼の概況

山東省は、黄河の下流域、中国東部沿海部に位置し、総面積は15.67万km²、耕地面積は7,515.31千ヘクタールである。2008年の総人口は9,417万人（表１）で、都市人口が4,483万人（47.6%）、農村人口が4,935万人（52.4%）を占める。2007年の公的調査（サンプル抽出率１%）によると、山東省全体の流動人口は約691万人であり、その年齢内訳は15～45歳に集中している。2001年～2007年にかけて人口移動が増加し、平均して毎年88.9万人が農村から都市へ移動している（表2）。農村人口は2000年の5,629万人から4,935万人へ減少し、都市人口は2000年の3,450万人から4,483万人へ増加している。山東省は17市・140県から構成される（図１）。

鄆城県は、山東省の南西部に位置し、荷澤市に管轄され、面積は1,571.3 km²、2007年時点での総人口は115.3万人（表３）、全県戸数28.89万戸、そのうち農村戸数は25.7万戸である。労働力は45万人、余剰労働力はその３分の１を上回る約16万人に達している。山東省の中で最も経済発展が遅れ、都市への出稼ぎ者数が最も多い地域でもある。出稼ぎ者の留守家族の生活実態や意識を把握するには、最もふさわしい地域であろう。

そして鄆城県は12鎮と９郷に別れている（図２）。その最南部に位置する南趙楼郷は人口3.5万人で、1990年代以降、多数の青壮年が都市へ出稼ぎに行っている（表2）。2009年の第２次調査時点では、20～40歳代の青壮年はほぼ100%が出稼ぎに出ていた。その一方、2002年に「村村通公路（各村間での自動車道路）」の開通に伴い、大規模な野菜生産基地や木材工場（18ヶ所）、機械加工工場（１ヶ所）が開設され、1,200人の農民に雇用が確保された。また2008年、石炭生産基地が建設され、大量の雇用機

会が確保され、出稼ぎ農民の帰郷を促している。自営業を起業する帰郷者も多く、その戸数は260戸に達している。出稼ぎを中止して農村に戻る帰郷者の実態を把握するには、最もふさわしい郷である。

表１　各地区の人口構成および耕地面積

各市・県	総人口	都市人口		農村人口		耕地面性	比重
	万人	人口	%	人口	%	千ﾍｸﾀｰﾙ	%
全　国	132802	60667	45.7	72135	54.3	121715.9	100
重　慶	2839	1419	50.0	1420	50.0	2235.9	1.8
上　海	1888	1673	88.6	215	11.4	244.0	0.2
北　京	1695	1439	84.9	256	15.1	231.7	0.2
天　津	1176	908	77.2	268	22.8	441.1	0.4
広　東	9544	6048	63.4	3496	36.6	2830.7	2.3
河　南	9429	3397	36.0	6032	64.0	7926.4	6.5
山　東	9417	4483	47.6	4935	52.4	7515.3	6.2
四　川	8138	3044	37.4	5094	62.6	5947.4	4.9
江　蘇	7677	4169	54.3	3509	45.7	4763.8	3.9
河　北	6989	2928	41.9	4061	58.1	6317.3	5.2
湖　南	6380	2689	42.2	3691	57.9	3789.4	3.1
安　徽	6135	2485	40.5	3650	59.5	5730.2	4.7
湖　北	5711	2581	45.2	3130	54.8	4664.1	3.8
浙　江	5120	2949	57.6	2171	42.4	1920.9	1.6
広　西	4816	1838	38.2	2978	61.8	4217.5	3.5
江　西	4400	1820	41.4	2580	58.6	2827.1	2.3
遼　寧	4315	2591	60.1	1724	40.0	4085.3	3.4
黒竜江	3825	2119	55.4	1706	44.6	11830.1	9.7
貴　州	3793	1104	29.1	2689	70.9	4485.3	3.7
福　建	3604	1798	49.9	1806	50.1	1330.1	1.1
山　西	3411	1539	45.1	1872	54.9	4055.8	3.3
吉　林	2734	1455	53.2	1279	46.8	5534.6	4.6
内モン	2414	1248	51.7	1166	48.3	7147.2	5.9
海　南	854	410	48.0	444	52.0	727.5	0.6
雲　南	4543	1499	33.0	3044	67.0	6072.1	5.0
西　蔵	287	65	22.6	222	77.4	361.6	0.3
陝　西	3762	1584	42.1	2178	57.9	4050.3	3.3
甘　粛	2628	845	32.2	1783	67.9	4658.8	3.8
寧　夏	618	278	45.0	340	55.0	1107.1	0.9
新　疆	2131	845	39.6	1286	60.3	4124.6	3.4

（『2008年人口変動サンプル調査』より筆者作成）

表2　山東省農村から都市への労働力移動状況

年	移動人口（万人）
2001年	24.1
2002年	94.0
2003年	131.3
2004年	96.2
2005年	191.8
2006年	22.3
2007年	62.8

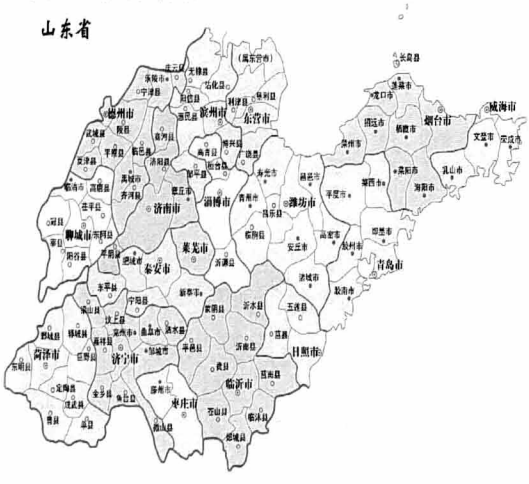
（『山東省統計年鑑2008』より筆者作成）

表3　荷澤市各県人口（2007年）

区・県	户籍人口
荷澤市	9,141,962
牡丹区	1,460,471
曹　県	1,507,591
単　県	1,190,055
成武県	652,090
巨野県	962,076
鄆城県	1,152,864
鄄城県	815,992
定陶県	639,819
東明県	761,004

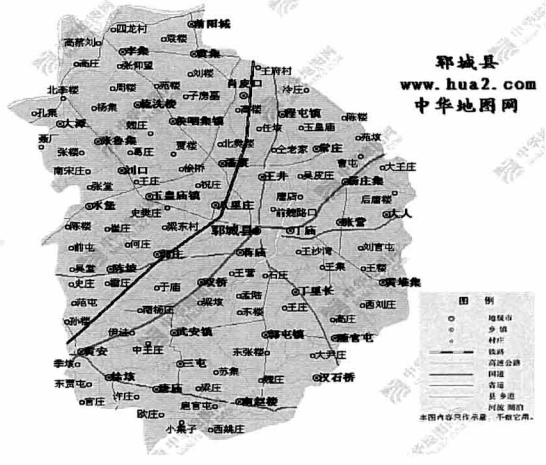
（『地方統計年鑑2007』より筆者作成）

図１　山東省各区



（『中華地図網　http://www.hua2.com』より）

図２　鄆城県各郷



（『中華地図網　http://www.hua2.com』より）

注

注１：2001年5月26日、中国政府は農民の移動を促進するため、2001年10月から２万余の小都市で戸籍制度改革を実施した。原則として「小城鎮の戸籍管理制度の改革推進に関する意見」の中で①安定した住所、②合法的職業について収入があり、③同居する直系親族がいるという三条件を満たせば、本人の希望で農村戸籍を都市戸籍に変更、取得できることとした。

注２：大島（1996）、南・牧野（1999）、鐘（2000）、温・悠（2001）、石田（2002）、楊（2007）など。

注３：生活過程分析に基づく社会変動論については、布施鉄治(1976)、浅野慎一(2005)等を参照。布施鉄治(1976)は、「諸個人の現実の『社会的労働―生活過程』のレベルにまでおりて、彼らの現実的な行為をとおして、社会それ自体が構造として、総体として発展するその間をいわば縦断する論理の構築」を志向した。これを批判的に継承した浅野慎一(2005)は、
この方法論の特徴を、以下の５点として総括している。①諸個人をとりまく客観的諸条件の把握にとどまらず、諸個人が、それらの諸条件を自らのトータルな「生命―生活（life）」の発展的再生産過程にいかに主体的に位置づけているのかを把握する。②諸個人の現時点の生活過程を、過去の生活史の帰結として、また将来展望への橋頭堡として、史的文脈に位置づけて把握する。③諸個人の生活過程における自然―社会的な「多様性/異質性」（身体、性、階級等の違い）、及び、それらを通底する人間としての「普遍性/同質性」の相互連環を把握する。④諸個人の客観的―主観的な生活過程を、彼・彼女らの行為やその交織からなる社会諸関係・集団、及び、組織・機関・機構―総じて協働様式―との関連で明らかにする。⑤諸個人が「生命―生活」の発展的再生産を目指すという前提以外の、研究者側のあらゆる主体性をいったん保留する。

第１章　　農民出稼ぎ者の生活と意識

——北京の農民出稼ぎ者の事例を中心に——

本章の課題は、北京で働く農民出稼ぎ者の生活と社会意識の実態をふまえ、現代中国における農民出稼ぎの社会的意義を考察することにある。

第1節　基本属性

まず、対象者の基本的な属性についてみよう（表１－１）。

第１項　出身地と学歴

本章で対象とした出稼ぎ農民の出身地は山東省が最も多く、河北省がそれに次ぐ。いずれも北京から比較的近い省の農村出身者である。空間的距離や交通の便が、出稼ぎ先を選択する重要な条件になっていると推測されるが、それだけではない。出稼ぎ者に関しては、出身地による信用度の差があり、山東省の出身者の評価は高く、したがってここの出身者が多くなるのである。

＊「山東省の出身。山東省出身者が、北京では一番人気がある。河南省人はよく山東省の人のふりをしている。山東省人は北京で多く、何かあったら互いに手伝い合う」

「山東省の出身。山東省は北京に近い。都市で運転手を募集する会社が一番募集したいのは現地の人で、次いで出身地が都市に近い人だ。都市から遠い出身地の人は北京の地理がよく分かっていないから会社も安心できないし、運転手の仕事を見つけにくい」

最終学歴は中学校が多いが、高校や専門学校の卒業者も見られる。総じて彼・彼女らは非識字・不就学ではなく、一定の知識・学歴を持っていると言える。ただ、特に26歳以下の世代では中学までの学歴が多く、中には中学を卒業しないまま出稼ぎを始めた者もいる（注１）。また故郷の農村では、親が経済的な理由で子どもに学業を断念させたり、あるいは娘は退学させて息子を進学させるという慣習も存在している。

＊「中学中退。学校の成績は悪かった。ちょうど、親戚が北京で働いている会社が、故郷で大量募集をした。それで中学２年生の時に退学した。その親戚の紹介で、出稼ぎにきた」

「小学校中退。20年前、僕が20歳前の頃、農村はとても貧しかった。兄弟も多く、農業も大変だ。それに僕は長子だから、小学校３年生で退学した。『男女のトイレが区別できれば十分だ』と両親は言っていた」

「中学卒だ。兄が１歳上で、私と同じクラスだった。成績は良かったが、２人分の進学費を両親は負担できないので、仕方なく、私は高校へ行かず、チャンスを兄に譲った。もし当時、政府が12年制の義務教育を実施していたらよかったのにと、今もその夢をよく見る」

「小学校卒。私は弟と双子だが、２人一緒には学校へ入りにくかったので、私は退学して、弟だけ中学校に入った。今、弟は大学生で、私の貯金はほとんど弟にあげている。弟のために退学したので、少し残念な気持ちがある」

表1-1　調査対象の基本属性

性別	年齢・人数	男性		女性		合計
		26歳～	16～26歳	26歳～	18～26歳	
		15	19	5	12	51
学歴	小学校	3		1		4
	中学校	4	14	3	6	27
	高校	2	4	1	4	11
	専門学校	5	1		1	7
	大学	1			1	2
婚姻状況	既婚・子有	13	3	4		20
	既婚・子無	2	1			3
	未婚		15	1	12	28
家族との同居状況	配偶者・子供同居	6	1	2		9
	配偶者・子供留守	4	2			6
	配偶者同居・子供留	2		2		4
	配偶者同居・子供無	1	1			2
	配偶者他出稼ぎ先・子供無	1				1
	配偶者他出稼ぎ先・子供留守	1				1
出身地	山東省	9	4	2	2	17
	河北省	2	6		4	12
	四川省	2		2	2	6
	河南省		3		1	4
	山西省		2		1	3
	黒竜江省		3		1	4
	その他	2	1	1	1	5
家族人数	3人	4	5		2	11
	4～6人	7	14	2	10	33
	6人以上	4		3		7
一人当たりの耕地面積	1畝以下	3		2	1	6
	1～2畝	10	14	3	11	38
	2畝以上		4			4
	無回答	2	1			3

資料）実態調査より作成

第２項　家族構成

次に家族構成をみよう。

26歳以上の男性は既婚で子供がいるケースが多く、逆に26歳以下の世代では男女ともに、未婚者で子供がいないケースが多数を占めている。聞き取りからは、農村的慣習に基づく早婚、農民出稼ぎ者であ

るがゆえの結婚上の不利といった事情が見えてくる。

＊「僕は、小学校５年生で13歳の時に、もう婚約した。その時はまだ、『妻』という言葉の意味も全然分かっていなかった。農村で、特に僕の両親は『早く結婚すれば早く孫ができる』と思っていたので、中学校を卒業するとすぐ結婚させられた」

「今、結婚相手を見つけにくい。好きな女の子がいるが、その子は僕のことを気に入っていない。ちょっと条件がいい女の子になると、もっといい男と結婚したがる。僕は故郷へ帰ると、ほとんど毎日お見合いに行く。疲れるよ。今、帰省と言うと緊張する（笑）」

子供との関係をたずねると、同居／別居、心配の有無にかかわらず、子供の存在およびその教育が出稼ぎ者にとって極めて重要な問題となっていることが伺える。また、北京で同居する場合、高額な学費が大きな懸念になっている。

＊「子供は故郷にいるが、去年、妻は故郷に戻った。息子がよく殴り合いのけんかをして、何回も学校で処分された。このままいくと、息子が健全に成長しない。だから、夫婦のうち１人が出稼ぎをやめて、故郷に戻ることに決めた。僕の方は収入が高いし、仕事歴も長いし、男だから単身赴任でも妻よりは安心だ」

「故郷に子供は２人いて、上の娘が13歳、小学校６年生で、下の息子が７歳、小学校１年生。２人ともいい子だ。勉強もまじめだし。特に、娘は他の子より物分かりがいい。弟の世話をよく見るし、祖父母の農業も手伝っている。この子たちのために、僕は必死に努力する」

「子供は農村で両親と一緒に生活している。もう小学校６年生だから自立できる。一番心配なのは勉強だが、成績があまり良くない。僕と妻が北京で一生懸命働く目的は一つしかない。それは子供の将来のためだ。出稼ぎに来ると、親の目が届かず、子供の成績が良くなりにくい。でも出稼ぎに来ないでお金を稼ぐのはもっと難しい。子供を連れてきて北京の学校に入れたいが、入学金を１万８千元位出さないと入れないので…困ったなあ」

「今、子供は北京で同居しているが、将来、北京の学校へ入れるか、故郷へ戻るか迷っている。北京の学費は高い。今、娘は幼稚園だが、幼稚園の費用は安くても500元かかるので、ずっと行かせなかった。けれど、小学校の時はどうしようかと悩んでいる」

「北京で同居している娘は３歳で、北京の幼稚園に入っている。月に500元、月謝がかかる。小学校に入る時には２万元位入学金がいるそうだが、その時の経済状況によって、北京にいるか故郷へ帰るか決める」

周知のように、中国では一人っ子政策が実施されている。しかし、農村では１人目に女の子が生まれると、法律違反を覚悟の上で２人目の子供を産むことが多い。そのため４～６人家族が多くなっている。農村では男尊女卑の意識がまだ残存していることの表れでもあろう。北京へ出稼ぎに出て都市的な価値観に触れても、その意識は容易に変わらないと言えよう。

＊「男女平等とはいえ、最初の子供が男の子だったら、２人目の子供を産まない家庭が多い。でも最初の子が女の子だったら、ほとんど２人目の子を産む。もし２人目の子もまた女の子だったら、流産したり、出産してから八方手を尽くして３人目の子を産む」

「僕の家族は何代にもわたって男子１人だけの家系だ。僕は４人きょうだいで、姉２人、妹１人。僕には娘が２人いるが、計画生育政策によって、僕たちはもう子供を産むことができない。でも、

男の子がいないので両親が許してくれず、僕も男の子が欲しい。だから去年、政府に隠れて、3人目の子を産んだ。今度は男の子だったが、ほっとすると同時に悩みも出てきた。戸籍も取れないし、故郷へ連れて帰れず、経済的負担もひどくなった。ただ、妻はよく後悔するけど、僕は後悔しない」

「1人目の子が男の子でも、2人目の子を産む家族は多い。一人っ子の家族は農村ではほとんどない」

第3項　故郷での生業と所有耕地面積

故郷での生業は、いうまでもなく農業が多い。

ただし現代中国の農村では、都市化に伴って工場・道路への農地の転用が著しく、農地が急速に減少している（注2）。また上記のように、農村では一人っ子政策に違反する家族が多く、戸籍を取れない子供が少なくないため、実際の1人当たりの耕地面積は減少している。調査対象者においても、1人あたり1～2畝（畝＝0.0667ha）の保有にとどまる層が最も多かった。これもまた、農村労働力が過剰化し、出稼ぎ流出や兼業化を促進する要因の一つである。

＊「以前は農地が多かった。平均で1人当たり2畝。農産物の収穫にも人力ばかり使っていた。今は、収穫機械も雑草防止の農薬も、トラクターもある。それに、農地が減った。住宅に使うか、郷に回収されるか、工場の建築に使うか、だ。それで今、1人当たり1畝ほどになった。うちは0.8畝しかない。冬になると農作業はないから、父と妻は近くの木材工場で臨時の仕事をしている」

「1.2畝を所有している。父は村の建築隊員になって、建築をするために、近くの村をまわっている。収入も少なくない。1日60元ぐらい。冬の農閑期は雨の日以外、ほとんど仕事できるから、月に1,500元稼ぐのも無理ではない」

第2節　出稼ぎにみる労働――生活史

では次に、対象者のこれまでの出稼ぎにおける労働－生活歩みについて、みていこう（表1-2）。

第1項　出稼ぎの動機・目的

まず、出稼ぎの動機・目的をみると、「自分の視野を広げたい」および「新しい技術を習得したい」が最も多かった。また、「とにかく農村から出たい」、「都会での生活を経験したい」という動機も見られる。出稼ぎの動機の背景には、生活のあらゆる場面にみられる都市と農村の格差という認識が横たわっている。

具体的な声としては、まず経済的な動機がある。ただしそれは絶対的貧困というより、農村の都市化に伴う支出の増加、および都市との経済格差である。

＊「農業収入だけでは、衣食を満たすことはできるが、子供の学費とか、現代的な生活用品とか農業器具の購入のための費用はない。だから出稼ぎに行く」

「農村での生活水準は、昔よりはよくなった。でも、都市市民はテレビを持っているが、農村では電気がまだ普及していない。都市市民はバイクに乗っているが、農村には自動車用の道路もないし、家族全員に一台の自転車しかない。都市市民がブランド物の衣服や今年の流行についてあれこれ議論している時、農村では母親の手作りの服と靴下を着続けている。一言でいえば、農村は永遠に都市より遅れ続けるということだ」

大学・高校等への進学が困難な中で、それでも自らの将来を切り開きたいと念じ、出稼ぎに出ることを選んだケースもある。

＊「僕は高校の学費が払えず、入学試験に合格しても高校に入れなかった。仕方がないから何年間も農業に従事した。過去、僕より成績が悪い同級生が次々に大学や専門学校に行って、僕は納得がいかない。学歴は低くても自分の人生を変えたかった」

「僕は大学入試に落ちたから、農村ではつまらないし、前途も見えない。大学に入らなくても、北京へ行って他の道を探し、大学生に負けないことを証明したい。しかも、農民の生活はとても苦しい。農産物の価格も低すぎるし、収入も低い。農民としての現状から抜け出したい」

農村の厳しい現況をふまえ、「とにかく農村から脱出したかった」との動機も多く聞かれる。

＊「農村の生活はとてもしんどいと感じ、自分の運命を変えたくて、外へ行ってみようと思った」

「農業は特に季節性が強く、夏・秋は死ぬほど忙しいのに、冬になるとすごく暇だ。農村で何もせずにぶらぶらしているより、外へ仕事に行ってお金を儲けたほうがいい。たとえ少しでも構わない」

「農村の人間は、都市市民より素朴にみえるが、実は農村での差別は激しい。貧乏なら兄弟姉妹にも見下される。それに農産物の生産量は過去より多くなったが、価格が安すぎるし、売れないし、収入はやはり少ない。だから出稼ぎに行く」

女性には、子供の教育に関連する都市と農村の格差に言及し、これを出稼ぎの動機としているケースもみられる。都市への出稼ぎは、子供の将来を考えた農村からの脱出の第一歩と位置づけられているのである。

＊「都市の子供は３歳になると幼稚園に入るが、農村では幼稚園は珍しい。８歳になるまで子供は毎日、河や林や山で遊んでばかり。彼らは音楽、映画、踊り、英語とかを全然知らない」

「小学校から高校までの教育水準も比べものにならない。農村の子は大学に入るために毎日勉強してばかりで、娯楽など思いもよらない。しかも、都市の子は450点で有名な大学に入れるが農村の子は700点以上取らないと入れない。500点以下だと専門学校にも入りにくい。だから毎日勉強しなければならない」

第２項　出稼ぎの手づる

出稼ぎに実際に踏み出すには、何らかの手づるが必要になる。

本稿の対象者の手づるは、先に出稼ぎをしていた親戚や友人の紹介であることが圧倒的に多い。農民出稼ぎ者が都市へ出稼ぎに出て仕事を見つける際、私的ネットワークが大きな役割を果たしていることが分かる。職業斡旋業者や労働市場センター、人材市場センターを利用したケースはごく少数にとどまる。労働市場センターや人材市場センターが整備され始めたのは2000年以降であり、その認知度が少しずつ高まってきていることはインタビューからもうかがえたが、依然として私的な人間関係が手づるの主流であると言えよう。また民間の職業斡旋業者には高額の紹介料をとる悪質な業者も多く、信頼性の点でも問題がある。

＊「親戚や友人が自分が働いている工場を紹介してくれたり、同じ業種の近くの工場を紹介してくれ

表1-2　過去の出稼ぎ経歴

性別		男性		女性		合計
		26歳～	16～26歳	26歳～	18～26歳	
年齢・人数		15	19	5	12	51
出稼ぎの動機（複数）	子供の教育費	6	1	2		9
	家の購入・建築費	7	4	2	2	15
	家族医療費					0
	起業資金	3	5	1	1	10
	農業資金	2	1			3
	それ以外の資金	1	1		1	3
	視野の拡大	6	12	3	10	31
	新技術習得	9	9	5	8	31
	農村脱出	3	5	1	1	10
	都市生活経験	2	6	1	2	11
過去の出稼ぎ先	北京	15	19	5	12	51
	東部沿海都市	2				2
	上海・広州等大都市	1	2		1	4
	大連など東北地方	1	2			3
	出身地地方都市	2	3		2	7
過去の業種	製造業	2	1	1	4	8
	建築業	4	7			11
	サービス業	9	13	4	11	37
	交通運輸業	6	4			10
過去の雇用形態	臨時	13	18	2	6	39
	契約	5	6	3	9	23
	自営業	3	1			4
雇用期間	1年間以内	6	15		9	30
	2～3年間	2	4	2	4	12
	3年間以上	13	6	3	2	24
仕事の手づる	親せきや友人	15	18	5	11	49
	職業斡旋業者	1	1		2	4
	出身地での募集	3	2		1	6
	労働市場センター		2			2
	人材市場センター	2			1	3
	出稼ぎ先募集広告		2			
不払い経験	有	4	1			5
	無	11	18	5	12	46

資料）実態調査より作成。

たりする」

「労働市場センターはお金がかかるよ。それより親戚の方が信用できる」

「友人から紹介してもらった。出稼ぎに出始めた頃は、労働市場センターなど聞いたこともなかった。当時、労働市場センターがあったかどうか、僕も知らない」

「親戚の紹介。職業紹介所という名目の、民間の『地下職業紹介所』が多い。一般的にいって信用できない。その紹介所に入るといろんな費用がかかるし、仕事につく前に紹介費を払わないといけない。払ってもいい仕事を紹介してもらえる可能性は少ない」

「労働市場センターも人材市場センターも、政府が仕事を探す人のために設置したものだ。今では多くの人がその役割を知っている。私もそこから紹介してもらった。これからは、それらを使って仕事を探す人も増えると思う」

第３項　出稼ぎにみる職歴

これまでに経験した出稼ぎ先の地域・業種をたずねると、全員が、過去にも北京に来た経験があった。中には、出稼ぎに複数回出た経験のうち、すべてが北京だったケースもある。また業種に関しては、サービス業に従事した経験をもつ出稼ぎ者が最も多かった。マンションやビルのガードマン、清掃係、住み込みの家政婦、商店や新聞スタンドの販売員、レストランのウェイターやウェイトレス、自転車による宅配人、野菜売りなどである。

＊「以前、ホールスタッフとして働いた。サービス業はレベルが低い仕事が多く、技術も必要なく、未経験者も歓迎なので、初めて出稼ぎに来た農民にとっては一番つきやすい」

過去の雇用形態は、臨時雇が多い（注３）。対象者の多くは、短期間に何度か仕事を変えた経験をもっており、頻繁に雇用、解雇、再雇用を繰り返している状況がうかがい知れる。ただ、そこに見られる出稼ぎ者の意識は様々で、臨時雇を敬遠するだけとは一概には言えない。

＊「臨時雇は嫌だ。いつでも解雇される可能性があるから、次の仕事に困る。契約期限があらかじめはっきり決められた契約雇だったら契約期間が分かるから、期限が近づく前にいろいろ準備できる」

「どんな仕事でも同じだ。今の仕事をやめても、いい仕事は見つからない。しかもすぐ仕事を見つけなければ、金や時間が無駄になる」

「ほとんど臨時雇だった。忙しい時期に人員を数多く募集して、暇な時期には解雇する会社がよくある。僕は臨時の方がいいと思う。農繁期や、留守家族に急用がある時に帰省できるから」

過去の雇用期間は、男女を問わず若い世代の場合、短期間であることが多い。それは前述のように、雇用者側の都合だけでなく、出稼ぎ者の側にも、収入や職場環境を考慮して、新たな出稼ぎ先に移っていこうという意識が見られることも影響している。長期契約を望むとしても、あくまで自分の希望に見合った職場であれば、という条件付きである。

＊「過去の雇用期間は、最短で８カ月、最長で１年６ヶ月。少しでも高い収入の仕事があれば、または知人の紹介があれば、現在の仕事を簡単に辞めて新しい仕事へと赴いてきた」

「過去の雇用期間は、最短で２カ月、最長で４年１ヶ月。初めは上海の木材工場へ行った。外から見ればそこの工場は明るく広いし、立派で寮もよく、夫婦の部屋もあった。でも、そこの労働者

は皆、足にも腕にも背中にも瘡ができていた。流れ作業中に“固化水”という液体が跳ねて皮膚にかかるとすごくかゆくなる。掻くと、ただれてしまった。すごく怖くて１ヶ月後、我慢できなくなった。その時ちょうど、近くの繊維加工工場が募集していた。給料は木材工場より安かったが、仕事を変わりたかった。けれど、その工場も粉塵まみれで汚く暗く、仕事も忙しくて、寒さも暖かさも気がつかなかった。でも、やはり上海だから、仕事が苦しくても同僚たちは恨み言も言わなかった。２年後、北京で働いている親戚に通信工事の仕事を紹介してもらったから、その工場の仕事をやめて北京へ来た。以前の仕事と比べると今の仕事が一番いいと思う」

第４項　賃金不払いの経験

一部だが、過去の職場で賃金の不払いを経験したケースがある（注４）。強いていえば、年長の男性出稼ぎ者に不払い経験が多い。年長の出稼ぎ者は出稼ぎの開始時期が相対的に早く、出稼ぎに関する彼ら自身の知識不足もさることながら、出稼ぎ者を保護する制度や政策も整っていなかったからである。当時の出稼ぎ者の受け入れ先は主に個人経営の工場が多く、「騙しやすい農民出稼ぎ者に、給料など支払わなくても当たり前」といった風潮すらあった。また不払いが発生したケースは、「工事が終了したら給料を一括で払う」、「年末に清算する」、「会社の資金のやりくりがついた時に払う」といった、不定期の支払い方式であった。

＊「ある住宅建築工場で働いたが、工事を請け負った開発業者から直接給料が支払われるわけではなかった。給料は、現場の親方を通して支払われるという口約束で、しかも月額100元だけで、残額は工事終了後に一括して支払うという話だった。ところが、工事終了間際、親方は労働者の給料を持って逃げ、給料は支払われなかった」

「家具製造工場で働いたが、会社が破産したため、３ヶ月分の給料が不払いとなった。騙しやすい農民出稼ぎ者に、給料など支払わなくても当たり前だと思われている」

「木材加工工場で働き、春節（旧正月）の休みの際、雇い主から『来年も継続してここで働けば、最後の２ヶ月分の給料を払う』と言われた。でも、春節に帰省して、親戚の紹介で別の会社で働くことになった。そのため、前の会社の２ヶ月分の給料が支払われなかった」

「木材加工の会社を辞めた時、会社側から『今は会社にお金がないから、後で払う』と言われ、給料を全額受け取れなかった。その後、何度も支払いを要求したが、『お金はない、責任者はいない』の一点張りだ。１元ももらえないばかりか、交渉のための交通費も自己負担だ。仕方ないと思い、給料の受け取りを諦めた」

第３節　出稼ぎ先での労働過程

では、調査時点の北京における出稼ぎの労働－生活過程とそこでの諸問題をみていこう（表1－3、表1-4）。

第１項　業種（表1-3）

まず業種をみると、対象者の過半数がサービス業に従事している。1980年代以降、中国では第３次産業が急速に発展しつつあるが、過去の業種でも見たように、サービス業には特に技術を必要としない仕事が多く、未経験者でも歓迎するので、出稼ぎ農民にとっては就きやすい業種となっている。その一方でサービス業では、「仕事がつまらない」といった悩みも聞かれる。

表 1-3　業種・労働時間・休日

性別		製造業	建築業	サービス業	交通運輸業	合計
	年齢・人数	4	8	29	10	51
男性	26歳以上	1	3	5	6	15
	16～26歳	1	5	9	4	19
女性	26歳以上	1		4		5
	18～26歳	1		11		12
1日の就業時間	8時間	4	3	15	2	24
	9時間			8	6	14
	10時間		5	2		7
	11時間			1	1	2
	13時間			1		1
	14時間			2	1	3
昼休みの時間	無			9	2	11
	1時間		3	7	5	15
	1.5時間			1		1
	2時間	2	5	5	3	15
	2.5時間	2				2
	3時間			6		6
	自由			1		1
1週間の休日数	無		3		1	4
	1日	3	4	25	7	39
	2日	1		3	1	5
	不定		1	1	1	3
冬休み日数	無			5	1	6
	5～10日			15	1	16
	10～20日	4	5	6	7	22
	20日～		2	1		3
	不定		1	2	1	4

資料）実態調査より作成。

またほとんどの対象者が、出稼ぎ先で初めて就いた業種と同じ業種に、現在もなお就き続けている。何か技術を持っていなければ仕事が容易に見つかりにくい以上、どうしても最初に就いた業種にその後の職歴は影響されるのである。

＊「スーパー店員を続けている。別の仕事を見つけるのは簡単じゃない。人から仕事を紹介してもらう場合でも、同業者の友人や親戚が多いから、職場は変わっても、職種は変わりにくい」

「ホールスタッフをずっとしている。何の仕事でも経験が大事だ。経験がないと、仕事を見つけるのは難しい」

「西洋料理店で働いている。経験があれば、未経験者より給料が高い。だから職場はいろいろ変わっても、仕事の内容は変わらない。この仕事に慣れたから、他の新しい仕事をする自信はない」

第２項　労働時間・休日（表1-3）

調査時点の就業時間は、ほとんどの者が８～９時間だが、中には13～14時間の長時間労働をしている者もいた（注５）。また、表向きは標準的な労働時間数でも、実際には多くのサービス残業をこなしている者もいる。「サービス残業の多さ」や「仕事のきつさ」は、出稼ぎ者の主要な悩みの一つである。昼休みは２時間以上と長い場合も多いが、その一方で全く昼休みがないケースもあった。

＊「１日８時間働き、朝８時から夕方４時まで、または夕方４時から夜12時までの交替制だ。ただし食事の時間を15分取れるだけで昼休みは全然ない」

「工場には食堂がないから、昼ご飯は同じ寮の人で交替で自炊している。ちょうど７人いるから、１週間のうち１日は１人でご飯を作る。朝７時から仕事なので、それまでに朝ご飯を済ませないといけない。昼休み、当番の人はご飯を作ったり洗い物をしたりしてほとんど休めない。仕事は８時間勤務だが、実際には忙しく、工期の期限までに終わらないと給料が引かれるから、一生懸命やらないといけない」

「勤務時間は９時間だが、サービス残業が多く、平均すると毎日10時間以上働いている。忙しい時は、18時間以上の連続勤務も少なくない。運転手なので、疲れた状態で運転するのは危なく、妻がすごく心配している」

毎週の休日は大半が１日である。ただし冬休みの日数では、大きく長短の２群に分かれる。日数が短くて旧正月に故郷に帰れない者の中には、「どうしようもない」という顔をして涙を溜める者もいた。サービス業では休日が短い職場が特に多い。

＊「冬休みは３日しかなく、うちは北京から遠いから、旧正月は帰れない。何人かと一緒に北京で新年を迎える。寂しいけれど、北京は爆竹が禁止されているから、その音を聞かないだけちょっとましだ」

「冬休みは５～６日だが、往復に２日間かかるから、家族と一緒にすごせる時間は３日間しかない」

「冬休み７日で、旧暦の大みそかに家に着き、新年当日は家族や近隣と一緒にすごし、２日は親戚のお宅へ行かなければならない。３日にはもう出稼ぎの準備。５日朝、北京へ戻らないと、会社に首にされる」

「冬休みは20日ある。年初は会社に来る注文が少ないからだ。大体、正月の下旬から注文が多くなる。注文が少ないと仕事も少ない。だから僕たちの休みも多くもらえる。家の遠い人は18～20日、近い人は15～18日位休める」

第３項　賃金と労災保険（1-4）

「賃金が少ないこと」も、出稼ぎ者の主な悩みの一つである。ただしそれでも、現在の賃金水準には、肯定的な評価も比較的多い。出稼ぎを始めた当初は、経験もないため低く抑えられるが、経験を積めば将来的に上がるだろうという希望が、肯定的な評価につながっている。また出稼ぎ開始以前の農村での収入に比べれば、出稼ぎ先で相対的に高い収入を確保できていることも事実である。しかし現実の生活の必要をふまえれば、「賃金の少なさ」に悩まされている出稼ぎ者が多いことも、否定しえない。実際

には、出稼ぎを始めてからの期間だけでなく、会社の規模、子供にかかる費用、生活のレベルなどの多様な要因によって、金額の多寡と満足度は必ずしも一致しているわけではない。

＊「出稼ぎを始めたばかりなので給料が少ないが、経験さえ積めば給料も上がるだろう」

「800元の収入がある。これは多いとはいえないが、それでも農村での農業収入よりずっと多い」

「出稼ぎを始めて10年になり、今は月収2,400元になり、新卒の大学生の給料と同じくらいの水準になった。とても満足している」

「私は800元、夫が2,400元だ。高いといえば高いが、子供が大きくなったら、もっとお金がかかる。今の収入で足りるかどうか心配している。無理なら故郷へ子供を送り帰し、両親に面倒を見てもらう。もしくは、私が出稼ぎをやめて故郷へ帰る。主人の給料の方が私より高いから、私がやめるしかない」

「本人は950元、夫6,000元だ。会社の規模によって給料が違う。ずっと北京で自分の部屋を買いたいと思っていたが、子供の面倒をみるため、3年間ほど仕事ができなかった。子供が病気になった時の保険料などは全部貯金から出していたから、貯金はあまり残っていない。北京の部屋の値段はすごく高いので、ローンで買うにしても、最初に15万元ないとローンも組めない。夫の収入は少ないとは言えないが、多いとも言えない」

彼・彼女らが最も心配している事態は、賃金の不払いである。前述のように、実際に賃金不払いを経験した出稼ぎ者もいるし、またそうでなくても、いつ自分がそうした事態に遭遇するかは、多くの出稼ぎ者の不安の種になっている。

労災保険は、未加入者が半数以上を占める。リスク管理の意識が低いというよりは、むしろリスク管理手段の中に保険という選択肢が入っていない、という口ぶりである。

＊「保険には入らなくてもいい。自分で注意したら大丈夫だ」

表 1-4　月収・満足度及び労災保険

性別		男性		女性		合計
		26歳～	16～26歳	26歳～	18～26歳	
年齢・人数		15	19	5	12	51
月収（ボーナス含み）	1000元未満	4	12	2	6	24
	1000元～	5	5	1	5	16
	1500元～	1	1	2	1	5
	2000元～	5	1			6
月収の満足度	とてもよい	2		1		3
	ややよい	6	6	3	5	20
	どちらとも	2	3		5	10
	やや低い	3	7	1	1	12
	とても低い	2	3		1	6
労災保険の加入	加入	4	2	8	4	18
	未加入		6	21	6	33

資料）実態調査より作成。

「保険に入るかどうか会社に聞かれたことがあるが、保険料が給料から差し引かれるから、考えてやはり入らないことに決めた」

「保険なんか入っても入らなくても。何の違いがあるの。事故に遭ったら自分が不運だったということだ」

第４節　出稼ぎ先での生活過程と社会諸関係

では次に、調査時点の出稼ぎ先での生活過程、および社会諸関係についてみよう。

第１項　居住環境（表1-5）

出稼ぎ先での住居は、若い世代を中心に、会社の寮に住んでいる人が多い。そこで、同居人数も多い場合が多い。こうした居住環境に、多くの出稼ぎ者は特に不満はもっていない。なぜなら、住居条件が悪くても、それは自分の後々の目的のための節約であり、しかも寮は治安面でも安全・安心だからである。

＊「会社の寮に４人が同居している。北京の家賃は高い。少なくとも月200元はかかる。会社の寮は狭いが、家賃がいらない。費用の節約の方が大事。人数が多ければ寂しくない」

「会社の寮で家賃が月50元で済む。８人で同居している。家賃が安いし、皆、一緒に住んでいるから怖くない。何かあったら互いに世話をする」

「会社の寮で、家賃は月50元、８人で同居。会社の寮は家賃が安いし、１人で住むよりお金も節約できるし、にぎやかでいいじゃないか」

「無料の会社の寮に、３人で同居している。女の子は会社の寮だと安心だ。一部屋に３～４人で住み、安全という感じがする」

「会社の寮に家賃は月50元、８人で同居している。出稼ぎ先の住居は一時的な休憩の場所にすぎないから、どこでもいいじゃないか。ここで何年間か我慢して、お金を貯めて、故郷に新しい家を建てる。その家こそ、自分の家だ。その家のためなら、今はどんな住居でも構わない。気にしない」

表 1-5　居住状況

性別		男性		女性		合計
		26歳～	16～26歳	26歳～	18～26歳	
年齢・人数		15	19	5	12	51
住居状況	会社の寮	4	11	1	10	26
	賃貸アパート	10	6	4	1	21
	親戚・友人の家	1	1		1	3
	自分で買った家		1			1
同居人数	1人		1			1
	2～5人	14	8	4	6	32
	5～8人	1	10	1	6	18

資料）実態調査より作成。

ただし、年長の世代では、賃貸アパートに居住するケースが多くなる。中には、「会社の寮は独身向けだ。夫婦向けの寮はない。家賃が高くても賃貸アパートに住むしかない」と不満を漏らすケースもある。

第２項　消費生活と送金・貯金（表1-6）

大半の出稼ぎ者は、収入の中から送金を行っており、これは実家である農家にとって主な収入源となっている。また貯金も、月に200元以上しているケースが多い。ただし、貯金額に関しては年長者の方が若干多く、年少者は相対的に月収が低いこともあってか、貯金にまでは多くの金額を回せないようだ。貯金の用途・目的としては、家の新築・リフォームのためという答えが最も多い。また子供をもつ者が多い年長者は、学費にあてる場合が多いという特徴がある。

＊「月収900元のうち、400元を毎月、故郷の妻子に送金している。これは主に子供の学費だ。それ以外に毎月300元を貯金している。年末の帰省時には、家族がよい新年を迎えることができるようにと、貯金の一部を渡している。自分自身の毎月の生活費は200元ということになるが、会社の食堂で食べる食費が50元、タバコ銭が30元程度、時々同僚と一緒に酒を飲んで使うのが30元程度で、それ以外の支出は極力おさえている。少しでもお金が残れば貯金にまわし、妻子のために衣服を買ったり、老いた両親に渡すようにしている。娯楽だって？そんなお金はないよ。故郷の妻子が首を長くして僕の送金を待っているからね。唯一の娯楽は、休日に同僚と一緒にお酒をちょっとだけ飲むことだ」

「送金額は500元で、貯金額は800元。子供が結婚する時、新しい家を建てないといけない。大きい支出だから何年間か貯金しないといけない」

「送金額は500元、貯金額は100元。弟はまだ中学生だが、もうすぐ高校に入る。高校に入ったら、学費が高くなる。両親の負担を軽くするために、自分が貯金して、弟の学費にあてる予定だ。もし弟が大学に入れば、もっとお金がかかる。その時、両親の収入だけでは支えられない。どうしても弟には大学に入ってほしい。この社会では、学歴が高い方が仕事を見つけやすい。僕のように中学卒で技術もない人は、肉体労働をやるしかない。それだと給料のアップはなかなか難しい」

「給料は少なく、生活必需品以外のための費用はない。僕が10歳の頃、母は病気で亡くなった。その後、父１人で僕を育ててくれた。実は高校へ行きたかったが、行って大学に入っても、大学の学費を父１人では負担できない。それに、今は大学生でも仕事を見つけにくい。僕はよく考えて、高校への進学をやめた。早めに社会に出て、仕事に従事して、経験を積むことが、僕にとって一番いい選択だと思う。出稼ぎに来たばかりで給料も低いけれど、月600元位、父に送っている」

「貯金額は1,500元。貯金の一部は両親へ送って弟の学費に使う。残りは自分で貯めて、結婚や将来の自分の生活のために使う」

「貯金額は200元。自分で自分の生活を維持できているので、両親の負担は軽くなった。給料は低く、送金はできない。ちょっと貯金があれば、彼女にプレンゼントを買ってあげたり、一緒に遊んだりして全部使う。残りは全然ない。もし彼女と結婚できたら、両親の負担は軽くなる。農村での結婚資金はとても高いから。自分で結婚相手を見つけられたら、そんなに大金はかからない」

「貯金額は1,850元。妻は大卒で成績はずっと優秀だけど、末っ子なのでわがまま。同僚との関係がうまくいくかどうか心配だ。夫婦でもっといい学校へ入って、勉強し続けたい。そのお金を貯

めている。貯まったら、先に妻を勉強させて余裕があれば僕も勉強したい」

出稼ぎ者は貯金の中から、留守家族に様々な生活上の利便性を提供している。彼らは、村に残っている家族の負担を減らしたいという思いを起点にして、農村の生活に様々な物を提供し、不断に農村の生活状況に影響を与えていると言えよう。

＊「以前は白黒テレビだったが、今、農村は皆、カラーテレビに変わった。2004年の旧正月に、うちもやっとカラーテレビを買った」

表 1-6　送金・貯金及び貯金用途・留守家族への利便性の提供

性別		男性		女性		合計
		26歳～	16～26歳	26歳～	18～26歳	
年齢・人数		15	19	5	12	51
一カ月の送金額	無	3	4		3	10
	200元以下	1	4	3	3	11
	200～500元	8	7	2	5	22
	500元以上	3	4		1	8
一カ月の貯金額	無	2	5		1	8
	200以下	1	6		1	8
	200～500元	3	6		7	16
	500～1000元	5	2	2	2	11
	1000元以上	4		3	1	8
貯金の用途（複数）	子供家族の学費	11	3	3		17
	老後の保障	3	3		5	11
	借金の返済		2			2
	農業機器の購入				3	3
	家の建改築	11	8	4	4	27
	息子・自分の結婚資金	1	1		1	3
利便性の提供（複数）	生産機具	8	6	3	3	20
	シャワー	2	1	1		4
	カラーテレビ	7	10	3	3	23
	洗濯機	5	1	3	1	10
	冷蔵庫	4	1		4	9
	三輪車	6	7	1	1	15
	水道		2	1		3
	暖房機		1			1
	クーラー	2				2
	学習用具	3	1	1		5
	ガス	7	2	1		10

資料）実態調査より作成

「農産物の収穫時は運搬が大変だ。以前の木の荷車では負担が大きいから、村にいる妻の負担を軽くするために三輪車を買ってあげた」

「故郷の山東省は、冬になるととても寒い。母は手にあかぎれができて、洗濯する時に辛い思いをするので、去年洗濯機を買ってあげた。水道はまだ完全じゃないし、都市に比べれば不便だけれど、家族はみんな喜んだ」

第3項　生活面の苦悩と楽しさ（表1-7）

表 1-7　北京の生活で困る事・楽しい事（複数回答）

性別		男性		女性		合計
		26歳～	16～26歳	26歳～	18～26歳	
	年齢・人数	15	19	5	12	51
困っている事	低収入経済苦しい	10	11			21
	物価高経済苦しい	8	15	3	5	31
	拝金主義が強い	2	1		1	4
	娯楽が少ない	1	2		1	4
	知識が少ない	10	6	4	6	26
	家族の病気・障害	2	3			5
	自分の健康・病気	2	2			4
	差別がある	1	3			4
	人脈がない	2	2			4
	生活リズム速すぎ	3				3
	友達親戚との交際		1		1	2
	住居条件が悪い	6	4	1	6	17
	治安が悪い		1		2	3
	生活習慣文化違う		3		3	6
	友達仲間がいない	1	2			3
	家族離れて寂しい		2			2
	将来の生活が不安	8	7	3	6	24
楽しい事	故郷に送金できる	9	12	2	3	26
	貯金がたまる	10	5	3	4	22
	便利な文化的生活		3	2	3	8
	自由な生活	3	7	3	2	15
	視野が広がった	9	10	2	9	30
	新技術を学んだ	4	7	2	9	22
	仕事内容おもしろ	2	3	1		6
	娯楽が多い	1	6		3	10
	男の子ができた	1	1			2

資料）実態調査より作成。

出稼ぎ者が、出稼ぎ先の北京での生活で最も困っていることは、経済的に苦しいという問題である。それ以外では、生活上の知識不足や、家族と離れて暮らしていることからくる寂しさ、住居条件への不満などが見られる。ただしそれでも、以前の農村での生活に比べれば彼らは満足しており、また、たとえ苦しくとも「いい未来」のため、後々の目的のために今の困難は苦にしないという意識もうかがえる。

＊「一番困るのはお金だ。北京の物価は高く、生活は苦しい。けれど、以前の農村での生活よりはいい」

「都市へ出稼ぎに来たのは、遊びに来たわけではない。もちろん家族と離れて寂しいし、収入が低くて生活も苦しい。しかしどんなに辛くとも、お金を稼ぐためだから我慢できる」

「農村の生活方式と全然違って、北京で自分の知識不足を深く感じた。初めて北京に来た時、同じような建物ばかりで、帰り道もよく迷った。だんだん慣れてきたが、一人で北京市内へ行ったことはない。自分はまだ若いから、北京でいい未来を見つけたい」

一方、北京での出稼ぎ生活は、辛く苦しいことばかりではない。うれしいこと・楽しいこととして、「自分の視野が広がった」、「故郷に送金できる」、「新しい技術を学んだ」、「貯金がたまった」等の答えも多い。聞き取りの内容からも、北京での生活におおむね満足していることが伝わってくる。

＊「北京で知識の範囲も広くなって、新しい理想もできた」

「北京はやはり大都市だから、農村とは比較にならない。お金を貯めて、家族へ送金するのが目的だ。これが一番満足している点だ」

「農村では先が見えないから北京へ来た。今、給料は低いけど、北京の高いビルも見たし、立派な陸橋も見たし、天安門も見た。うれしい」

「北京での生活は苦しい事もあるけれど、農村の生活よりはいい。農村ではテレビで見るものが、北京では実物が見られる。農業をしていると、耐えられないほど日焼けがひどい。今の仕事は工場で長時間働くけれど、日焼けの心配はない」

第４項　北京での差別と社会諸関係（表1-8、表1-9）

出稼ぎ者は、北京での様々な差別を経験している。

北京で差別された経験があると感じている者は半数以上だが、中でも若い世代の男性が多い。一方、若い世代の女性はほとんど差別を受けた経験がなかった。北京では、男性出稼ぎ者はよく１人で行動するため、女性出稼ぎ者よりも北京出身者との接触機会が多くなり、差別に直面する機会も増すのだと思われる。一方で女性は、「同じ出身地の友人と」一緒に行動するため、北京市民と接触する機会が少ないか、またはまったく接触しない。また、差別を受けたと答えた者のほとんどは、北京出身の労働者に差別されたと述べている。具体的な差別の内容としては、農村出身者であることに対する差別が最も多かった。男性は、職場や地域で北京出身者に、貧しさや社会的地位・出身地等を理由にして差別されたことがあると感じている。北京市民から出稼ぎ者への差別感、および出稼ぎ者から北京市民への劣等感や後ろめたさ、これら両者が相まった形で、北京における差別は成り立っている。

＊「近くでは、何か悪いことがあったら農民出稼ぎ者がやったと言われる。もちろんその農民出稼ぎ者というのは、僕達のような男性を指す」

「一緒に働いている女性はみんな外地から来た人。職場に北京人は１人もいないし、あまり北京人と付き合わない」

表 1-8　北京での差別

性別		男性		女性		合計
		26歳～	16～26歳	26歳～	18～26歳	
年齢・人数		15	19	5	12	51
差別	有	8	16	2	1	27
	無	7	3	3	11	24
差別する人	同職場の北京出身労働者	4	7	1	1	13
	その他北京出身者	2	6	1		9
	他の出稼ぎ者		2			2
	雇い主	2	1			3
差別の内容（複数）	男女		1			1
	貧富	2	9	1		12
	社会的地位	2	6		1	9
	政治権力		1	1		2
	人脈の有無		3			3
	縁故関係					0
	団体人数多寡		1			1
	学歴		1		1	2
	出身地	6	6	2	1	15

資料）実態調査より作成。

「自分はよその出身だから北京出身者より地位が低い。だから差別されるのは仕方ない」
「我々は北京へ出稼ぎに来て、北京出身者の働き口を奪っているから、差別されても仕方ない」
「何か事件があると、すぐに外地人がやったと決めつける警察官も少なくない」
「市場で買い物をする時も注意しなければならない。商品をちょっと触っただけでも、外地人だという理由でむりやり買わされたりする。特に、値段が安いので有名な動物園の近くの市場では、外地人に対する扱いがひどい」
「出身地などによる差別はある。農民だから『汚い、田舎くさい、落後者』などと言われる」

また、北京市に流入した出稼ぎ者の暫住証制度に関わる差別もあった。暫住証とは、中国において農村戸籍の者が都市部に居住する際、都市部の行政単位（北京市など）から臨時に交付される戸籍のことである。暫住証制度に対する不満は多い。差別は、単なるインフォーマルな関係性の問題ではなく、制度的・体制的なものであるといえよう。

＊「2001年6月のある日曜日、北京市内へ遊びに行った。帰途、バスを下りて会社の寮へ向かう途中、警官に呼び止められた。『お前、暫住証を持っているか』。『暫住証は会社の寮に置いてきた』と何度も説明したが、警官は有無を言わさず私を連行し、留置場に拘留した。留置場には10人位の農民出稼ぎ者が拘留されていた。お金（保釈料）があれば釈放されるが、30元の手持ちしかなかったため、翌日、『流民』として出身地である山東省済南市に送還された。済南でも留置場に拘留されたが、家族に心配をかけたくなかったので、友人に連絡した。友人は500元の保釈金を

支払い、ようやく私は解放された」

「北京は首都だから、他の都市より管理が厳しい。特に国家レベルの重要な会議がある期間は、出稼ぎ者などの『外地人』に対する検査、つまり身分証明書の確認、農民出稼ぎ者の集中地での暫住証等の検査が厳しくなる。私達は検査を恐れ、職場と寮以外には出歩かないようにしている」

「2004年から暫住証の制度は中止されたが、実際には、外地人に対する検査は続いている」

表1-9　北京での社会関係

性別			男性		女性		合計
			26歳～	16～26歳	26歳～	18～26歳	
年齢・人数			15	19	5	12	51
悩み相談相手	関係	無		6		2	8
		友達	9	12	2	10	33
		兄弟姉妹	1				1
		配偶者	3		1		4
		親戚	1		1		2
		同僚	1		1		2
		同郷人		1			1
	人数	2人以下	13	7	4	4	28
		2～5人	2	4	1	3	10
		多い		2		3	5
手伝ってくれる人	関係	無	2	8		3	13
		友達	11	5	3	6	25
		兄弟姉妹	2	3	1	1	7
		親戚		1	1	1	3
		同僚				1	1
		隣人		1			1
		雇い主		1			1
	人数	2人以下	5	9	4	7	25
		2～5人	5	2	1	1	9
		多い	3			1	4
話し合える人	関係	無	2	8		2	12
		友達	11	11	5	6	33
		兄弟姉妹				2	2
		配偶者	2				2
		同僚				2	2
	人数	2人以下	9	10	5	7	31
		多い	4	1		3	8

資料）実態調査より作成。

総じて、出稼ぎ農民をめぐる北京での社会関係には、差別の問題が深く関わっている。対象者達は、北京市で仕事をしていても「故郷にいた頃からの友人とか親戚とか家族だけ」のネットワークに限定する狭い人間関係しかもっていない。「悩み相談の相手」にしても「手伝ってくれる人」にしても「話し合える人」にしても、「友達」の重要性が際立つが、その友達の人数は実際には少ない（「２人以下」が多い）。そもそも、出稼ぎ者は北京市民と接触する機会が少ないが、その上、北京市民に差別されることに対する出稼ぎ者の警戒心、および北京市民が根強く有している「農民出稼ぎ者は無知無礼、落伍者、田舎くさい」というイメージが相まって、相互にあまり接触しないことの結果が現れていると言えよう。

第５節　出稼ぎを通した意識変化

最後に、出稼ぎを通して農民達がどのように社会意識を変化させてきているのかをみよう。

第１項　人生観（表1-10）

まず、人生で重視することに関する意識の変化である。出稼ぎの前後で、「経済的に豊かな生活をしたい」という意識が大幅に減少し、逆に「専門的な知識・技術を身につけたい」が増加している。対象者達は、当初の目的である収入を得る過程で、それをいつまでも続けることはできないと自覚し、将来に備える価値観を身につけている。そして、将来に備えるための手段として、「専門的な知識・技術」を重視するという回答が増加しているのである。

＊「北京へ出稼ぎに来る前は、お金が大事だと思っていた。その時、両親の収入では兄弟３人の学費を負担できなかったから、一番下の弟のために、2000年の春、僕と２番目の妹が北京へ出稼ぎに出た。最初、僕と妹は給料の３分の２を両親へ送金した。今、弟は大学に入って、奨学金ももらっている。北京では肉体労働ばかりやった。給料も安い。お金を貯めて、技術を勉強したい。特に、専門学校で資格が取得できる専門技術を学びたい。具体的に何を勉強するかはまだ決まってない」

「肉体労働は誰でもできる。若い時は力があるけれど、将来、歳をとったら、技術もないし、力もないし、仕事ができなくなると心配している。若いうちに、何か勉強しようかなと考えている」

「最初は、お金のために出稼ぎを始めた。出稼ぎ生活の経験を通して、単純な肉体労働でお金がなかなか貯められないことが分かった。長い将来を考えると、目の前のお金より技術と専門知識がもっと大事だと思う」

「知識が少なくて、学生の時にあまり勉強しなかったことをとても後悔している。今は何か勉強して自分の能力を向上させたい」

「知識・見聞は多ければ多いほどいい。北京のような大都市では、自分の能力と知識が足りなくては生きにくいと実感した」

「北京の生活経験を通して、以前の自分の考えはとても遅れており、無知だったと感じた。北京に来て視野も広がり、意識のレベルも高くなった」

「人間がこの世に生きている目的はお金だけじゃない。一番大切なのは生きる意義だ。人間にとって健康が一番重要だ。家族の幸福のために何をやったらいいのか考えなければならない」

表 1-10　出稼ぎを通した人生観の変化（2 つまで）

性別		男性		女性		合計
		26歳～	16～26歳	26歳～	18～26歳	
年齢・人数		15	19	5	12	51
経済的に豊かな生活をしたい	前	9	11	2	6	28
	後	1	4		1	6
やりがいのある仕事につきたい	前	3	3	2	4	12
	後	3	4	2	1	10
故郷・両親を大切にしたい	前	4	12	3	4	23
	後	7	6	1	7	21
現在の家族を大切にしたい	前		1			1
	後	5	2	1	1	9
子供の将来を第一に考えてたい	前	4	1		1	6
	後	7	5	2		14
専門知識・技術を身に付けたい	前	2	2	1	2	7
	後	4	12	4	2	22
農業・農村の発展に貢献したい	前	1	1		1	3
	後	1				1
社会的な地位・名誉をえたい	前		2			2
	後				4	4
仲間との関係を大切にしたい	前	2		1	2	5
	後	1			1	2
無理をせず、堅実にいきたい	前	2	2	1	1	6
	後		3		2	5
他人との競争に勝ちたい	前	2				2
	後		1		1	2

資料）実態調査より作成。

また前述のように、26歳以上の男性の中には専門学校を卒業した者も相対的に多いが、彼らは出稼ぎ経験を通して専門技術の重要性に気づき、出稼ぎ先で働きながら専門学校に通ったのである。以下の事例から、彼らが物心両面で自信をつけている様子がうかがえる。

＊「最初は、お金のために出稼ぎを始めた。その時は、建築現場の運搬工だった。毎日、死に物狂いで働いても、給料は一番低かった。下塗りできる人の方が仕事は楽だし、給料も僕より高かった。だから、僕は知り合いの紹介で、下塗りを教えてもらった。その技術を身に付けたことで、仕事内容も給料も改善された。その後、僕は窓・ドア・水道・電気などを取り付ける技術も仕事の中で学んだ。また、近くの専門学校に室内装飾のクラスがあった。僕は夜の時間を利用して、室内装飾の基本知識と技術も全部身に付けた。今は、僕は単純な肉体労働からリーダーになった。収入も前の４倍になった」

「出稼ぎを始める前は、あまり勉強しなかった。出稼ぎを始めてから、知識の重要性が分かった。僕は中学校に入ったことがなくて、難しい専門知識は学べないから、運転手養成の専門学校を選んだ。仕事の休みの時間を利用して頑張った。今は、運転手の仕事を見つけた。給料はそんなに高くないけれど、好きな仕事だ。車の修理にも興味がある。今、僕は運転も修理も両方できる。仕事以外でたまに友達に修理を頼まれて、いくらかの報酬ももらえる。収入も高くなった」

「僕は最初、料理店で案内スタッフの仕事をした。その時、コックが羨ましかった。けれど、コック養成の専門学校は学費が高かったから、すぐには勉強できなかった。出稼ぎを始めてから３年目に、僕の貯金と両親の援助と友達から借りた金を合わせて、コック養成の専門学校に入った。今は２年目だ。まだ卒業していないけど、コックの助手として料理店で仕事をしている。将来、卒業したら、コックの仕事につける自信がある」

「出稼ぎに来て、肉体労働だけで貯金をするのは、結構難しいと思う。それに僕は、ずっと運転手になりたかった。小さい頃から車に強い興味があった。今は自分の車が買えないから、運転手になって、毎日車を運転できるのは楽しい。出稼ぎを始めてから２年後に、自分で運転手養成の専門学校の学費を貯めると、すぐその学校に入った。今は、運転手になる夢が実現した」

さらに、家族や子供を大事に思う意識も着実に伸びを見せている。これは、ここまで見てきた事例で、子供の将来を思う声が多かったことにも表れているだろう。逆に、出稼ぎ前後であまり変化せず、一貫して強いのは、「故郷や両親を大切に思う気持ち」である。

＊「どこへ行っても自分の家じゃないと感じる。やはり故郷は一番親切だ。外に長くいればいるほど故郷が懐かしくなる」

「自分の学歴では、北京に定住するのは不可能だと思う。やはり技術を勉強して、故郷に帰る方がいい。それに、父親１人では寂しいと思うので、父親と一緒に生活したい」

「今、農村の発展も早い。単純な肉体労働だけではない。機械化もだんだん発展してくる。北京の仕事より農村での生活と仕事の方が自由だしストレスも少ない」

「農村の自然環境はいいし、空気もきれいだし、人間関係もそんなに複雑ではないと思う。北京での生活はしんどいからいつか帰る」

第２項　結婚観（1-11）

では次に、結婚・離婚に関する社会意識とその変化をみよう。

まず結婚相手において重視する要素として、「やさしさ」や「愛情」といった感情面が大きな意味をもち、これは出稼ぎを経ても大きな変化はみられない。また「経済力」も変わらず重視されている。一方、上記の「専門的な知識・技術の重視」とも関係すると思われるが、相手の能力を重視する人が、出稼ぎ生活の体験をふまえて増えている。北京という大都市で今後も生活していくことを前提に、将来的な成功を目指すため、パートナーに必須の要素として、能力が重視されていると言える。性別・年齢別に見てみると、結婚相手に求めるものでは、年長の男性では出稼ぎ前には「優しさ」が多かったが、出稼ぎを始めてから後は、より多様な要素に分散している。これに対し年少の男性は、出稼ぎ前は「経済力」や「優しさ」を求めていたが、出稼ぎ後は「優しさ」に加えて「能力」を求める人が増えている。そして女性は、出稼ぎ前から結婚相手に「能力」を求めていたが、出稼ぎを通してますますその傾向を顕著にしている。それに「北京戸籍」も結婚相手の条件に加えられている。北京戸籍を重視しているの

は女性の方が多く、そこには男性より女性の方が北京戸籍を持っている人と結婚できる可能性が高いという現実がある。

＊「出稼ぎ前、何回も見合いをした。相手はすべて、学歴や家族勢力や家族の経済力を中心に選んだ。能力になんか全然関心がなかった。北京に来てもう２年が過ぎたが、将来も北京で生きていきたい。両親と同じような農村生活を送りたくない。そのためには私１人の力では無理だから、結婚相手の協力が必要だ。もし結婚相手に能力がなかったら、この夢は実現しにくい。お金がなくても、学歴が高くなくても、一定の社交能力・技術的な能力・生活適応能力が大事だと思うようになった」

「学歴がなくても能力があったら、この社会でいい将来を築ける。例えば、友達の夫は小卒だけれど、社交能力がすごい。色んな友達がいて、出稼ぎに来た３年目から友達と一緒に果物の卸売会社を作った。奥さんと子供も北京に連れてきて、村の両親に新しい部屋を建ててあげた。私もそんな人と結婚できたら運がいいと思う」

また、結婚相手の条件として北京戸籍を重視する人も若干増えている。現在、中国では戸籍制度が弱体化しつつあるが、それでもなお戸籍制限は厳しい。特に北京において最も優遇される北京戸籍を取得するには、北京戸籍保有者との結婚が唯一の方法である。以下のような、ある意味では身も蓋もない言い方の中に、北京で生活していくにあたっての北京戸籍の重要性を確認することができる。

＊「北京に来ないと戸籍の重要性は分からない。北京にずっと住みたいのなら、北京人と結婚するのが直接的な方法だ。北京は家賃が高いから、北京人以外の人と結婚したら、部屋を買うことは言うまでもなく、借りても家賃が払えない。逆に北京人だったら、能力やお金がなくても、最低限自分の部屋を持っている」

「友達の１人が北京戸籍を持っている人と結婚して、みんな喜んだ。その北京人は、元々は北京周辺の農村出身者だった。優秀な人じゃないけれど、北京人だから、一生北京に残れる」

ただ、次のような女性の話も聞かれた。ここには、前述の北京での差別経験でも見たような、北京人から非北京出身者への差別心や、非北京出身者の後ろめたさも絡まりあった、理想と現実のギャップが見てとれる。

＊「私はもう結婚しているから、相手の条件について話しても遅いけれど（笑）、周りにいる未婚の女の子によく言うように、結婚相手を選ぶ時、今の経済状況が悪くても、能力と性格の方がもっと重要だ。北京戸籍があったらなおいい。もちろん能力があって性格もいい北京人が私のような出稼ぎの女性と結婚する可能性は、ゼロに近いけれど」

「結婚したいが、相手がいない。私の友達は北京人と結婚した。子どもが生まれて３歳になると、子どもと奥さんも北京の戸籍をもらえる。私はまだ25歳で若いから、何年間か待ってみる。もし同じ農民出稼ぎ者と結婚したら、生活がつらい。それくらいなら結婚しない方がいい」

一方、離婚観には大きな変化が見られる。対象者達は、出稼ぎを経験する前は離婚することに否定的な意見をもっていたが、出稼ぎを通して、事情によっては離婚もやむをえない、または必要であるという意見に変わってきた。こうした変化は、出稼ぎ者全体でみられる。ただし、そうした意見の変化が特に顕著なのは女性である。これに比べれば、男性の農民出稼ぎ者には、依然として離婚に否定的な意見

表 1-11　結婚観・離婚観の変化

性別			男性		女性		合計
			26歳～	16～26歳	26歳～	18～26歳	
年齢・人数			15	19	5	12	51
結婚観の変化（複数）	経済力	前	2	8		2	12
		後	5	3	1	3	12
	高学歴	前	3	2	2	2	9
		後	4	4		4	12
	家族勢力	前		2	2	1	5
		後	1	3		2	6
	能力	前	5	4	3	6	18
		後	5	12	4	9	30
	やさしさ	前	13	7		3	23
		後	7	10	1	1	19
	格好よさ	前	1	2	1	3	7
		後	3	2			5
	愛	前	3	6	1	5	15
		後	3	5	1	5	14
	北京戸籍	前			1		1
		後	1		3	3	7
	年齢	前		5	1	1	7
		後	1	2	1	1	5
離婚観の変化	①	前	4	8	4	5	21
		後	2	3			5
	②	前	7	8	2	2	19
		後	4	4	1		9
	③	前	7	3	3	6	19
		後	3	2		1	6
	④	前		1		3	4
		後		4		2	6
	⑤	前	2	1		2	5
		後	5	5	3	6	19
	⑥	前					0
		後	4	1		1	6
	⑦	前		2			2
		後		6	1	2	9

補注：離婚観の変化

①女が一度結婚したら、絶対に離婚してはならない。

②たとえ夫婦の関係が悪くなっても、できるだけ我慢して関係を修復すべきである。

③たとえ夫婦の関係が悪くなっても、子供がいる以上、子供のことを考えて離婚すべきではない。

④夫婦の関係が悪くなったら、離婚することもやむをえない。

⑤夫婦の関係が悪くなったら、はっきり離婚すべきであり、不幸な結婚生活を続けることはお互いにとってよくない。

⑥現在の配偶者よりも好きな異性ができれば、離婚することもやむをえない。

⑦結婚や離婚の制度に縛られず、自由に生きる方がよい

資料）実態調査より作成。

が根強く残っている。総じて、伝統的な婚姻観念から、個人的な自由を重視する意識へと変化していることが分かる。結婚観の変化にも見られたが、自分が望む関係を獲得しようとする手段的・機能的な意識の表れともとれるだろう。

＊「以前、離婚は恥ずかしいことだと思っていたけれど、最近、離婚した知り合いや周りの人が少なくない。もう恥ずかしいことではないと思う」

「僕はまだ結婚していないから、離婚とか当然考えたことはない。けれど、１つ分かっているのは、もし２人で一緒に生活して苦しくなったら、絶対離婚するだろうということだ」

「結婚・離婚は個人の自由だ。２人でいて幸せなら結婚、幸せでなくなれば離婚。私は両親のように愛情のない婚姻関係を一生続けるという代価を払うことはできない」

「僕はもう１回離婚したことがある。今は再婚した。以前の妻とは性格が合わなくて、よく喧嘩した。息子が３ヶ月の時、離婚した。僕もほっとした。毎日喧嘩していた生活を思い出すと頭が痛くなる」

第３項　子供の将来への期待（表1-12）

子供の将来への期待についてみよう。

まず、子供への学歴期待は、出稼ぎの前後であまり変化はない。多くの出稼ぎ者は、出稼ぎの前後を問わず、自分の子供には大学までの進学を望んでいる。ただ、専門学校の卒業を期待する者の増加も見られ、これも、上記の「専門知識・技術の重視」と関係していると思われる。大学卒という学歴に期待しつつも、仕事を得るためにはその学歴が今や通用しなくなりつつあるという現実を目の当たりにした経験が、子供達への学歴期待に反映されていると言える。

＊「大学はまだ多くの人の夢。もちろん、僕は子供に将来いい大学に入ってほしい。もしいい大学に入れない場合は、いい専門学校でも構わない。技術はメシの種だと思うから」

「今の中国は10年前と全然違う。10年前、大学生は珍しかった。仕事も見つけやすかった。今は逆だ。大学生が私達と一緒に面接を受けるケースも珍しくない。大学を卒業しても仕事を見つけられない。けれど、専門学校は違う。1つの専門技術を身につけたら、仕事が見つけやすい」

また多くの出稼ぎ者は、出稼ぎの前後を問わず、自分の子供には将来、農村ではなく、北京など大都市に住んでほしいと考えている。現在の出稼ぎ者にはもはや、伝統的な「子継父業（父の職業、ここでは農業を子供が継承すること）」といった観念は存在しない。

＊「どうしても、子供は農村に戻させたくない。北京などに住んでほしい。農村では発展のチャンス

はほとんどない」

「僕がずっと北京に住むのは無理だと思うが、子供は違う。子供は２歳から北京に来た。今は５歳で、北京の幼稚園に入った。将来は、北京で小学校、中学校に進学する。戸籍制度制限のため、高校時、農村に戻らないといけないと思うけれど…やはり、北京に住んでほしい」

表 1-12　子供の将来の学歴・居住地への期待

性別			男性		女性		合計
			26歳～	16～26歳	26歳～	18～26歳	
		年齢・人数	15	19	5	12	51
子供の将来学歴への期待	中学校	前		1			1
		後					0
	高校	前	1	1		2	4
		後		1			1
	大学	前	14	14	5	9	42
		後	13	11	4	10	38
	専門学校	前					0
		後	2	2	1	1	6
	海外留学	前		1			1
		後		2			2
	任せ	前					0
		後		1			1
	無回答	前		2		1	3
		後		2		1	3
子供の将来居住地への期待	故郷農村	前		2			2
		後					0
	同省地方都市	前	3	4	2		9
		後	1	1			2
	同じ省の省都	前		1		1	2
		後		2			2
	北京等大都市	前	7	8	3	9	27
		後	8	10	5	10	33
	海外	前	1				1
		後	2	1			3
	任せ	前	4	2		1	7
		後	4	3		1	8
	無回答	前		2		1	3
		後		2		1	3

資料）実態調査より作成。

第４項　本人の将来について（表1-13）

最後に、出稼ぎ者本人は、自らの将来をどのように考えているのだろうか。

出稼ぎ者達の多くは、いずれは故郷に帰ることを想定しているが、しかし農業をするという意識は薄い。また、現在の自分の雇用者としての労働条件の厳しさを反映してか、あるいは自分が身に付けた技術・知識を活用したいという意識が芽生えているのか、自営業を希望する意識が強い。

＊「一所懸命にお金を儲けて、家を建て、子供が大学を卒業するころには、僕も歳をとるから、その時に故郷に帰る。他人の会社で働く事は飽きたので、帰ったら、自分で何かを営業したい」

「北京は様々な面で便利を提供してくれる。僕はＰＣに興味を持っているが、ＰＣはますます重要になると思うから、ＰＣの学習教育を自営業でやりたい」

「今の仕事は大変なので、もっと楽な仕事に就きたい。出稼ぎ前、ＰＣの勉強をしたが、今の仕事ではＰＣを全然使わない。機会があれば、ＰＣを使う仕事をしたい。将来、条件があえば、故郷へ帰ってＰＣ修理の会社を作りたい」

自分自身の将来の居住地については、出稼ぎ前には６割以上が「故郷に帰るつもり」で、約４割が「もともと故郷に戻らないつもり」だった。しかし出稼ぎ後には「北京にずっと住みたい」ケースと「故郷に帰りたい」ケースがそれぞれ約５割で拮抗している。総じて「北京にずっと住みたい」人がやや増加したと言えるが、しかし、「出稼ぎを通して、逆に故郷に戻りたくなった」というケースもある以上、北京という大都市での生活は、出稼ぎ者の中に複雑な葛藤を産み落としていると言える。このことは、出稼ぎ者が北京での生活の中で、様々な困難に直面していることをうかがわせる。出稼ぎに来ているのに仕事がない者、収入が少なく、将来的に仕事を得ることができる見込みも少ない者、定住の前提としての家を買えない者、北京での生活や仕事にストレスを感じている者など、様々な困難を抱えた人がいる。そういった事情を経験することで、北京に残りたいという意識があったとしても、現実的には故郷に戻らざるをえないという葛藤を含む認識がある。

＊「いつ帰るかまだ考えていないが、結局、帰ると思う。北京は仕事場であって、仕事ができないなら北京にいる意味はない。帰るしかない」

「もし北京にずっと住む能力があったら、もちろん北京にずっと住むけれど、その可能性はないと思う。今の収入ではぎりぎりで、もし歳をとって収入がなかったら、北京では生きていけない。故郷に戻るしかない」

「農村から出稼ぎに来たばかりの時、北京のきれいな夜景を見て、将来もこの都市から離れたくないと思った。もう北京に来て５年経ったけれど、なかなかその夢は遠いと感じた。北京はきれいだけれど、お金持ちの都市だ。僕のような出稼ぎ農民とは無縁だ」

「北京のような大都市にのみ、多くのチャンスがある。けれど、やはり外人だと感じるので故郷へ帰りたい。十分な貯金ができれば、早ければ子供の教育費だけでも貯めたら帰る」

「お金を十分に儲けた時、最低でも結婚資金とその後の生活費ができた時、故郷に帰る。誰でも北京に住みたいけれど、誰でも住めるわけではない」

「一生懸命に働いても、北京では値段が高すぎて自分の家が買えない。自分の家は農村だ。そこに自分のすべてがある。いつか、お金が十分に貯まったと感じたら、自分の家に帰る」

「今、農村の条件もだんだん改善されているし、経済も発展している。特に、故郷での生活は北京より自由だと感じる。北京ではずっと外人だと感じる。戸籍もないし、やはり帰る」

表 1-13　自分の将来の仕事・居住地への期待

性別		男性		女性		合計
		26歳～	16～26歳	26歳～	18～26歳	
	年齢・人数	15	19	5	12	51
仕事	専門技術		1		1	2
	建築業		1			1
	サービス業		1			1
	製造業					0
	運輸業					0
	自営業	12	10	4	3	29
	農業	1				1
	公務員	1				1
	なんでもいい	1	6	1	8	16
居住地	①	2	3	1	3	9
	②	5	10		1	16
	③	5	2	3	6	16
	④	3	4	1	2	10

補注：①もともと故郷には戻らないつもりで北京に出てきたので、北京にずっと住む。

②もともとは故郷に帰るつもりだったが、気が変わり、ずっと北京に住む。

③もともと故郷に戻るつもりだったので、いつか故郷に帰る。

④もともと故郷には戻らないつもりだったが、気が変わり、いつか故郷に帰りたくなった。

資料）実態調査より作成

第6節　小括

本章の目的は、都市へ流入した農民出稼ぎ者たちがどのような問題を抱えているのか、どのような生活を送っているのか、都市での生活体験を通してどのような意識変化を起こしているのかなど、農民出稼ぎ者の生活・意識実態を解明し、その社会的意義を考察することにあった。

以下、簡単に総括しよう。

まず、彼・彼女達の移動の動機は、「流入地と流出地の収入格差」（馮、2009）のみでは十分に説明しえない。つまり彼・彼女達は、確かに当初は「稼ぐ」ことを重視して出稼ぎを開始したが、しかし出稼ぎの体験を通して徐々に、「自分の視野を広げ」たり、「新しい技術の習得」といった新たな目標・動機を形成し、それによって出稼ぎを継続・再生産しているのである。特に若年層の出稼ぎにおいて、その傾向は顕著である。そしてまたそのような将来に向けた志向があるからこそ、彼・彼女達はたとえ出稼ぎ先の当面の生活や仕事、人間関係などで苦しいことがあっても、あまり苦にしないという傾向がみてとれた（また、農村に比べればましだという感覚も、それに付け加わる）。こうした諸事実に基づき、彼・彼女達の出稼ぎ生活に関する満足度は、出稼ぎを始めてからの期間、勤める会社の規模、子供にかかる費用、生活のレベルなどの多様な要因に規定され、したがって当面の収入の多寡とは必ずしも単純に相関していない。すなわち出稼ぎ者達は、単純に「収入が多いから満足／少ないから不満」といった、現在志向的な感覚だけをもっているのではないのである。

また出稼ぎ者達の中には、頻繁に雇用・解雇を余儀なくされたり、表向きは標準的な労働時間数でも実際には多くのサービス残業をこなしているなど、困難を抱えた者もいる。ただし彼・彼女達の側にもまた、収入や職場環境を考慮して、自分にとって少しでも都合の良い出稼ぎ先に移っていこうというドライでしたたかな意識が見られる。また、何か専門技術を持っていない限り、希望する仕事が見つかりにくいという現実を知ることで、技術や知識を身につけようという意識の変化も起こしている。すなわち、当初の目的の１つである当面の出稼ぎ収入を得る過程で、さらに長期的な将来に備える価値観を身につけているのである。その意味で、彼・彼女達は、「“３Ｋ”労働を担う重宝な限界労働力」（熊谷、2002、150）であるばかりではなく、経験を積んで実際に専門技術を身につけ、現状の労働条件の厳しさを認識し、自分が身に付けた技術・知識を活用して自営業の起業を考えるなど、新たな展望を模索する主体にほかならないのである。

しかもその主体性は、個人というより、インフォーマルな集団によって支えられている。出稼ぎ者が都市へ出稼ぎに出て仕事を見つける際、公的機関ではなく私的ネットワークが大きな役割を果たしていた。また北京で生活するにあたって親身になってくれる相手としても、友達という私的ネットワークの重要性が際立っていた。ただし、このことは反面で、出稼ぎ者の側の北京市民への劣等感、および北京市民に差別されることに対する警戒心の表れでもある。このことは、北京に住み続けたいとは思ってもどうしても馴染めない、という感覚の一部を構成していると言えよう。そのような状況の中でも北京に定着するための一つの手段として北京戸籍の取得がある。「北京戸籍を獲得するために北京出身者と結婚する」という身も蓋もない言い方や、将来的な成功を目指すために結婚相手に「能力」を求めるという考えには、自分が望む関係を獲得しようとする（そうでなければ別れる）、出稼ぎ者の現実的・手段的な意識が端的に表れているだろう。また、そもそもこういった結婚観には、伝統的な結婚観念から個人的な自由を重視する意識への変化が前提にある。しかし同時にそれは決して明るい色彩を帯びた自由ではなく、農民出稼ぎ者という不安定な立場にいることによって結婚相手として敬遠されたり、北京に残りたいという意識があっても、経済面や環境面を考えた場合、後々故郷に戻らざるをえないことが予想されるなど、深い葛藤や諦観に限取りされた自由である。

そうした中で、子供という存在およびその教育は、出稼ぎ者にとって、一つの大きな希望である。これは、出稼ぎ者の中に、早い段階で学業を断念せざるをえなかった経験をもつ者が少なくないことも、影響している。ただしそこでもまた、北京での高額な学費が大きな懸念となっている。また、子供に大卒という学歴を期待しつつも、実際にはすでにそうした学歴の価値が就職において低下しつつあることをも、彼・彼女達はすでに知っている。また自らが仕事を見つける際に苦労した経験もふまえ、単に学歴だけがあっても通用しないことを子供達にも伝えたいといった意識も芽生えている。そして自分の子供には将来、北京など大都市に住んでほしいと考えているが、かといって彼・彼女達は、故郷を軽視しているわけではない。そもそも彼・彼女達は、故郷に残っている家族の負担を減らしたいという思いから出稼ぎをしており、農村の生活に様々な物を提供することで、不断に農村の生活状況に影響を与えている。その意識は、脱農村・都市化へと一方的に向かっているわけではない。しかしそれでも、現在および今後の中国社会の中でチャンスを得るためには大都市の方が圧倒的に有利であることは否めず、それもまた出稼ぎを通して彼・彼女達が学んだことの一つである。そこで特に子供を持った年長者たちは、自分達の世代はともかく、産まれた時から北京にいることになる次世代には、北京在住への期待・願いを一層強めている。

馮（2009）は、高い教育レベルを持ち、滞在期間が長く、「夫婦と子供」で出稼ぎにきている人ほど、

より強い定住意識を示すこと、収入ではなく職種が定住意識に影響を及ぼしていること、そして農業戸籍所有者の定住意識は低いことなどが明らかにした。確かにそうした傾向はあるだろう。しかし、実際には、高い教育レベルをもち、安定した職種で都市戸籍をもつ出稼ぎ農民は、全体の中ではごくわずかである。またそうした人も含め、多くの人々は、「定住か、それとも帰郷か」といった二者択一を、何らかの個別の理由・条件だけに基づいて行っているわけではない。一人ひとりの中に、定住を望みつつ、帰郷の展望をも模索する複雑な営みがみられるのである。定住を志しても差別され、疎外感を持たざるを得ず、住宅の購入や子供の学費など深刻な不安が立ちはだかることとなる。かといって帰郷を決断しようとしても、決して安定した生活は展望しえず、子供の将来も含めて考えれば、なおさらさらなる模索を続けざるを得ない。

こうした現実をふまえれば、大切なことは、彼・彼女達が北京に定住するか、それとも故郷に戻るかという二者択一ではない。北京に定住した人々が彼・彼女達を差別・排除する北京の社会にいかに働きかけ、変えていくのか。また故郷に回流した人々が、北京での生活体験を生かして、故郷の社会をいかに変えていくのか、である。以下の各章では、こうした諸点も視野に入れ、さらに深く研究していこう。

注

注１：女性では数少ない年長者も、中学までが多い。彼女達の学齢期、中国、特に農村では男尊女卑の観念が強く、「女の子を学校にやるのは無駄」、「女の子は将来、他家に嫁ぐので家族ではない」、「嫁いだ娘は撒いた水のようなもの」等と見なされ、全体的には未就学者が多かった。

注２：中国では零細な農家が多く、『中国農家耕地調査』（1996）によれば、一人あたり3畝（約20アール）以上の耕地を保有する農家は、全体の30.6%である。

注３：『中国人口と労働問題報告N07』（2006：53）によると、農民出稼ぎ者全体の79.3%が企業と正式な雇用契約を交わしておらず、臨時雇用の形態である。総じて農民出稼ぎ者は、雇用において極めて不利な地位にある。

注４：『中国人口と労働問題報告N07』（2006：52-3）によれば、2004年時点で、農民出稼ぎ者全体の6.1%が賃金不払いを経験している。例えば多くの企業では、毎月20～30%の賃金を保証金として差し引き、３年間の雇用期間中に何の失敗もなければ返却するという制度をとっている。もし何らかの失敗をすれば、保証金は返還されない。一般的には、保証金が農民出稼ぎ者の手元に渡ることは少ないと言われている。賃金不払いなどのトラブルが起こった場合、出稼ぎ者を保護する法律は未整備で、農民出稼ぎ者は保護を得られにくい。

注５：『中国人口と労働問題報告N07』（2006：53）によると、農民出稼ぎ者全体の平均労働時間は、2004年では週に6.3日、1日9.7時間。ただし毎日12時間働き、休日なしという者も少なくない。

第2章　出稼ぎ農民留守家族の生活と意識

——北京の農民出稼ぎ者の事例を中心に——

本章では、2009年８～９月に山東省鄆城県で実施した、出稼ぎ農民の留守家族に関する実態調査を素材として、分析を進める。調査の概要は序章に記した通りだが、調査対象である留守家族は、出稼ぎ者の父母（41歳以上）と妻（40歳以下）、そして子供を含む３世代が同居する拡大家族である場合が多い（表2-１）。ただし後述するように、３世代同居でも、父母と夫婦は家計面で別世帯であることが多い。また同じ問題についても、父母と妻では受けとめ方・意見が異なる。そこで以下、出稼ぎ者の父母（子供が出稼ぎに行っている）、および妻（夫が出稼ぎに行っている）に分けて、それぞれの生活過程と社会意識を分析する。なおそれ以外に妻・母（夫と子供の双方ができ稼ぎに行っている）も一部にみられるが、これは回答の文脈に応じて考察の素材とする。

表2-1　調査対象の基本属性

属性		妻	父母	妻・母	合計
	人数	26	21	6	53
年齢	21～30歳	12			12
	31～40歳	10		2	12
	41～50歳	3	4	3	10
	51～60歳	1	16	1	18
	61歳以上		1		1
同居の留守家族	子供のみ	3		1	4
	孫のみ			1	1
	老親のみ			1	1
	配偶者のみ		1		1
	子供・老親	23		2	25
	嫁・孫・老親			1	1
	配偶者・自分の子供		2		2
	配偶者・嫁・孫		5		5
	配偶者・息子・嫁・孫		7		7
	配偶者・孫・老親		2		2
	配偶者・嫁・孫・老親		2		2
	配偶者・娘・孫		2		2

資料）実態調査より作成

第１節　生業と家計構造

まず、留守家族の生業、および家計構造をみていこう。

第１項　生業と役割分担（表2-2）

留守家族の主な生業は、農業である。

一人当たりの所有農地面積は１～1.5畝程度である。家族の人数によって１世帯当たりの面積は３畝以下から10畝以上まで多様だが、総じて５～10畝であることが多い。中国の農村では、村が土地を一元的に管理し、各農家に家族人数に応じて分配することになっている。ただし現在は、30年間は各農家の土地は移動しないことになっており、厳密には家族人数と土地面積は比例していない。これについては次節で詳述する。

兼業は、近隣の木材工場・絨毯製造工場・玩具製造工場等での不熟練労働、および建築・ゴマ油製造販売など一定の熟練を要する仕事がある。ただし農繁期にはやはり農業に専念していることが多い。また家畜（鶏・羊）の飼育も行われているが、現金収入には結びついていない。

兼業の主な担い手は、相対的に若い父母である。父母も高齢になれば、兼業を止め、農業に専念している。出稼ぎ者の妻は、農業に専念するか、または子供が特に小さい時期は、農業も父母に任せて家事・育児等に専念している。

表2-2　生業と役割負担

属性			妻	父母	妻・母	合計
人数			26	21	6	53
土地	一人当たりの面積	1畝未満		3		3
		1～1.5畝	26	18	6	50
	合計面積	3畝未満	2	2		4
		3畝～	8	4	1	13
		5畝～	14	13	5	32
		10畝～	2	2		4
役割負担	農業のみ		7	3		10
	農業と兼業の仕事		3	8	1	12
	農業と子供の世話		8	9	1	18
	子供の世話のみ		7			7
	農業・兼業・子供の世話		1			1
	農業と老親の世話				3	3
	農業・子供と老親の世話				1	1
	農業・兼業・老親と夫の世話			1		1

資料）実態調査より作成

第２項　農業・農村における諸問題（表2-3）

農業には、いくつかの問題がある。

第１は、農地分配の不公平である。一人当たりの農地面積では差がないように見えるが、実際には家族の勢力の強弱によって、農地分配の運用に不公平がある。結婚・出産・死亡等で家族の人数が変化し

ても、それに完全に見合った土地の再配分がなされない場合が多いのである。農地の豊度（土壌・位置・日照等）にも差がある。

＊「老人が亡くなったので土地を村に返したが、息子が結婚して子供も産まれたのに、新たに土地を分配してもらえない。だから、うちは家族の人数が多くて土地も広いように見えるが、一人当たりにすると他の家より少ない」

「政府の土地政策によれば、30年間は土地所有の移動を認めないので、結婚した後も私の土地は実家の所有になっていて、私は使えない」

「妹が結婚して、妹の土地は村によって回収された。でも、私は子供を産んだのに、その分の土地はもらえない。勢力が強い家族なら、娘が結婚しても土地は回収されず、子供が産まれたら、新しく土地をもらえる」

ここでいう「家族の勢力」とは、姓の違い・貧富の差・個人的政治力等、複合的な力関係である。同じ村の中で、勢力が強い家族が弱い家族を差別することは珍しくない。また同じ家族の中でも、きょうだい間で同様の差別もある。「差別があるか」との質問には53名中18名が「ある」と答えるにとどまる。しかしここで「ある」と答えたのはほとんど被害者である。加害者は差別の存在を認めない。実際には数字に現れるよりはるかに多くの差別が横行している。土地の配分の不平等は、その一環にすぎない。

＊「村長選挙の時、勢力が強い人を選ばないとひどい目に遭う。やむなくいつも、勢力が強い家の人（組織人）が推薦した人に投票している。そうするしかない」

「私の家族は家族人数が少ない。以前はわりと裕福だったので、勢力が強い家の人に金を貸してあげた。数年前、商売で失敗したのでその金を返してほしいと言ったが、返してくれるどころか、殴られた。農村には法律も通用せず、家族の勢力こそが法律だ」

「貧しいと、兄弟姉妹にも差別される。夫はもともと意気地がなく、ばかにされても反論ひとつできない」

「きょうだい同士の差別もひどい。夫のきょうだいには皆、男の子が２～３人いるが、うちだけは女の子しかいないので、両親にも差別されている」

第２に、基幹労働力が出稼ぎに出ることにより、農業生産における労働力不足も深刻な問題となっている。「農業の労働負担が重くなった」、「農業の仕事がきつい」、「労働量が多く、体力が不足」等と語る留守家族は、父母・妻とも多い。

＊「私と妻が農業をしているが、子供達が出稼ぎに行き、手伝ってくれる人が一人もいないから、農作業の負担が重くなっている。特に収穫はとてもきつい」

「以前は夫と私が農業をして、農繁期は子供も手伝っていた。でも今は夫も子供も出稼ぎに行き、農作業は私一人でやっている。負担は重くなっている」

「夫が出稼ぎに出て、農業労働力はもちろん不足している。以前は私と夫が一緒に農業をやり、父母も手伝ってくれていた。今は父母も高齢になり、実際の担い手は私一人しかいない」

農業労働力の不足は、一方で野菜や果物の栽培の中止、穀物（麦・トウモロコシ）・大豆等へのモノ・カルチャー化をもたらしている。他方では農薬の多用や、それによる健康破壊を促進している。

＊「冬に麦を植え、５～６月頃に収穫する。その後、トウモロコシや大豆を植え、９月頃に収穫し、

その後はまた麦を植える。どれも、あまり手間がかからないからだ。それ以外の作目は作らなくなった」

「気温が40度位になり、雑草が増えたので、農薬を撒いた。すると私は中毒になり、異常に喉が乾

表2-3　農業・農村における諸問題

属性		妻	父母	妻・母	合計
人数		26	21	6	53
農村での差別経験	あり	7	8	3	18
	なし	19	13	3	35
誰に差別されるか	同じ村の人	6	8	3	17
	村の管理人	2			2
差別の理由	家族勢力	6	7	3	15
	貧富	1	2		3
	人脈の有無		2	1	3
	家族人数の多寡	1	2		3
	政治権力	1	1		2
労働力不足の実感	感じている	12	13	4	29
	農繁期には不足と感じる	13	3	1	17
	感じていない	1	5	1	7
労働負担の実感	重くなった	24	14	6	44
	変化なし	1	6		7
	軽くなった	1	1		2
農業の問題（複数）	農業生産のコストが高くて利益は少ない	21	20	6	47
	気候に左右され収入不安	21	14	6	41
	農産物価格安すぎ収入低	17	16	5	38
	仕事がきつい	13	15	5	33
	労働量大、体力不足	14	15	4	33
	仕事内容が難しい	9	10	2	21
	夏は忙しく、冬は仕事無	8	5	2	15
	農業機械化が遅れている	5	5	2	12
	農産物売れなくて収入少	4	2	2	8
	仕事環境が健康に悪い	3	1	2	6
	労働時間が長い	2	2		4
	仕事単純すぎつまらない	1	2		3
	休みが少ない	2		1	3
	農業機械が操作できない	2	1		3
	仕事が危険	1			1

資料）実態調査より作成

き、気を失って農地で何時間も倒れていた。隣人に発見されなければ、もう死んでいたと思う。この事は、出稼ぎに出ている夫にも息子にも夫にも言っていない」

第３項　収入構造（表2-4）

世帯の総収入は、年間１～３万元であることが多い（表2-4）。

表2-4　収入構造

属性		妻	父母	妻・母	合計
	人数	26	21	6	53
総収入	5万元～	1			1
	3～5万元未満	3	3	1	7
	2～3万元未満	3	7	4	14
	1～2万元未満	18	9	1	28
	1万元未満	1	2		3
農業収入	無	5	2	1	8
	1000～3000元未満	13	10	4	27
	3000～7000元未満	8	5		13
	7000～1万元未満		2		2
	1万元～		2	1	3
受取年間送金額	無	1	4		5
	1000～3000元		3		3
	3000～5000元		1		1
	5000～7000元	3	2		5
	7000～1万元	3	1		4
	1万～2万元	15	8	2	25
	2万～3万元	1	2	4	7
	3万元以上	3			3
送金/総収入の比率	90%以上	5		2	7
	70～90%	9	3	3	15
	50～70%	8	5	1	14
	30～50%	3	3		6
	15～30%		6		6
	0%	1	4		4
送金満足度	十分	3	2	1	6
	まあまあ	14	3	1	18
	全然足りない	9	12	4	25
	送金なし		4		4

資料）実態調査より作成

その中で農業収入は、1,000元以下～１万元以上まで幅広く分散しているが、1,000～3,000元であることが比較的多い。農業収入は基本的に父母の収入とみなされ、その中から妻に一定部分が手渡されている。そのため父母の農業収入には１万元以上のケースも見られ、一方で妻のそれは7,000元以下とやや少ない。

出稼ぎの送金は、まず夫が妻に毎月送金し、妻がその中から一部を父母に年に数回、手渡すという形がある。また妻からではなく、夫がたまに帰郷した時に父母に一定額を手渡す場合もある。いずれにせよ、出稼ぎ送金の大半は妻の管理下におかれ、父母に渡る金額は限られている。妻への出稼ぎ送金は7,000元以上で、なかには３万元を越えるケースもある。一方、父母へのそれは7,000元以下で、ゼロのケースもある。

そこで妻は、世帯総収入の７割以上を出稼ぎの送金に依存している。これに対し、父母の多くは世帯総収入の半分以下しか出稼ぎ収入に依存していない。現在の送金額を、妻の多くは送金額を「まあまあ」、父母の多くは「全然足りない」と感じている所以でもあろう。

第４項　支出構造（表2-5、表2-6）

一方、世帯の総支出は、5,000～１万5,000元に多く分布している。

このうち農業への投資が1,000～3,000元と比較的大きな位置を占める。これは一方で、農業が依然として重視されていることを示す。ただし前述の如く、農業収入も1,000～3,000元であるため、相殺すれば農業による所得はほとんどないことになる。農業は、実質的には食糧自給（食費の節約）のためになされ、現金収入にはならない。農業の問題点として、「農業生産のコストが高く、利益が少ない」、「気候によって左右され、収入が不安定」、「農産物価格が安すぎて収入が低い」等の声が多く聞かれる（表３）。

＊「農業は１年分の食糧が採れたら、それで十分だ。農業収入は、ほとんど農業経営費で消える」
「農業にだけ頼っていたら、食べるだけで、他の支出は全然足りない。現金収入を増やそうと思えば、子供は出稼ぎに行くしかない」

そこで生活費（2,000～8,000元）・医療費（500～1,000元）・教育費（０～4,000元以上まで多様）等は、主に出稼ぎの送金に頼るしかない。出稼ぎ者の流出が農業にマイナスの影響を与える（馮 2009、136）だけでなく、農業の生産性の低さ・経営支出の高さが、出稼ぎを不可欠にするといった、一種の悪循環がみてとれる。

その中でも父母の世帯では、生活費が2,000～5,000元と比較的安く済み、孫の教育費もあまりかからない。ただし高齢のため、医療費支出は多い。出稼ぎ先からの送金も少ないため、送金の使途も限られている。ただしそれでも、電話・カラーテレビ・洗濯機など家電の購入は、出稼ぎ収入で行っている。また、子供が経済的に自立すれば、それだけでも父母の負担は大幅に軽減される。中国の農村では、子供に家を建ててやることが、子供の結婚に不可欠の準備とみなされている。そこで未婚の子供をもつ親の負担は甚大である。

子供が出稼ぎに出る以前、父母の多くは子供の結婚資金等の負担で「経済的にとても苦しい」と感じていた。しかし出稼ぎに出た後は、「どちらともいえない」「やや満足」と一定の改善を認めている。

＊「子供は高校を卒業するとすぐ出稼ぎに行った。子供の収入も少ないので、送金は望んでいない。

子供が自立して生活でき、私に頼らなければ、それだけでいい」

表2-5　支出と余剰額

属性		妻	父母	妻・母	合計
	人数	26	21	6	53
総支出	2万元～		2	1	3
	1.5～2万元未満	3	5		8
	1～1.5万元未満	14	4	3	21
	5000～1万元未満	9	8	2	19
	5000元未満		2		2
農業への年間投入額	無	3			3
	1000～3000元未満	22	16	6	44
	3000元～	1	5		6
生活費	2000元未満		2		2
	2000～5000元未満	3	8	1	12
	5000～8000元未満	14	5	2	21
	8000～1万元未満	5	1	2	8
	1万～2万元未満	4	4	1	9
	2万元～		1		1
医療費	300元未満	1	2	1	4
	500～1000元	18	8	4	30
	1200～2000元	7	8	1	16
	3000元～		3		3
教育費	無	8	17	1	26
	50～200元未満	5	1	2	8
	200～400元未満	5	1	2	8
	1000～2000元未満	3	1		4
	2000～4000元未満	5	1		6
	4000元～			1	1
年間余剰額	2万元～	4	3	1	8
	1.5～2万元未満	1	1	1	3
	1～1.5万元未満	1	3	3	7
	5000～1万元未満	6	8		14
	3000～5000元未満	6	2	1	9
	1000～3000元未満	5	2		7
	1000元未満	2	1		3
	赤字	1	1		2

資料）実態調査より作成

表2-6　送金の用途と満足度

属性		妻	父母	妻・母	合計
人数		26	21	6	53
送金の用途	家計の維持	24	9	4	37
	家具・家庭用品などの購入	23	8	4	35
	子供の教育	21	4	2	27
	家の建築	6	9	4	19
	貯金	12	2	4	18
	家族の治療・入院費	8	3	3	14
	農業器具の購入・農業資金	4	2	4	10
	老親の扶養	6	1	3	10
	家の改装	4			4
	その他	1	6	2	9
生活満足度（出稼ぎ前）	非常に満足				
	やや満足				
	どちらとも言えない	8	6	1	15
	やや苦しい	10	3		13
	とても苦しい	8	12	5	25
生活満足度（出稼ぎ後）	非常に満足	4	1		5
	やや満足	15	5	3	23
	どちらとも言えない	4	9	3	16
	やや苦しい	1	4		5
	とても苦しい	2	2		4
送金で購入した電気製品（複数）	電話器	12	14	6	32
	カラーテレビ	11	13	6	30
	洗濯機	12	8	3	23
	ＤＶＤブレーヤー	8	4	4	20
	ラジオ	3	1	2	6
	電動自転車		5		5
	バイク	3			3
	電動三輪車			2	2
	冷蔵庫	1			1

資料）実態調査より作成

「子供は送金してくれなくても、自分の結婚資金さえ貯めてくれたら、私はもう大助かりだ」

「息子はすでに婚約したが、今のままの家では結婚はできないと相手に言われた。家を建てると最低でも２～３万元はかかる。その資金作りのために息子は出稼ぎに行った」

「農村では結婚資金がけっこうかかる。婚約から結婚まで２万元、さらに家の新築費も加えると５

万元はかかる。出稼ぎせざるをえない」

「子供はもう結婚適齢期になったが、家が古く、新しい家を建てないと結婚相手もみつからない。息子一人では足りず、夫も出稼ぎに行った」

これに対し、妻の世帯は、子供の教育費がかさむため、生活費も5,000元以上と高い。出稼ぎの送金は、必要不可欠な生活費（家計維持）、および子供の教育費で大きな位置を占める。また家電の購入費、家族の医療・入院費等にも宛てられている。夫からの送金は前述の如く比較的高額であるため、出稼ぎ以前の生活は「やや苦しい」が多かったが、出稼ぎ後は「やや満足」が多数を占め、一部には「とても満足」との感想も聞かれる。

＊「子供が高校に入ると、30キロ離れた県城（農村の中心地）に下宿しなければならない。学費や生活費がたくさんかかる」

「大学の学費はとても高く、年に１万元もかかる。農業だけではとても賄えず、出稼ぎに行くしかない」

実際、年間の貯金・余剰金額は、父母の世帯で１万元以上、妻の世帯で1,000～1万元程度であり、これだけをみれば留守家族は、それほど経済的に貧しいわけではない。「やや満足」、「とても満足」と感じる所以である。ただし、これはあくまで出稼ぎ収入を前提とした収支であり、また物価の高騰、子供の将来の教育費、家屋の新築費、いざという時の医療費等を考慮すれば、さらに貯金をしておかなければならないと、多くの留守家族は感じている。

第２節　生活過程と社会関係

では次に、生活過程、および社会諸関係の実態と問題をみていこう。

第１項　生活上の諸問題（表2-7）

まず生活上の諸問題である。

妻・父母の違いを問わず、留守家族が直面する最も深刻な問題は、「経済的に苦しい」、および「農作業がつらい」の２つである。経済的な困難としては、特に重病時の医療費の負担が大きい。農村においては、軽い病気になった場合、まずは村の衛生所か郷クラスの衛生院に行き、重い病気になると、県病院、市病院、省病院という順番で訪れる。しかし、病院のレベルによる医療環境には大きな差があり、かかる治療費も相当異なる。一応、中国では農民の医療費の７割を政府が負担するという新型医療制度（「新型農村合作医療」制度（注１））がある。しかし実際には、申請手続きが難しく、これが適用されることはほとんどない。また、そもそも留守家族のほとんどが、この制度に関して「聞いたことがある」、もしくは「あまり分からない」と答えており、制度に関する正確な知識をもたないために、重病の際には数万元の治療費を自己負担しなければならなくなってしまっている。

＊「地方によって違う。鄆城県では40％支給されるが、70％の所もある」

「人身事故は補助金が出ない。夫は青島で泥棒に切られたけど、何の賠償もないし、補助金もなかった」

「30％の補助金が出るということを聴いただけ。入院する場合のみ補助金が出る。軽い病気には補助金がない」

表2-7　生活上の諸問題

属性			妻	父母	妻・母	合計
人数			26	21	6	53
生活上の困難（複数）	経済的に苦しい		12	17	3	32
	農業がつらい		13	5	4	22
	高齢者の介護がつらい		9	4	5	18
	息子の結婚が難しい		1	8	2	11
	借金がある		2	7	2	11
	子供生活を十分見られ無		9	1	1	11
	家族の病気・障害		3	6	1	10
	自分の健康・病気		3	5		8
	医療費が高い		3	4	1	8
	家が狭い		3	3	1	7
	子供の学校教育水準低		6			6
	家族の関係が悪い		2	2		4
	将来の生活が不安		2			2
	村人との人間関係が悪い		1	1		2
	差別がある			1		1
	生活が不便である			1		1
	貧しいから見下される		1			1
	その他		6	4		10
重病時に困る事（複数）	お金		12	8	1	21
	農業活動の継続		2	1	2	5
	世話してくれる人の有無			1	3	4
	子供の世話		2	1	1	4
医療費の補助	あり	30%	2	2		4
		60%	1			1
	なし		9	7	3	19
農村医療改革	聞いたことがある		14	14	3	31
	あまり分からない		12	7	3	22

資料）実態調査より作成

「産児制限手術の後遺症が残った。政府から月に60元もらう。それ以外に補助金はない」

「予想外の事故には適用されない。弟は交通事故で他人を死なせて、自分も重傷を負ったけれど補助金は出ない」

「村の病院では補助金が出ない。入院したら70%出るけど、入院しない場合はない」

「薬代は無理、郷の病院のみ補助金が出るけど、県病院は無理」

「予想外の事故には適用されない。三男は出稼ぎ中、事故にあって、５万元かかった」

「手術の場合のみ補助金がある。軽い病気には補助金がない」
「入院しない場合は30%、入院する場合は40%、県病院なら40～45%補助金が出る」

それに加え、妻は、「高齢者の介護がつらい」、「子供の生活を十分にみられない」、「子供の学校の教育水準が低い」等にも悩んでいる。

一方、父母は、「息子の結婚が難しい」、「借金がある」、「家族や自分の病気」等が課題となっている。借金は、子供達の結婚の条件として建設した住宅によるものであることが多い。

＊「息子が結婚する時、婚約代や結婚費用や家の新築などのためにかなり借金をした。その返済のために、夫が出稼ぎに行かないと農業だけでは不可能だ。もちろん、息子の収入は孫の将来のために使う。借金返済のためには使わない」

第２項　家族関係の変化（表2-8）

では次に、出稼ぎに伴う家族関係の変化をみよう。

息子が出稼ぎに出ても、父母の間での重要事項の決定権はあまり変わらない。依然として父の男性優位は揺るがない。しかし夫が出稼ぎに出た場合、決定権は夫から妻に移動している。出稼ぎに伴う夫の不在は、若い世代においては、家父長的な家族構造を変化させ、女性の自立・男女平等化を促している。

＊「夫が出稼ぎに出る前は、夫が家族の大事なことを決定していた。夫が出稼ぎに出た後は、何かあった時、夫に心配させないように、私１人で決めている。このことについて、夫がどう思うかは分からない」

留守を守る妻と父母の関係は、より緊密になったケースが多い。農作業・育児等の協働で、協力関係が深まっているのである。

＊「父母との関係が緊密になった。私は近くの工場で働いているので、子供の世話や農作業は主に父母がやってくれている。父母がいないと、私も働きに出られない」
「私は父母と以前より緊密になったと思う。父母は子供の世話を見てくれるし、農業も手伝ってくれる。父母がいないと、私１人ではどうしても無理だ」

息子が出稼ぎに出た父母の中で、以前は息子夫婦と別居していたが、出稼ぎ後、留守を守る妻と同居するようになったケースも少なくない。これも、農作業・育児の協働の便宜をはかった結果である。出稼ぎは、核家族化ではなく、むしろ拡大家族化を進めたといえよう。なおその場合も、父親を中心とした家父長制の復活が見られるのではない。経済的な意志決定は、父母と夫婦はあくまで別世帯として行っている。

＊「息子が出稼ぎに行った翌年、私達は嫁と同居した。孫が小さいので、嫁１人で家事や子供の世話や農業などをするのは無理だからだ。それに、嫁は若いので、夜は危ないという心配もある。同居して、夜も安心して寝られるようになった」

さらに一部では、妻が自分の実父母と同居はしないが、経済的に面倒をみるケースも増加しつつある。これも、一種の「隠れた拡大家族」化といえる。また妻の経済的な意志決定権の強化がもたらした１つの家族形態とも言える。総じて出稼ぎの増加は、核家族化というよりむしろ拡大家族化を促進している。

ただし、繰り返しになるが、それは父親を中心とする家父長制の復活ではなく、あくまで経済的意志決定は世代毎に別の構造をもっている。また出稼ぎ者夫婦間では、女性の自立・決定権強化も進んでいる。その意味で、拡大家族化と、夫婦間の女性の自立が並行しているのである。

出稼ぎ者と留守家族の関係には、特に大きな変化がないとの回答が多い。ただし人数は少ないが、出稼ぎ者との関係が疎遠になり、悪化・不安定化したと語るケースもある。特に夫婦の関係には、深刻な問題もある。長期にわたる別離、および夫が都市文化に触れて農村文化とのギャップを感じていることなどが、留守を守る妻に不安を与えている。夫の心が自分から離れていると感じつつ、見て見ぬふりをしている妻もいる。留守を守る妻は、出稼ぎ先での夫の行動を知りようがなく、家族の分裂の火種を持ち込まれかねない弱い立場に置かれているのである。

＊「今のところは、夫婦関係は大丈夫だと思う。でも将来は、夫の気持ちが変わっても、やむをえない。遥か遠くの都市で働いているのだから、私にはわかるわけがない」

「私達の夫婦関係は変わらないと思う。けれど、変わってしまう夫婦も多い。村の中で、出稼ぎに出た後に離婚した若い夫婦も少なくない。都市の女性と比べれば、農村の女性はもちろん文化レベルも低く、視野も狭いし、化粧もしない。都市の女性を見慣れたら、自分の妻を見られなくなる。あまり帰らなくなったり、帰っても夫婦喧嘩ばかりしたりして、最後には離婚しかなくなる。これはすべて夫が悪いと思う」

「Ａさんの夫は、都市に愛人がいる。Ａさんもそのことを知っているが、家族を維持するために知らないふりをしている。でも夫が帰ってくるとすぐ喧嘩になり、だんだん夫の帰る回数が少なくなっている」

「夫が出稼ぎに行き、夫婦関係は疎遠になった。出稼ぎ先はあまり遠くないが、私が電話しないと夫は帰ってこない。私が反対しても、夫は出稼ぎをやめようとしない」

「息子が出稼ぎに行った後、息子と嫁の夫婦関係が疎遠になった。孫が大きくなったら、嫁も息子が出稼ぎしている都市へ行かせたい。長期間、夫婦が別居しているのは良くないと思う」

「息子夫婦の関係はすごく悪くなった。悪いのは息子だ。息子の結婚はすべて私達が決めた。息子は19歳で結婚した。その後、子供も３人できた。みんな女の子だ。数年前、息子が出稼ぎに行って、出稼ぎ先で愛人を作った。私達が気づいた時には、愛人との間に子供もできていた。男の子だ。息子と愛人の関係は、嫁には黙っているしかない。でも嫁に申しわけなく、私達は嫁に今まで以上にもっと優しくすることしかできない。今も嫁は、気づいてないと思う。ずっと心配しているのは、もし嫁が気づいたらどうするかということだ。離婚だけは絶対に許さない」

また家族崩壊には至っていないが、中高年の父母の中に、息子・娘など若い世代の結婚観の変化に不安を感じているケースも少なくない。

＊「私はもう45歳だし、夫との感情は変わらない。夫は金もなく、若くもないから、夫婦の感情は心配ない。でも心配なのは娘のことだ。娘は出稼ぎに行く前に婚約した。でも出稼ぎに行ってから２年目に、出稼ぎ先で恋人ができてしまった。それで無理やり婚約を解消した。娘の恋人は、今まで一度しか会ったことがないが、イメージが良くない。将来、安定した生活をする人ではないと感じた。恋人の家族のことも一切わからず、出身地も遠いし、心配でしょうがない」

「歳をとった人間は変わらない。でも若者は変わりやすい。今の若者は、結婚を遊びのように思っていて、全然真剣に考えていない。今は何も問題はないが、今後はわからない」

表2-8　家族関係の変化

属性			妻	父母	妻・母	合計
人数			26	21	6	53
重要事項の決定権	出稼ぎ前	夫	7	15	5	27
		夫婦	8	2		10
		家族全員	4	2	1	7
		両親	6			6
		妻	1	1		2
		息子		1		1
	出稼ぎ後	夫	3	15	4	22
		妻	8	1	1	10
		夫婦	4	3		7
		家族全員	5	1	1	7
		両親	6			6
		息子		1		1
夫婦関係	何も影響ない		21	17	6	44
	疎遠になった		4	3		7
	緊密になった		1	1		2
留守両親との関係	何も影響ない		16	14	5	35
	緊密になった		5	3		8
	相互大切にした		3	4	1	8
	疎遠になった		2			2
留守妻と両親の関係	何も影響ない		12	9	6	27
	緊密になった		12	10		22
	疎遠になった		2	2		4
留守妻と留守両親の居住状況	出稼ぎ前	別居	14	12		26
		同居	11	9	4	24
		交替同居	1		2	3
	出稼ぎ後	別居	14	8	1	23
		同居	8	13	3	24
		交替同居	4		2	6

資料）実態調査より作成

第３項　村の社会関係と教育（表2-9）

では次に、出稼ぎの増加に伴う村の変化についてみよう。

出稼ぎで人手不足になったため、村では農作業・子供の預け合いなどの助け合いが増え、隣人関係は一層良好・緊密になったとの回答が多い。その限りでは、出稼ぎが村の関係を一概に希薄化させるとは言えず、むしろ逆の作用を果たしているともいえる。また出稼ぎ先でそれまで知らなかった同郷・近隣

村の人々と知り合い、里帰りした際に互いの家族ぐるみで交流を深めるケースもある。

＊「隣家も夫と子供が出稼ぎに行っている。農繁期は、隣家と一緒に作業をする。働き手が多くなり、気持ちも良くなるし、手伝い合えば、疲れも軽くなるような気がする」

「子供が出稼ぎに行って、出稼ぎ先で新しい知り合いができた。同じ村の人だが、以前は全然知らなかった。旧正月には互いに交流している。子供の出稼ぎを通して、多くの家族と新たに知りあいになった」

しかし一方、村の人間関係が疎遠になり、「前より村がひっそりしている」といった回答も、決して少なくない。出稼ぎで村から姿が消えると、やはりそれ以前の人間関係は維持できなくなる。

＊「以前は若者が村の商店の前でよく集まり、碁などをやる姿が毎日、見られた。今は、その商店の前の碁盤も撤去され、とても寂しい感じする」

「留守家族は忙しく、一緒に集まる時間もなくなった。疎遠になった。一番賑やかなのは旧正月で、出稼ぎ家族がみんな帰ってきて、以前のような光景が見られる」

「以前、村には若者がたくさんいて、とても賑やかだった。よく一緒に麻雀をやったり、トランプで遊んだりした。今は若者が皆、出稼ぎに行って静かになった」

「夫が出稼ぎに行く以前は、よく友達を呼んできて、家で集まったり、お酒を飲んだりしていた。出稼ぎに出た後は友達も来なくなり、道で出会っても声をかけあうだけで、疎遠になった」

それ以外にも、出稼ぎは村に様々な変化をもたらしている。

一方で、「出稼ぎによって村民全体の生活水準が向上した」、「村民の考え方がより柔軟になり、商売をやる人が増えた」との肯定的評価があるが、その裏側では「村民間に貧富の差が拡大した」との声も多い。

＊「出稼ぎ先から帰ってくる人が増えているので、視野が広くなった。帰ってきてから、共同経営や個人経営で商売をやる人が多くなった」

「出稼ぎに行く家族が増えているが、出稼ぎに行けない家族もいる。そんな家族は前と同じように生活しているが、出稼ぎ家族の収入が増えたので、当然貧富の格差は拡大している」

「農村でも物価がすごく高くなっている。以前の収入のままでは全然生活できなくなっている。出稼ぎに行く家族は経済的に豊かになったが、出稼ぎに行けない家族はもっと貧困になった」

また一方で、「村民が子供の教育を、より重視するようになった」、「大都市に行き、知識の重要性を再認識した親が増えた」との肯定的評価があるが、それと表裏一体で、「子供達が学習に興味を失い、出稼ぎに行くことを望むようになった」との意見も多い。親が出稼ぎによって教育費を稼ぎ、以前より教育熱心になっても、逆に子供の側は都市で稼げる出稼ぎへの憧れが先に立ち、学習への関心を失っている実態が伺える。

＊「子供にとって大都市は魅力がある。子供は、学校をやめて、父と一緒に働きに行きたいと何回も言っている」

「両親は子供にしっかり勉強させたいと思っているが、子供自身はそう思っていない。出稼ぎに行っている父の大都市での写真を見てすごく羨ましがり、自分も早く行きたいとよく言っている」

「今は大学を卒業しても就職が難しいという現実の中で、子供達は勉強にはあまり興味を持ってな

い。いつか退学して出稼ぎに行きたいと思うようになっている」

表2-9　村の変化（複数回答）

属性		妻	父母	妻・母	合計
	人数	26	21	6	53
隣人との関係	とてもいい	14	8	5	27
	よく互いに手伝う	6	6		12
	まあまあ	6	7	1	14
村民の関係（複数）	村からの大量人口流動に伴って村民の関係がより緊密になった	15	12	5	32
	村からの大量人口流動に伴って村民の関係が一層疎遠になった	5	4	1	10
	変化なし	6	5		11
村落の変化（複数）	出稼ぎで村民全体の生活水準が上昇した	22	18	6	46
	村民間の貧富差が拡大した	18	20	6	44
	村民の考え方がより柔軟となり、商売をやる人が増えた	21	14	6	41
	前より村落がひっそりとしている	16	19	5	40
	村民が子供教育をより重視するようになった	18	14	5	37
	子供達が学習に興味を失い、出稼ぎに行きたくなった	16	12	6	34

資料）実態調査より作成

さらに、筆者が想定していなかったため、表11に示した質問項目に入っていないものの、聞き取りの中で多くの留守家族が指摘したのは、村の治安の悪化である。村の人口が減り、人の視線が行き届かなくなり、また留守家族には女性や子供、高齢層が多いため、窃盗や痴漢等の被害が増加している。妻と父母の同居が増えていると前述したが、これも農作業・子育てでの協力のみならず、自衛的防犯の要素も強い。

＊「農産物がよく盗まれる。農地に木材用の樹を植えており、５年たつと売り物になるので売先と契約したが、一晩で23本が盗まれた。大損害だ。警察に言っても解決しない」

「若者がバイクに２人乗りして各村を回り、誰もいない家を見つけては忍び込んで泥棒する事件が多発した。警察に届けたが、ずっと捕まらない」

「泥棒の方法も巧妙になった。犬に毒薬を食べさせたり、食べなくても匂いを嗅ぐだけで死んでしまう薬を撒く。それで今は犬がほとんどいなくなり、いても大きく育たなくなっている」

「夜だけでなく、昼でも村の悪い男性が、出稼ぎ者の留守を守る若い妻に手を出すことが少なくない。だから今、妻はほとんど父母と同居するようになった」

「１年前、深夜２時ごろ、痴漢が嫁の家に入った。嫁が大きな声で助けてを求めたのが、隣家に聞こえた。それで痴漢は塀を乗り越えて逃げた。その後、嫁と同居するようになった」

「今、村では不審な雰囲気が濃くなっている。心配なのは、子供の安全だ。テレビでよく見るが、子供がさらわれ、手や足を切り落とされて、大都市へ物乞いに行かせられる。だから、孫の帰宅が少しでも遅くなると、すごく心配だ」

第３節　社会意識とその変化

最後に、出稼ぎに伴う留守家族の社会意識とその変化を、①出稼ぎについて、②子供への期待、そして③政府への要望の３点についてみていこう。

第１項　出稼ぎについての意識（表2-10）

夫や子供が出稼ぎに行くことについては、留守家族はほぼ全員が賛成している（表10）。主要には、経済的な理由である。「出稼ぎの送金で借金を少しずつ返している。借金がなくなるまで、出稼ぎに行くしかない」と語るケースもある。特に妻は子供の教育費、父母は子供のための家屋の建築費を確保するために、出稼ぎは必要不可欠のものとみなしている。

しかしもちろん留守家族に寂しさがないわけではない。留守家族はほぼ全員、寂しさ・孤独感を感じている。特に妻においては、出稼ぎ先までの距離が、そのまま心理的な不安になっている場合も多い。いざという時、すぐに帰れるように、夫には少しでも近い地域に出稼ぎに行ってほしいと願う妻は多い。

＊「夫は県城に行っているので、月に１回は帰宅できる。もし北京に行ったら、年に１回位しか帰れないから、ちょっとよくない」

「結婚前、夫は上海に出稼ぎに行っていた。結婚して２年後、私が妊娠したので、夫は上海の仕事を止め、青島に行くことにした。青島も近いとはいえないが、上海よりは近く感じるから」

「夫は県城に出稼ぎに行っている。県城の仕事なら、農繁期に休みが取れる。大都市ではそれができないから」

「農繁期は夫が帰らないと人手が足りないので、夫は遠い所へは行かない。遠くてもせいぜい済南だ。子供なら、農業をやらせないので遠くへ出稼ぎに行っても構わない」

これに対し、父母は、息子の出稼ぎ先には特に干渉していない。「子供の選択を尊重する」、「子供の好きにすればいい」、「子供ももう一人前だから、どこに行くかは自分で決めればいい」等と語る。しかし一部の父母は、子供の安全を案じる親心として、助け合える身近な人が出稼ぎに行っている地域に、自分の子供も行かせたいと考えている。

＊「子供はまだ若いから、知り合いが多い都市に行くのが一番安心だ。たまたま親戚が北京にいたので、子供も北京に行かせた」

「友人の紹介で、長男は天津の自動車工場に行った。次男と長女も、長男の紹介で天津に出稼ぎに行った。きょうだいが互いに助け合えるから安心だ」

「うちの村からは、北京と天津に出稼ぎに行く人が一番多い。だからもちろん、うちの子供も北京に行った。村の人々と互いに助け合えるからだ」

表2-10　出稼ぎについての意識

属性			妻	父母	妻・母	合計
人数			26	21	6	53
出稼ぎに賛成			25	20	6	51
出稼ぎに反対			1	1		2
出稼ぎ活動への考え（複数）	良い事	生活状況改善された	19	19	6	44
		農業大変だが収入増	19	19	6	44
		古い意識が変わった	8	5	4	17
		都市の息吹を感じた	3	3		6
	悪い事	留守家族の世話を見てくれない	22	16	6	44
		子供教育に関わら無	23	13	6	42
		耕作せず土地荒れた	2	2	3	7
経済生活の改善（複数）	子供教育費を稼げた		17	6	3	26
	家の購入費を稼げた		6	13	4	23
	家族の治療入院費を稼げた		4	4	2	10
	農業器具等の資金を稼げた		5	2	3	10
	将来自営業を始めるための資金を貯めることができた		4	2		6
	家の建築費を稼げた		4	1		5
	それ以外の資金を稼げた		7	7	2	16
孤独感	常に感じる		17	9	5	31
	時々感じる		8	9	1	18
	感じていない		1	3		4
出稼ぎ家族への心配事（複数）	仕事の危険性		16	11	6	33
	健康		13	7	3	23
	夫婦関係		6	9		15
	収入の少なさ		5	8		13
	仕事の不安定さ		7	2	1	10
	食事・住居		5	3		8
	他人からの差別		1	1	1	3
出稼ぎ家族への希望（複数）	資金貯めて帰郷で自営業		11	7	4	22
	専門技術を把握、仕事容易		7	9	1	17
	家族全員で都市に定住する		6	4	1	11
	帰って一緒に生活したい		2	1		3

資料）実態調査より作成

妻・父母を問わず、出稼ぎ先での労災事故・病気等を案じる留守家族も多い。実際に、出稼ぎ先で労災に遭遇したり、病気で死んだケースもある。前述のように確かに留守家族は経済的理由から出稼ぎに

は賛成しているが、しかしそれは極めてアンビヴァレントな心情の上に成り立っているといえよう。

＊「２人の息子が出稼ぎに行き、確かに生活は改善した。でも、上の子が出稼ぎ先で急病になった時、そばに誰もいなかったため死んでしまった。すごく後悔している。その子はずっと体があまりよくなかったが、一度も病院できちんと検査をしたことがなかった。今、下の子も出稼ぎに行っているが、健康をすごく心配している。お金はそんなに稼がなくても、健康に生きているだけで十分だ」

「以前、３人の息子は皆、出稼ぎに行った。今、２番目の息子だけが出稼ぎに行っている。末っ子は北京の機械工場で働いていて、機械に挟まれ、右手を切断した。まだ21歳なので、今後の生活をすごく心配している。出稼ぎに行かなかければよかったと、ずっと後悔している。本人もとても気持ちが暗くなり、毎日部屋にひきこもり、どこへも外出しない。もし精神的にも病気になったら、もっと大変だ。まだ出稼ぎしている息子についても、仕事が安全なのかどうか、とても心配している」

「仕事が危ない。船で海に出て魚を採ったり、海岸で船を修理したりして、とても辛いそうだ。いつも不安がたえないので、いつかは必ずやめさせたい」

出稼ぎ者が子供の教育に十分に関与できないことも、留守家族の不満・不安のひとつである。子供が勉強に無関心になり、逸脱行動も多くなっている。また、両親が共に出稼ぎに出ている場合には、祖父母にあたる留守父母が学習の監督やしつけにいっそう困っている様子が分かる。

＊「子供は生まれた時から、父親とあまりあったことがない。今４歳だが、去年、夫が帰省した時、子供が『お父さん』と呼ばず、『おじさん』と呼んだ。夫はすごくがっかりしていた」

「以前は夫婦で出稼ぎに行っていたが、子供があまり勉強しなくなった。よく殴り合いのケンカもした。それで私は出稼ぎをやめ、家で子供のそばにいることにした。夫は一人で出稼ぎを続けている。今、子供はケンカはあまりしなくなったが、成績はよくない。それでも以前より、ましになった」

「孫が自分の親と長く離れているのは、あまりよくない。子供の衣食などの世話は見れるけれど、勉強に関心をもたせることは全然できない。今、小学校だから、まだ大丈夫だけど、将来中学校に入ると、絶対、息子か嫁かどちらか１人は帰ってくるしかない」

「孫はよく学校をさぼったりする。学校の勉強のことはまったく分からないので、孫の勉強を監督できない」

「自分の親がそばにいないので子供がかわいそうかなと思っている。悪い事をしてもしっかり叱ることはできない」

最後に、出稼ぎ者の将来については、１つは「都市への出稼ぎで十分な資金を貯めて、将来、農村に帰って自営業をしてほしい」、いま１つは「何らかの専門技術を習得して都市に定住してほしい」との希望がある。妻の多くは前者、父母の多くは後者を希望している。また妻の一部は、将来、「自分も子供も含め、家族全員で都市に定住したい」との希望ももっている。聞き取りによると、自営業を希望する理由は積極的なものではなく、技術的・経験的に農業ができない（あるいはしたくない）、かつ、将来性のある仕事がそもそも農村にないといった、悲観的な理由による。それを裏づけるかのように、都市への定住を希望する理由としては、将来的なチャンスの多さが挙げられることが多い。

＊「ずっと都市で出稼ぎを続けることは不可能だから、遅かれ早かれ帰るしかない。けど、農業も嫌いだし、仕事もないし、やはり何か自営業をしたほうがいい」

「北京では自分の家もない。帰って、家族と一緒に何か商売をしたい」

「技術が一番大事。技術をよく身につければ、都市でいい仕事も見つけられる」

「専門技術があれば収入はやはり都市の方が高い」

「都市での定住は不可能ではない。都市でのチャンスは農村では想像できない。どうしても主人には北京に定住してほしい。良ければ将来、私も子供も北京へ行く」

「農村に帰れば、自営業しかできない。他にいい選択肢はない」

「知識は大事。子供はチャンスがあればぜひ専門知識を勉強してほしい」

「主人には十分なお金を貯めれば早く帰ってきてほしいが、息子は都市に残ってほしい。帰っても将来の見込みはないし、農業もできない」

「息子は自分で相手を見つけて結婚した。嫁も外地人だが、もし帰ってきてもここの生活には慣れてないだろう。２人とも都市で生活した方がいい」

第２項　子供への期待（表2-11）

次に、子供への期待をみる。

子供の性別にこだわるか否かは、妻と父母で大きな差がある。妻は「男でも女でもいい」と考えているのに対し、父母は「跡継ぎである男児」を望んでいる。ここにも、父母の世代に男尊女卑の思想が維持されているが、妻の世代では男女平等の意識が強まっていることが伺える（注２）。

子供の学歴は、妻・父母とも高学歴を望んでいるが、特に妻にその傾向が顕著である。妻の場合、出稼ぎの送金を主に子供の教育費に当てていることからも、それは明らかである。また子供の学歴についても男女平等の意識が定着してきている。また教育費がかさむ１つの理由として、子供をできるだけ都市の学校に行かせたいと考えていることが挙げられる。都市の学校の方が、教育レベルが高いからである（注３）。

＊「以前は、子供が漢字を読める程度だったら十分だと思っていた。今は、全然足りない気がする。できれば、子供はみんな高い学歴を取ってほしい」

「以前は男の子は学校に行かせて、女の子は行かせない家族が多かったが、現在、その考え方は変わった。子供の性別に関係なく、女の子でも男の子でも勉強が好きな子だったら、同じように大きな期待を寄せるようになった」

子供の将来の職業については、妻・父母とも、①大都市に出て専門職になること、または②地元で公務員として権力を握ることを期待する人が多い。ここには、農村居住者としての差別を子供には経験させたくないという思い、および実際に専門職または公務員になれば家族全体が恩恵・実利を得られるといった思いの双方が錯綜している。また公務員になるなら地元の方が、留守家族にとってより実利があるとの声も聞かれ、公務員に就くことによって家族が得られる恩恵への敏感さが垣間見える。彼・彼女らは、郷または郷以上の政府の中に人的ネットワークを得ると、事を順調に運べるという現実をはっきりと踏まえているのである。

＊「公務員になってほしい。政府に人脈があったら、メリットがいっぱいある」

表2-11　子供への期待

属性			妻	父母	妻・母	合計
人数			26	21	6	53
性別	どちらでもよい		16	6	4	26
	血統の跡継で、男がほしい		7	13	2	22
	優しいから女がほしい		3	2		5
学歴	高校まで		1	1		2
	大学まで		17	19	6	42
	博士まで		7			7
	留学		1	1		2
希望定住地	北京・上海などの大都市		18	13	6	37
	一般的な都市		3	6		9
	農村		2	2		4
	外国		3			3
どんな人間になってほしいか	政府の公務員		17	12	3	32
	専門職・管理職・エリート		16	12	3	31
	親や高齢を尊敬、道徳的		9	6	3	18
	経済的に豊か		7	4		11
	農村の発展に貢献できる		5	1		6
	友達や周囲と仲良できる		2	1		3
	農民差別せず農民を尊敬する		2			2
都市の学校に入れさせたいか	はい		19	16	6	41
	理由（複数）	教育レベルが高い	16	15	6	37
		将来進学しやすい	4		1	5
		都市生活に慣れ	4		1	5
		両親と一緒に暮らし	1	1	2	4
		授業の科目が多い		1	1	2
	いいえ		7	5		12
	理由（複数）	都市の授業料が高い	7	5		12
		戸籍で大学進学不可	2	3		5
		都市生活に慣か心配		2		2
		都市授業進度についていけない	1			1

資料）実態調査より作成

「孫が将来、政府の公務員になって、家族を保護してくれるといい」

「政府の公務員になってほしい。北京などではなく、県城とか郷の政府で十分。その方が、家族や親戚も保護してもらえる」

「農村でもし郷政府に親戚がいたら、何をするにもやりやすい。人脈が無かったら、政策に合っていてもやりにくい。だから子供は将来、郷政府で公務員にしたい」

しかしごく一部ではあるが、自分の出稼ぎの経験もふまえ、子供には「道徳やまわりの人間関係を大切にしてほしい」、「将来、農村の発展に貢献して、農民を差別せず、農村を尊敬する人間になってほしい」との希望をもつ留守家族もいる。ただしやはりこうしたケースは全体の中ではごくわずかである。

＊「お金も大事だが、道徳はもっと大事だ。そういう資質を身につけなければ、友達もできないし、将来、見込みがないだろう」

「都市と農村の格差はあまりに大きい。農民は差別される。自分の子供には将来、農民を尊敬し、優秀な農民になってほしい」

「親孝行になってほしい。父母が育ててくれた恩恵を忘れず、多くの友達ができて、立派な人間になってほしい」

第３項　政府への要望（表2-12）

最後に、政府に対する要望は、主に３つである。

第１に、出稼ぎにおける給与の保証である。この課題が政府への要望になること自体、不払いが頻発していることを伺わせる。

＊「夫も給料の不払いを経験したことがある。そんなことが２度とないようにしてほしい」

「出稼ぎで一生懸命に働いたのに、結局、給料を約束通り支給してくれなかった。政府は会社への管理をきちんとしてほしい」

第２は、留守家族の人身・財産の安全確保である。これもまた政府への切実な要望になること自体、村の治安の悪化の深刻さを物語っている。確かに村内での協力関係も強化されているとはいえ、治安の悪化はそれを遥かにしのぐ規模と速度で進んでいる。政府や警察権力に頼るしかなくなっているのである。

＊「以前はドアを開けたままで寝ても大丈夫だった。今は泥棒が多くなった。ドアにきちんと鍵を掛けても泥棒が入るということもよく聞く。政府は治安に関心をもってほしい」

「村に15～16歳の泥棒が何人もいる。よく、昼に誰も居ない家に入り、金を探している。だから、みんな現金を家に置かなくなった。去年、警察に捕らえられて罰金を科され、釈放された。全然反省していなくて、依然として泥棒をしている。みんな知っているけど、証拠がない。政府は、もっと厳しく取り締まってほしい」

「一番怖いのは、若い妻だ。夫が家にいないし、妻と幼児だけが残っているので、夜に痴漢に入られたら危険だ。政府は何か対策をうってほしい。例えば、警察が深夜に村の中を巡回するなどしてほしい」

第３は、高齢者の扶養に関する要望もある。ただしこれは、主要には都市・農村の差別に関する問題でもあり、農村の深刻な実態と密接に関連した要望といえよう。

＊「老人の扶養も問題だ。都市では60歳の老人は政府からの扶養料をいくらかもらえるが、なぜ農村の老人にはくれないのか。都市よりもっとその扶養料が必要ではないか」

以上の３つの要望、とりわけ最初の２つは、生活と社会を成り立たせる上で、あまりに必要最低限の要望といわざるを得ない。このような要望が、政府への主な要望となっていること自体、現在の農村の深刻な実態を物語っているといえるだろう。

しかも多くの留守家族は、このような必要最低限の要望すら、政府の政策でかなえられるとは考えていない。いわば諦観が蔓延している。

＊「出稼ぎの給料の不払いも心配だし、留守を守る嫁の身の安全も心配だ。政府に期待しているけれど、解決は不可能だ。今の府はお金のことしか考えていない」

表2-12　政府への要望（複数回答）

属性		妻	父母	妻・母	合計
	人数	26	21	6	53
出稼ぎ者関連	給料の保障	10	10	5	25
	安全の保障	5	2	2	9
	都市住民と同じ待遇保障	7			7
	仕事の紹介・情報の提供	3	3		6
	給料のアップ	1	4		5
	保険の加入	2	2		4
	労働条件・労働契約の整備	2	2		4
	技術の養成	1	2		3
	生活上の関心	1		1	2
	仕事の安定の保障		2		2
	自営業の資金としてのローンの提供	1	1		2
	労働時間の保障	1	1		2
	旧正月の帰省困難の解決		1		1
留守家族関連	人身・財産の安全保障	10	10	2	22
	老人の扶養	3	3	3	9
	貧困農家への救済金援助	3	3	1	7
	農業機械の提供	3		2	5
	費用の取り消し	3	1		4
	子供の教育への注力	3			3
	住居問題の解決	1	2		3
	道路の修繕	1	1		2
	障害者の補助		1		1
	ローンの提供	1			1

資料）実態調査より作成

このように政府に対する諦観が蔓延している一方で、子供には公務員になって自分の家族に個別に便宜をはかってほしいと考えざるを得ないというところに、現在の中国の農村の深刻な実態がある。

第4節　小括

以上、出稼ぎ者の留守家族の生活実態を分析してきた。簡単に総括し、考察しよう。

まず第1に、留守家族の主な生業である農業生産には、多くの深刻な問題が山積していた。村内の家族勢力の強弱による農地配分の不平等があることに加え、農業生産自体が高コスト・低収入で現金収入に結びつかず、ほとんど食糧自給のためになされているといった実態にあった。農業だけではとうてい生活を維持できず、生きるために出稼ぎが不可欠なのである。そして基幹労働力が出稼ぎに出ることにより、農業生産で労働力不足が顕在化し、高齢の父母や妻など留守家族に過重な負担がかかっていた。これに対応するため、農産物をモノカルチャー化し、農薬を多用するといった試みもみられた。そしてこうした試みが一方で農業の高コスト・低収入化にさらに拍車をかけ、他方で留守家族の健康破壊をももたらしていた。馮（2009）にあるように、確かに「（人口流出は）農業活動に負の影響を与えている」。しかしそれをいうだけでは一面的である。農業の低生産性・費用対効果の低さが出稼ぎを不可欠にし、出稼ぎが農業生産をさらに困難にするといった悪循環が存在するのである。　したがって第2に、生活費・教育費・医療費等は、出稼ぎの送金に依存せざるをえない。出稼ぎ者の父母は、高齢であるため医療費がかさむ。また中国の農村では子供達の結婚資金（住宅建築費）を父母が負担するという慣習があるため、多くの父母はこれによる借金を抱えざるを得ない。こうした中で、出稼ぎに出た子供からの送金はたとえ金額的に少なくても、子供が経済的に自立して自らの結婚資金を稼いでくれるだけで、老父母の経済的負担は軽減しうる。一方、出稼ぎ者の妻は、基本的な生活費・子供の教育費等を出稼ぎの送金に大幅に依存し、出稼ぎなしの生活はもはや考えられなくなっている。そこで父母・妻ともに留守家族は、出稼ぎ者の健康を案じつつ、しかし経済的な観点から出稼ぎは不可欠だと考えている。さらに父母だけでなく、妻も含め、重病時の医療費は深刻である。農村の医療保険は極めて不十分で、いざという時、農民は莫大な医療費を自己負担しなければならない。緊急時に備え、多額の貯金をしておかなければならないと、多くの留守家族は考えている。こうした状況の中で、確かに多くの留守家族は、出稼ぎの送金によって生活が改善されたと考えている。しかしそれは、馮（2009）がいうように、「（出稼ぎ者からの送金で）留守家族の経済状況が大きく改善された」といった楽観的な見方を裏付けるものといえるのであろうか。むしろ極めて不安定な経済状況を余儀なくされ、その中で出稼ぎの送金によってかろうじて生活を維持し、いざという時のために備えているという方が、実態に近いのではないだろうか。留守家族が「出稼ぎの送金で生活が改善された」というのは、決して、より豊かになったという意味ではない。むしろ「出稼ぎ送金がなければ、とても生活を維持できない」ということであろう。もちろん電化製品・耐久消費財等の購入状況、および出稼ぎの送金を含む収入額と日常の支出額だけを比較すれば、留守家族はそれほど経済的に困窮していないようにみえる。しかし最も基本的な生活費・医療費・教育費やそれらのための貯蓄の必要性まで考えると、単純に「出稼ぎが経済的発展に貢献した」とは言い難いように思われる。

第3に、夫の出稼ぎ化に伴い、子供の世話、老親の扶養・介護、農業生産、安全確保等の観点から、父母と妻の共働、また同居化が進展している。先行研究では、出稼ぎが家族の小規模化・核家族化をもたらすといった認識が多かったが、本調査結果は、それとは逆に出稼ぎが拡大家族化をもたらしている

という興味深い事実を示していた。しかもこの拡大家族化は、家父長制の復活・強化ではない。出稼ぎ者と妻の間では、家族にかかわる意志決定を妻が主に担うようになっていた。父母と妻が同居しても、家計面では別世帯であり、その面でも妻の権限は強化されていた。妻が、出稼ぎ者の父母だけでなく、自らの父母をも経済的に支援するという「隠れた拡大家族」化もみられた。いわば生活上の相互扶助機能を基礎とする拡大家族の形態をとりつつ、しかし経済的には互いに独立しているという核家族的な要素も併せ持ち、その中で出稼ぎ者の妻の権限・意志決定権が強まっているのである。妻は、もはや子供の性別（跡継ぎとしての男児）にもこだわらず、その点に着眼しても男尊女卑・家父長制は崩れつつあった。

しかし第４に、こうした家族形態の変化、および妻の「地位上昇」・男尊女卑意識の希薄化を、馮（2009）が指摘するように「女性の自立」、または自立と共働の同時進行といったポジティブな文脈だけで捉えることには、多くの無理があるように思われる。妻は、農業と家事・育児の両立、さらに高齢者の介護に大きな負担を感じている。父母と妻の同居は、農業や生活の最低限の維持の必要に迫られたものであり、時には治安悪化の中に取り残された女性・子供・高齢者の自己防衛の営みでもあった。妻は、遠隔地にいる夫との心理的距離に悩まされ、一部には実質的な家族崩壊の危険を感じているケースもあった。留守家族の大半は、寂しさ・孤独を感じている。経済的収入と、家族関係の不安のアンビヴァレントな心情の上に、かろうじて出稼ぎを肯定している。妻が、もはや子供の性別にこだわらないのは、男児（跡継ぎ）の存在がもはや老後生活を保障し得るものではなくなっているからでもある。もとより、近代における女性の自立・男尊女卑の払拭が、決して明色に彩られた選択的なものではなく、自給自足的農業生産に基づく安定した生活の崩壊、市場経済の渦中での貧困化と不安定化・孤立化の中で、個々人に選択の余地なく押し付けられるものであるとするならば、現在の中国の農村では確かにそれが着実に進んでいるといえよう。

そして第５に、農村社会についても同様のことがいえる。出稼ぎ者の流出に伴い、農作業での共同、困った時の助け合いなど、必要に迫られた隣人関係が一層、強化されつつある。その限りでは、出稼ぎの増加が村の社会関係を疎遠化させているとは、一概にはいえない。出稼ぎ先で培われた新たな社会関係が、農村に持ち込まれているケースもみられる。しかしその一方で、村内の人間関係は着実に疎遠になっている。また、女性・子供・高齢者だけが取り残され、しかも生活の不安定化が進む農村社会では、何より治安の悪化が極限まで進みつつある。留守家族は、政府に対して、最低限の治安の維持、および出稼ぎ先での賃金不払いの防止を望んでいるが、それすら実際には困難であるといった諦観に陥っている。そしてこうした現状からの脱出を、自らの子供を都市のエリート、または地元の公務員にすることに託している。エリートとして都市に脱出するか、もしくは全体の奉仕者というよりはむしろ公的権力を身内のために利用しうる立場（公務員）になることにより、「現実的」に問題の緩和・解決を図る以外に、展望を見いだしえていない。ここに、現代中国の農村問題の深刻さが垣間見られる。しかももとより、実際に多くの子供達が都市のエリートや地元の公務員になれるわけではない。出稼ぎ者が都市での生活体験をふまえ、「子供の教育を重視」し、「知識の重要性を再認識」して教育熱心になり、教育費を稼ぐために出稼ぎに行っても、子供達は「学習に興味を失い、出稼ぎに行くことを望むようになっている」。これもまた、脱封建・旧社会といった明色の「近代」ではなく、苦汁と不安に満ちた「近代」として捉えれば、確かに出稼ぎは中国の農村社会を「近代化」しているといえるだろう。

注

注１：新型農村合作医療制度とは、農村で実施される、農民が自主的に参加する医療保障システムである。農民が20%、政府が80%を出資して、１つの医療基金を作り、その医療制度に加入した農民には一定の医療費が支給される。中国衛生部（2008）によると、2003年の試行以来、2007年には加入率が86.2%に達した。

注２：従来、「養子防老」（息子を産めば、老後の保障になる）という意識があり、男の子が重視された。しかし現在は、「養子」が「防老」してくれるとは限らず、むしろ「養女防老」（娘を産めば、老後の保障になる）という意識が生まれている。

注３：都市の学校は授業料が高く、また戸籍制限があるため大学に進学できず、出身地に戻らなければならないという現実を認識し、子供を農村の学校に入れたいと考える留守家族もいる。戸籍制度は、教育機会の２つの不均等をもたらしている。１つは出身地での進学制度である。すなわち、都市の学校で教育を受けても、大学進学時、大学の入学試験を受けられない。もう１つは大学入学成績の不平等である。中国の大学入試では全国統一試験を実施するが、入学を認められる成績は戸籍によって異なる。農村出身の受験生は都市出身の受験生より遥かに高い成績を求められる。例えば、北京出身の受験生の場合、600点（満点750）で北京大学などの有名大学に入れるが、山東省の農村出身の受験生は、同等の成績では山東省内の一般大学にしか入れない。この事実が、「子供の大学への進学のため、他の省の偽戸籍を取得する」という社会問題を引き起こす原因にもなっている。

第３章　出稼ぎからの帰郷者の生活と社会意識

——山東省鄆城県南趙楼郷の事例研究——

本章では、都市で出稼ぎを体験して農村に帰郷した農民の生活と社会意識をトータルに把握し、それを通して、出稼ぎおよび帰郷が、出稼ぎ者本人やその家族、農村、ひいては中国社会にとってどのような意味をもつのかを考察する。

素材とする調査の概要は、序章で示したように、2010年9月～10月、山東省鄆城県南趙楼郷において、33名の帰郷者に対象（表3-1）として実施したインテンシヴな面接聞き取り調査および参与観察である。

表3-1　調査対象者

男		女	合計
60年代生（40歳以上）	70年代以降生（39歳以下）	70年代以降生（39歳以下）	
8	20	5	33
28			

資料）実態調査より作成

第１節　帰郷者の家族構成と農業生産

まず、帰郷者の家族構成と農業生産の実態をみよう。

第１項　家族構成（表3-2）

本章の対象者は全員、既婚で子供がある。子供の人数は２人以上が３分の２を占めるが、1970年以降に生まれた若年の帰郷者では子供が１人のケースも多い。

対象者の約３分の２は、両親と別居している。両親とも健在の場合、両親は二人だけで住んでいることが多い。両親のいずれかが死去した場合は、独居、または女性を含む帰郷者の兄弟姉妹と同居している。

＊「父母は二人で暮らしてきたが、去年、父親が死に、残った母親は独居している。ただし母親は１年の半分以上、妹の家に住んでいるので心配ない」

「母親の死後、父親はずっと姉と同居してきた。父親は体調が悪いが、僕も妻も忙しく、面倒を見られない。姉は専業主婦で、義兄も金持ちだから、僕達と同居するより、父親はいい生活ができる」

「父親がいた時は、両親だけで住んでいた。父親の死後、母親は兄弟姉妹４人の家を順番にまわって同居している」

一方、両親と同居している約３分の１のケースは、1980年以降に生まれた若年の帰郷者に多い。この場合、両親もまだ比較的若い。そこで両親の扶養・介護の必要というより、むしろ子供の養育等で両親の助力を得るための同居である。ここでも、女性の帰郷者の両親との同居もみられる。

＊「子供がまだ小さく、僕も忙しいから、両親と同居している。おかげで僕は安心できる」

「子供がまだ小さく、私達夫婦は忙しいから、私の両親と同居して、子供の面倒をみてもらってい

る。夫の両親とは別居している」

総じて、帰郷者の家族は核家族が多い。また両親と同居する場合、高齢者の扶養というよりむしろ、両親が帰郷者世代の生活・育児を支援している。高齢の両親の扶養・介護が必要になった場合、女性（娘）を含め、経済力のある子供が実質的にそれを担っている。かつての中国農村では「養児防老」（跡継ぎとなる男児が高齢者と同居して扶養を担当する慣習）が一般的だったが、現在の扶養形態は大きく変貌している。

表3-2　家族構成

		男		女	合計
		60年代生	70年代以降生		
		8	20	5	33
学歴	小学校	3	1	1	5
	中学校	5	14	3	22
	高校		4	1	5
	大学		1		1
子供の人数	1人		9	2	11
	2人	8	8	2	18
	3人		3	1	4
父母との居住状況	同居	2	9	1	12
	別居	5	11	4	20
	父母なし	1			1

資料）実態調査より作成

第２項　土地所有（表3-3）

では次に、土地所有についてみよう。

中国農村の土地は、原則として家族人数に応じて分配される。本稿の対象者の場合、１人当たりの分配面積は、１～1.5畝である。

ただし、実際の土地分配には、様々な不公平・格差がある。若年・女性の帰郷者には、１畝未満の農地しか分配されていないケースも多い。しかも近年、都市化の進展に伴って農地面積が減少し、従来の基準での農地分配が困難になっている。土地分配をめぐり、行政方針の一方的押し付けやコネも横行している。

＊「最初の配分時、みんな同じ面積をもらったが、その後、30年間、各家の面積は変わっていない。家族の人数が変わっても、土地面積は変わらない。村長や郷・県政府の要人とコネがあれば、基準通りの土地がもらえるが、そうでなければ無理だ」

「孫が産まれたのに、土地がもらえない。今、予備の土地がないから１人当たりの面積が少なくなり、やむをえない。皆、土地をほしがっている」

「結婚したが、私の土地はまだ実家に残っている。移動させられない。子供が産まれたが、新しい

土地も分配してくれない。だから今、うちは4人家族なのに、夫1人分の土地しかない。1.5畝の土地では、農業だけでは生活できない。だから夫婦双方の両親から、よく食糧をもらっている」

帰郷者にとって、農地は依然として重要なものである。ただしその意味内容は、年齢によって異なる。まず年長者では、「農民にとって土地は理屈抜きで大切なもの」という旧来からの感覚がある。また「苦労して地主からようやく手に入れた宝物」といった、歴史的経過を重視する声もある。

＊「今は経済的にみれば土地はそれほど大事ではないかもしれないが、農民だから、どうしても土地とは離れられない」

「両親の年代の老人にとって、土地は命だ。両親は、1950年代に地主から土地を解放され、ようやく自分の土地を持つことができた。だから、まるで宝物のようだ。僕にもまだ、そういう感覚は残っている」

これに対し、若年者は、農地の純経済的な価値を重視している。農地は、失業時の最低限の生活保障、また「安全な食品」を求める消費者をターゲットにした農業の潜在的可能性を念頭においた生産手段、さらに換金できる資産である。また若年者の一部は、個人的趣味の手段として土地を認識している。

＊「農民が都市市民よりいい点があるとすれば、土地を持っている点だ。土地は農民にとって唯一の宝物だ。もし都市で仕事を失えば、農村に帰って自給自足できる。都市市民は土地もないから、失業したら退路もない」

「土地は宝物だ。今、世界中で環境が重視され、緑色食品（無農薬・有機栽培の農産物）が求められている。もし土地を上手に利用していい作物を栽培すれば、大いに前途がある」

「都市では土地の値段がとても高い。ここは都市から離れているが、それでも工場や住宅団地への土地転用が進んでいる。近年、ここでも地価が上がってきた。土地は農産物を生産するためものであるばかりではない。農民の唯一の資本だ。以前、出稼ぎに行った都市でも、そこは元々農村だった。都市化が進み、地元の農民が皆、土地を高い値段で売り、金持ちになり、高いマンションに住んでいた。ここでもいつか、土地成金が出てくるだろう」

「農民は自分の土地を重視しないが、都市の金持ちは一生懸命に土地を買っている。観葉植物を栽培して自分が癒されるためだ。同じ土地でも、人間が違えば意味も変わる」

ただし後述する如く、実際には農業は総じて衰退しつつある。そこで土地をあまり重視しないケースも、年齢・性別を問わず、増加しつつある。「土地が多いとか少ないとか、気にしない」（男性・80年代生）、「土地があってもなくても、生活には影響しない」（男性・60年代生）との声も少なくないのである。

特に1980年代以降に生まれた若年者は、学校を卒業後、直ちに出稼ぎに出たため、農業経験が皆無のケースも多い。将来、農業をする予定もない。そこで土地に対する関心が特に希薄になっている。

＊「農業をしたこともないし、農業の話を両親から聞いたこともない。僕にとっては土地の有無は意味がない。たとえ土地があっても、将来、農業をやる予定は全然ない」

「若者には農業をやったことがある人、もしくは今、やっている人がほとんどいない。将来もやらない。だから、土地もそんなに大切なものとは思えない」

表3-3　土地所有

		男		女	合計
		60年代生	70年代以降生		
		8	20	5	33
所有土地面積（1人当たり）	1畝未満	1	8	4	13
	1畝～1.2畝未満	2	6		8
	1.2畝～1.5畝未満	5	6	1	12

資料）実態調査より作成

第３項　農業生産（表3-4、表3-5）

出稼ぎ前・出稼ぎ中の帰郷者家族の農業生産の主な担い手は、両親であった。帰郷後は、年長者ほど帰郷者夫婦が農業に従事し、逆に若年者ほど引き続き両親がそれを担当している。年長の帰郷者の場合、両親も高齢化していることに加え、帰郷者自身も出稼ぎ以前に農業に従事した経験がある。これに対し、若年の帰郷者は、両親がまだ働ける年齢で、しかも帰郷者は学校卒業後、直ちに出稼ぎに出て、農業経験が少ないためである。

全体の３分の１の帰郷者は、農地を貸与している。特に若年の帰郷者には、農業を担う家族労働力の不足、および「工業用地として貸与すれば、農業所得より高い地代が得られる」との理由で農地を貸与しているケースも少なくない。ただし家族労働力の不足は、帰郷者が農業に従事しないことを前提とした不足である。また工業用地としての貸与の中には、行政府の方針で「貸したくなくても貸すしかない」場合も含まれる。

＊「最近、工場がどんどん建てられている。政府が農民から土地を回収して、工場用地として自営業者に貸しているからだ。国家は耕地の転用を禁止しているが、郷・県政府は経済収入を重視して、工場に貸している。地代は農産物による収入より高いから、みんな喜んでいる」

「今、道路や工場などがたくさんの土地を占用している。もし自分の土地が指定されたら、貸したくなくても貸すしかない。政府の指示には誰も逆らえない」

「両親は体が弱く、子供も小さいから、妻１人で耕作は無理。だから土地を貸している」

「夫はまだ出稼ぎ中で、私は帰郷したが、農業のことは全く分からない。子供も小さく、今の仕事の収入もいいから、やめるつもりはない。両親だけでは耕作が無理だから、土地を貸している」

帰郷後の農業生産は、出稼ぎ開始以前に比べ、モノカルチャー化している。出稼ぎ開始以前は、麦・大豆・トウモロコシなどの穀物だけでなく、綿・落花生・野菜・果物など多様な作物を栽培していた。しかし帰郷後は手間のかかる野菜・果物は全く栽培されず、商品作物である落花生・綿の栽培も激減している。自給自足用の穀物生産に特化しているのである。農地面積自体の減少、農業の経験・知識の喪失等の面からみても、農業生産の衰退は明らかである。

＊「農地が減少している。工場が耕地を占用し、道路も耕地をつぶす。残りの土地では自給自足分のみ。野菜等を作るための土地の余裕はない」

「今は皆、農業を本気でしていない。片手間でしている。主に高齢者や妻がしているので、簡単な農産物しか栽培できない」

「昔は他に道がなかったから、仕方なく土地に依存して、一生懸命にいろんな農産物を作っていた。今は農産物より工場の仕事の方が給料が高く、仕事も楽だ」

実際、多くの帰郷者が農業について、「コストが高く利益が少ない」、「いくら頑張っても気候に左右され収入が不安定」、「農産物価格が安すぎて収入が低い」等、主に経済的観点からマイナスの評価をしている。また実際に農業によく従事している年長者では、「仕事が単純すぎてつまらない」、「夏は忙しく冬は仕事がない」との問題も指摘されている。一方、農業に従事したことがない若年者では「仕事内容が難しい」との意見が多く、農業技術・知識が世代的に継承されていない実態がうかがえる。そして「機械化が遅れている」との意見も世代を問わず多い。機械化は、個別家族では採算がとれず、かといって村の共同利用では作業適期を逃すことになり、問題が多い。

＊「機械が少なくて不便。麦の収穫時は天気がよく変わるので、３～４日間で集中的に急いで収穫しなければ、成熟しすぎたり、雨に濡れたりする。だから村の共同の麦の刈取機はフル可動で２４時間作業しても足りない。皆、一生懸命に先を奪いあい、すごく混乱した」

表3-4　農業労働力および土地の貸与状況

			男		女	合計
			60年代生	70年代以降生		
			8	20	5	33
主な農業労働力	出稼ぎ前	両親	1	18	5	24
		自分	4	2		6
		夫婦	3			3
	出稼ぎ中	両親	5	20	4	29
		一時帰省した自分	2	1	1	4
		配偶者	2	1		3
	帰郷後	夫婦	5	4	2	11
		両親		6	3	9
		両親と配偶者		10		10
		両親と自分	3			3
土地の貸与状況	貸している			9	1	10
	理由	土地が多く耕作が難しい		6	1	7
		工場用地として		3		3
	貸していない		8	11	4	23
	理由	自給用として	3	7	1	11
		土地が少ないから耕作できる	5	2	3	10
		税金がかからない		2		2

資料）実態調査より作成

表3-5　農産物の状況・農業問題

			男		女	合計
			60年代生	70年代以降生		
			8	20	5	33
農産物の種類（複数）	過去	麦	8	20	5	33
		大豆	8	20	5	33
		とうもろこし	8	20	5	33
		綿	8	20	5	33
		落花生	4	15	3	22
		野菜	4	18	3	25
		果物	5	10	2	17
	現在	麦	8	20	5	33
		大豆	6	16	3	25
		とうもろこし	7	16	2	25
		綿	2	3		5
		落花生		1	1	2
農業の問題（複数）	農業生産のコストが高くて利益は少ない		7	13	4	24
	いくら頑張ってもその年の気候によって左右され、収入が不安定		5	11	4	20
	農産物価格が安すぎて収入が低い		4	11	3	18
	仕事内容が難しい			9	4	13
	仕事が単純すぎてつまらない		6	6		12
	夏は忙しく、冬は仕事がない		6	5	1	12
	農業の機械化が遅れている		5	6		11
	労働時間が長い		1	4		5
	労働量が多くて、体力が不足		1	1	2	4
	仕事環境が健康によくない			4		4
	仕事がきつい		1	1	1	3
	農産物が売れなくて収入が少ない			1	1	2
	休みが少ない		1	1		2

資料）実態調査より作成

第２節　帰郷者の出稼ぎ体験

次に、帰郷者の出稼ぎ体験をみていこう。

第１項　動機（表3-6）

まず出稼ぎの動機である。

年長の帰郷者は、「家の購入・建築費用を稼ぐため」、「子供の教育費を稼ぐため」等、主に経済的

動機で出稼ぎを始めた。また年長者は中学を卒業後、農業に従事した経験があるため、「農業経営がつらい・嫌いだから」といった動機から出稼ぎに出たケースもある。

これに対し、若年者は、「都市で自分が発展する道を探すため」、「自営業の資金を貯めるため」、「自分の視野を広げるため」、「新たな技術の習得のため」、「都市に魅力があるから」、「都市で何か勉強して、条件がそろえば農村に戻り、農業以外の経営をやりたかったから」等、将来につながる広義の自己実現を求めて出稼ぎを始めたケースが多い。学校の勉強が苦手だった若年者では、「早く勉強を終え、あこがれの都市に行ってみたかった」との声もある。また若年者の一部は高卒者だが、その場合、①大学進学の学費が高すぎる、②優秀な大学に進学しなければ、大卒後も就職の見込みが少ないといった事情から出稼ぎに出るケースが多い。若年者には農業に従事した経験がほとんどなく、学校卒業後、農業に従事するという選択は、最初から想定外である。そして若年者の動機には、厳しい地元の経済事情と同時に、「運命に屈したくない」、「自分の運命を変えられるのは自分だけ」といったハングリー精神もかいま見られる。

＊「中学生の時、同級生が出稼ぎに行った。すごく羨ましかった。僕はずっと勉強が嫌いだったので、早く出稼ぎに行きたいと思っていた」

表3-6　出稼ぎの動機

		男		女	合計
		60年代生	70年代以降生		
		8	20	5	33
出稼ぎの動機（複数）	都市で自分が発展する道を探すため	1	16	4	21
	家の購入・建築費用を稼ぐため	7	9	2	18
	自営業の資金をためるため	2	12	1	15
	自分の視野を広げるため	2	10	1	13
	都市に魅力があるから		8	4	12
	何か勉強して条件が揃えば農村へ戻って農業以外の経営をやりたかったから	1	9	2	12
	新しい技術の習得のため		10	1	11
	子供の教育費を稼ぐため	7	3	1	11
	農業経営がつらい・嫌いだから	5	5		10
	農村では前途が暗いから	3	4		7
	出稼ぎに行っている知りあいが羨ましかったから		4	1	5
	とにかく農村から出たかったから	3	1		4
	都会での生活を経験したかったから		4		4
	進学できず、都市で進学のチャンスを探すため		2	1	3
	農業資金・農業器具の購入費を稼ぐため	1	1		2
	農業活動に人手が多すぎたから		1		1

資料）実態調査より作成

「大学入試に落ちた。3つの専科大学には合格したが、学費が年間1万元もかかるので入学しなかった。その大学に入っても将来、就職は難しい。だから早めに出稼ぎに行った。こんな運命に屈したくない。いつか自分なりの事業をしたい」

「成績はよかったが、緊張しすぎて大学入試に落ちた。村の若者は皆、出稼ぎに行ったので、僕も高校で留年せず、北京に出稼ぎに行った。同時に北京で大学の課程を独学し、成人試験に合格して、大学の卒業証明書をもらった。でも大学卒業が僕の最終目的ではない。僕は自分の能力を証明したい。正式の大卒者ではないからこそ、正式の大卒者よりもっと事業で成功したい」

「私と同年齢の女性で、高校まで行けた人はとても少なかった。私は高校を卒業したが、大学の入試は受けなかった。合格しても学費が支払えないからだ。2人の弟は中学生だし、そんな大金はない。不満だったが、仕方ない。自分の運命を変えられるのは自分だけだ」

第2項　出稼ぎ先での労働・生活（表3-7）

次に、出稼ぎ先での労働・生活の実態をみよう。

まず年長者は、中国の全国的な出稼ぎブームの時期にあたる1996～2000年に出稼ぎを開始し、ごく近年まで、つまり7年間以上と比較的長期にわたって出稼ぎを続けてきた。出稼ぎ先は、故郷に比較的近い中小都市が多く、一部はその後、親戚などの紹介を通して沿海部の大都市に移動した。職種は、製造業・建設業の単純労働に集中している。雇用形態は大半が不安定な臨時雇である。出稼ぎ先での転職回数は、比較的少ない。

＊「1996年に、同じ村の人達と一緒に山西の炭鉱へ行った。すごく苦しくて危険だったから、2年後に辞め、親戚の紹介で北京へ行った」

「1995年に出稼ぎを始めた。最初は煙台で、その後、青島、北京、天津などを渡り歩いた」

これに対し、若年者は、出稼ぎブームが終息した2001年以降に出稼ぎを開始し、当然、出稼ぎの経験も比較的短期である。最初から沿海部・大都市に向かった。職種はやはり製造業等の単純労働が多いが、しかし運転手・コックなど技能職への転職も一定の位置を占める。雇用形態はやはり臨時雇が多いが、一部は、転職の過程で正規の契約雇用の地位を勝ち取った。こうした職歴を反映し、転職回数は7回以上と多い。

＊「多くのお金を稼ぐには、絶対に技術や能力が必要だ。だから出稼ぎ先で専門学校に入った。半年間の運転手の養成コースだ。卒業後、しばらくは目先の収入に走らず、たとえ給料が安くても運転手の仕事をした。経験を積み、運転技術も高められるからだ。一般車から大型トラックまで何でも運転できるようになった。車の修理もできるようになった」

第3項　出稼ぎ先の労働環境（表3-8）

帰郷者は世代・性別の違いを問わず、出稼ぎ先で多くの労働問題を経験している。

まず第1は、経済的困難である。出稼ぎ先での月収は、600元～3000元まで多様だが、この金額に、多くの帰郷者は不満を感じていた。

都市における物価の高さ・上昇が、経済的不満に拍車をかけている。また以前は勤務先の企業が無償で宿舎・食事を提供するケースが多かったが、近年はそれもなくなってきている。

＊「2000年以前は給料が低かったが、食費も家賃も一切かからなかったから、給料はほとんど手元に

残った。近頃は給料は上がったが、都市での家賃も高くなり、ほとんどの会社は宿舎を無料で提供してくれなくなった。食費も自己負担になったので、手元に残る給料は以前と変わらない。それに10年前なら月に1000元あれば、家族が半年間、生活できたが、今では1カ月も暮らせないよ」

表3-7　出稼ぎに関する概況

		男		女	合計
		60年代生	70年代以降生		
		8	20	5	33
出稼ぎ期間	3年間以上～5年未満		6	3	9
	5年間以上～7年未満	1	3	1	5
	7年間以上～10年未満	4	5	1	10
	10年間以上	3	6		9
最初の出稼ぎ時期	1990年～1995年	2	2		4
	1996年～2000年	5	7	2	14
	2001年～2005年	1	9	2	12
	2006年以後		2	1	3
出稼ぎ先（複数）	沿海都市（青島・煙台・威海）	1	14	4	19
	北京・上海・広州などの大都市	3	14		17
	近くの他県の都市（天津・鄭州）	2	9	1	12
	近くの小都市（県城・済寧など）	6	4	3	13
	近くの中都市（済南）	2	6		8
	遠くの都市（大連・長春・無錫）		3		3
仕事を変えた回数	2回～3回	5	2	1	8
	4回～6回	3	6	4	13
	7回～10回		12		12
職種	製造業	7	31	5	43
	運転手		11		11
	建築業	6	2		8
	販売業		4	3	7
	コック		7		7
	石炭		2		2
	車修理		1		1
雇用形態	臨時	10	29	5	44
	契約	2	13	4	19
	自営業		3		3
	学徒		3		3

資料）実態調査より作成

表3-8　出稼ぎ仕事の労働環境

		男		女	合計
		60年代生	70年代以降生		
		8	20	5	33
月給	1000元未満		7	3	10
	1000～1200元未満	4	1	1	6
	1200～1400元未満		2	1	3
	1400～1600元未満	2	2		4
	1600～1800元未満		2		2
	1800～2000元未満	1	4		5
	2500～3000元未満		3		3
賃金不払い経験	ある		5	2	7
	ない	8	15	3	26
仕事上の困難（複数）	労働時間が長い	6	11		17
	労働量が多い	7	8		15
	賃金が少ない	5	9	1	15
	仕事が単純すぎてつまらない	2	9	2	13
	決まりが多すぎる	3	5	1	9
	仕事環境が健康によくない	3	5	1	9
	休みが少ない	4	4	1	9
	夜勤が多い	4	4		8
	新しい技術を学べない		6	2	8
	契約時の条件と、実際の仕事・労働条件が違う		6		6
	仕事が少なく、雇用が不安定である	1	3	1	5
	仕事が危険	1	2	1	4
	給料を全額もらえない		2	1	3
	仕事内容が難しい		1	1	2
	仕事がきつい		2		2
	雇い主との関係がうまくいかない		2		2
	サービス残業が多い		2		2
	出稼ぎ者同士との関係が悪い		1		1

資料）実態調査より作成

「96年頃、給料は低かったが、物価も安かったから、給料はほとんど残った。近頃は給料は上がったが、物価がもっと上がり、手元に残る給料は逆に少なくなった」

経済的不満の内容には、一定の世代差がある。

まず年長者は、単純労働従事者が多いため、相対的に低賃金である。そこで特に不満が大きい。年長者の中には、高賃金を求めて職場を変えたり、どうしても満足できる賃金水準が得られないことを理由に出稼ぎを中止して帰郷したケースもみられる。

＊「最初にやった家具製造は、一番給料が低かった。1999年で月600元しかなかった。次の販売の仕事は業績で給料が決まったが、仕事はけっこう難しく、給料も想像していたより少なかった。それで建築の仕事に転職した。身体はきつかったが、給料はよかった。2004年で、月2000元位になった。でも、仕事がある時とない時で不安定なので結局、帰郷することにした」

一方、若年者は、特に技能職に従事している場合、1800元以上と相対的に高賃金である。ただしそれでもやはり不満は大きい。特に深刻な問題は、転職の過程で生じる賃金不払いである。実際に深刻な賃金不払いを経験したケースは２割程度にとどまるが、それでも多くの若年者が、その不安を感じながら働いていた。出稼ぎ先の企業は、労働力の安定的・継続的確保のための一種の「人質」のような形で賃金の支払いを遅延させる。そこで転職を重ねる若年者の中には、不払いが常態化してしまっているケースもみられた。

＊「契約により、年末に帰省する時、１カ月分の給料の支払いが保留された。年始に期限通り会社に戻れば、その給料を支払ってくれる。しかし転職して元の会社に戻らなければ、支払ってもらえない。僕は帰省後、両親の健康状態が悪く、子供も欲しかったので、妻が妊娠するまで半年間、会社に戻らなかった。もちろん会社に戻っても給料はもらえなかった」

「賃金不払いはしょっちゅうだ。僕はよく職場を変えた。職場を変えると、毎回、元の職場は給料の一部を支払ってくれない。もうそれが当たり前のように慣れてしまった」

「都市で街に貼り出された広告を見て応募した。最初、給料は月2000元と口頭で契約したが、実際は２か月分で2000元しかくれなかった。契約の半額で騙されたわけだ」

賃金以外にも、多くの問題があった。「労働時間が長い」、「労働量が多い」、「仕事が単純すぎてつまらない」、「仕事環境が健康によくない」、「決まりが多すぎる」、「休みが少ない」などである。さらに若年者では、「新しい技術・知識が学べない」、「将来性がない」との不満も聞かれた。これらの問題が出稼ぎを中断し、帰郷する契機になったと語るケースも多い。

＊「仕事は長時間できつかった。都市市民がやりたくない仕事ばかりやらされた。僕は漢字もほとんど読めず、肉体労働しかできない。食事もきちんと食べなかったので、身体もだんだん弱っていった。家族に心配をかけたくないし、子供も結婚したので、こんなことを続けていてはだめだと思い、農村で家族と一緒に生活することにした」

「当面の金だけを考えれば、都市で働くのもいい。でも、将来を考えるなら、都市では無理だ。僕は農民で、高い学歴も人脈もない。これでは、都市では将来が見えない。毎日、機械のように働き、豚のように食べて寝るだけで、退屈だった」

「紡績の仕事をしたが、空気が汚く、工場の中はどこも綿屑が浮遊し、肺まで吸い込んだ。心配なので知人の３人で一緒に辞めようとしたが、人手が足りないからとの理由で許可されなかった。それでもこのままではだめだと思い、２か月分の給料がもらえないことを覚悟して出稼ぎをやめた」

第４項　出稼ぎ先の生活環境（表3-9、表3-10）

では次に、出稼ぎ先での生活についてみよう。

まず帰郷者は、子供の教育費、老親の扶養費、家計の維持費など、故郷に多額の送金をした。また将来の起業・家屋新築・自分や子供の結婚準備などの資金を貯金した。ただしこれらの送金・貯金のため、出稼ぎ先では極端な節約を余儀なくされた。交際費の節約は、出稼ぎ先での行動範囲・社会関係を極めて狭いものにした。医療費を節約したケースもある。こうした傾向は帰郷者全体にみられるが、年長者や女性に特に顕著である。

＊「給料はほとんど妻に送っていた。子供の学費がかかるし、家族には他の収入もなく、すべて僕の送金に依存していたからだ。僕は自分の娯楽や交際にお金を使う余裕は全くなかった」

「出稼ぎ先で一番心配なのは病気になることだ。病気になると仕事ができず、給料ももらえない。それにお金がかかる。何の保険にも加入していないので、医療費は高額だ。軽い病気なら誰にも言わず我慢した。どうしても我慢できなくなってから、近くの薬局や診療所に行った」

「節約のため、私は職場以外はほとんどどこにも行ったことがない。行けばお金がかかるから、絶対、後悔すると思って出歩かなかった」

「唯一の楽しみは、同僚の女性と一緒に有名デパートに行くことだった。もちろん買物はしない。高すぎるので、見るだけで満足した。デパートの服を参考に、一般の安い市場で似た服を買った（笑）」

一方、若年者には、趣味・娯楽・交際に一定の支出をしていたケースもある。ただし彼らも出稼ぎに出た当初は節約して送金・貯金することに努めていた。特に「将来の自営業起業の資金」を貯金することは、若年者にとって大きな意味をもっていた。それを確保した上で、貯金に余裕ができて少し娯楽費・交際費を増やし始めたのである。また「遊びには行くが、買い物はしない」など、節約に努める様子も聞き取れる。

＊「最初は、一生懸命に節約してお金を貯めた。だんだん貯金が増えたので、娯楽や交際に使うことも多くなった。同僚と一緒に買い物したり、トランプしたり、あまりお金がかからない観光地や名所に行ったりして好奇心を満たした」

「友達とよく一緒に酒を飲んだ。娯楽は少なかったので、残業がない夜はよく酒を飲み、インターネットカフェで徹夜したりして、お金がかかった」

「僕は出稼ぎ先で恋愛した。恋愛する前は一生懸命に貯金して、両親にも送金した。恋愛してからは、彼女にプレゼントをあげたり、一緒に旅行したり、映画を見たり、買い物したりして、給料はほとんど残らなかった」

「食費以外に必需品はいっぱいあった。例えば、散髪したり、服や洗顔クリームを買ったり。たまには髪染めやパーマもした」

「どこでも人づきあいが大事だ。友達がいないと、何をしても成功できない。僕は友達がいっぱいできた。もちろん交際費はかかるが、人生でお金を貯めることが唯一の目的だったらつまらない。お金は空しく、友達は人生の宝物だ」

こうした生活の中で、帰郷者が出稼ぎ先で「うれしい」と感じていたことは、出稼ぎ前の目標を一定程度、達成できたことである。

表3-9　出稼ぎ時の送金・貯金およびそれぞれの用途

		男		女	合計
		60年代生	70年代以降生		
		8	20	5	33
送金額	なし		3		3
	100～200元未満		6	1	7
	200～400元未満		1	1	2
	400～600元未満	5	4	2	11
	600～800元未満	2	2		4
	800～1000元未満	1	2	1	4
	1000～1200元未満		2		2
送金用途（複数）	子供の教育費	6	6	3	15
	老親の扶養費	6	6	1	13
	家計の維持費	2	7	3	12
	家の新築費	1	4	2	7
	家族の治療・入院費	1	4	2	7
	家具や家庭用品などの購入費	3	2	2	7
	古い住宅の改装費	1	2		3
	農業器具の購入費・農業資金	1	2		3
貯金額	なし	2	3		5
	100～200元未満		5		5
	200～400元未満	1	2	1	4
	400～600元未満	1	4		5
	600～1000元未満	3	2	2	7
	1000～1300元未満	1	3	1	5
	1700～2000元未満		1		1
	2000～3000元未満			1	1
貯金用途（複数）	将来の自営業の資金		14		14
	家の新築費	5	5	2	12
	子供または自分の結婚資金	6	3	1	10
	農業機具の購入費	3	5	1	9
	後々の保証や将来の生活のため	5	4		9
	子供の学費		2	3	5
	古い住宅の改装費		1	2	3
	自分の進学の学費		2		2
	借金の返済		1		1

資料）実態調査より作成

表3-10　出稼ぎ生活上のうれしかった事と困った事（複数回答）

		男		女	合計
		60年代生	70年代以降生		
		8	20	5	33
うれしかった事	貯金がたまる	7	10	1	18
	自分の視野が広がった	1	15	2	18
	都会で便利な文化的生活ができる		12	4	16
	故郷に送金できる	6	8	2	16
	他の地方からの出稼ぎ者の友達ができた	1	13	1	15
	新しい技術を学んだ	2	11	1	14
	娯楽が多い		9	1	10
	都会で自由な生活ができる		5		5
	他人からばかにされない・差別されない		2	2	4
	男の子を生んだ		3		3
	都市出身の友達ができた	1	1	1	3
	仕事内容がおもしろい		2		2
困った事	収入が低くて経済的に苦しい	8	13	1	22
	物価が高くて経済的に苦しい	3	13	3	19
	家族と離れているので寂しい	3	9	3	15
	住居条件が悪い	4	7	2	13
	娯楽が少ない	4	6	1	11
	差別がある	3	7	1	11
	人脈がない	4	5		9
	知識が足りない		6		6
	生活のリズムが速すぎる		5	1	6
	生活習慣・文化が違う	3	2		5
	お金だけが大事であるという考えが強い	1	2	1	4
	自分の健康・病気	2	1	1	4
	治安が悪い		2		2
	家族の病気・障害	1		1	2
	友達・仲間がいない		2		2
	差別される		2		2
	友達や親戚との付き合いが多すぎる	1	1		2
	将来の生活が不安	1		1	2

資料）実態調査より作成

すなわちまず年長者は、「貯金がたまった」、「故郷に送金できた」ことに喜びを感じていた。もともと彼らの多くは経済的動機で出稼ぎを始め、それがある程度、達成できたことに喜びを感じているの

である。

一方、若年者は、「自分の視野が広がった」、「新しい技術を学んだ」、「都会で便利な文化的生活を経験した」、「他の地方からの出稼ぎ者の友達ができた」など、より多面的な自己実現ができたことに喜びを感じていた。これもまた、出稼ぎを開始した動機に対応している。中には、そのような視野の広がりが人生観の変化につながり、出稼ぎをやめて帰郷を決意したケースもある。

＊「出稼ぎに行ってよかった。都市の仕事を経験して、人生も変わった。僕は高卒だが、この社会ではいつでもどこでもやはり能力の発展が大事だ。また、遠大な理想をもつと同時に、地道に働くことも大事だ。他人を羨まず、自分なりの理想を持ち、現実を踏まえてやるしかない。だから僕は都市の生活を経験した上で、やはり自分の故郷に帰ることを選んだ」

逆に、出稼ぎ先の生活で困ったことは世代を問わず、「収入が低い」、「物価が高い」など、経済問題が最も多い。それに加えて「家族と離れているので寂しい」、「住居条件が悪い」、「娯楽が少ない」など、多岐にわたる悩みがある。都市住民に対する劣等感も募る。出稼ぎ前に描いていた夢と現実のギャップを実感し、都市に留まることはできないと考えざるを得なかったケースも少なくない。

＊「出稼ぎに行く前は、都市に綺麗な夢を持っていた。都市へ行き、一生懸命に働き、勉強もして、絶対に都市に残ろうと思っていた。でも、現実は残酷だ。仕事もつまらないし、給料も安く、毎月ほとんど給料は残らない。彼女ができて、いいプレゼントを買ってあげるお金もない。とても惨めだった」

「都市は環境がよく交通も便利だが、自分の居場所ではない。いつか失業する恐れもある。お金がなく、他の都市市民のように行きたい所にも行けない。家も買えない」

「都市で暮らしたいが、都市の女性と比べると悔しくなる。自分はどこもかしこも都市の女性より劣っていると感じて、自信も全然なくなった。いつか自分も都市で家を持ち、車も持って、家族と一緒に生活しようという夢を持っていたが、不可能だ」

「都市で肉体労働をしている人に、都市市民は少ない。ほとんど外地から来た出稼ぎ者だ。都市に定住できる人は絶対、能力かコネがある人だ。私のように純粋な農民出身者で、貧乏で資格もない人は、結局、故郷に帰るしかない」

第５項　出稼ぎ先の社会関係（表3-11）

出稼ぎ先での社会関係は、総じて同郷の出稼ぎ者相互に限られていた。都市市民との間では差別もあり、他地域出身の出稼ぎ者との間では言葉・方言の壁があった。出稼ぎ先で困ったことの中で、「差別がある」、「人脈がない」ことも一定の位置を占める。こうした孤立感・疎外感もまた、帰郷を決意させる一つの契機となった。

＊「都市では差別される。都市市民とは話も合わないし、同じ職場でも出身地が違うといじめられる。同郷者が多ければ他人をいじめ、少なければ他人にいじめられる。そんな生活が嫌だった」

「他の出身地の同僚とは言葉も違ったので、うまく話せなかった。困ったことがあっても、手伝ってくれる人もなかった。ほぼ自分１人で我慢していた」

「職場以外には行かなかったから、同僚以外の人とは接触しなかった。特に近くの都市住民には嫌がられていたようなので、トラブルを招かないようにいつも気をつけていた」

「私は内向的な性格なので、あまり他人と話さなかった。悩みも困ったことも自分１人で解決した。

表3-11　出稼ぎ先での人間関係

			男		女	合計
			60年代生	70年代以降生		
			8	20	5	33
信用ができる人	人数	いない	4	7	2	13
		1～2人	1	4	3	8
		3～5人	3	9		12
	関係	同郷	1	5	3	9
		同僚（農村）		4		4
		友達（農村）	3	4		7
悩みを相談できる人	人数	いない	3	3	1	7
		1～2人	2	7	2	11
		3～5人	3	10	2	15
	関係	同郷	2	4		6
		同僚（農村）		8	4	12
		友達（農村）	3	5		8
手伝ってくれる人	人数	いない	3	3	1	7
		1～2人	5	9	3	17
		3～5人		8	1	9
	関係	同郷	1	6	4	11
		同僚（農村）		5		5
		友達（農村）	4	6		10
気楽に話しあえる人	人数	いない	5	7	2	14
		1～2人	3	3	3	9
		3～5人		3		3
		6～10人		7		7
	関係	同郷		4		4
		同僚（農村）		4	1	5
		友達（農村）	3	5	2	10
よく遊ぶ人	人数	いない	4	2		6
		1～2人	4	1	3	8
		3～5人		9	2	11
		6～10人		8		8
	関係	同郷	1	5	3	9
		同僚（農村）		7	2	9
		友達（農村）	3	6		9

資料）実態調査より作成

みんな違う地域から来ていたので、方言や習慣が全然違う。だからお互いに理解しにくかった」

ただし、同郷の出稼ぎ者どうしの間では、悩みを相談しあい、互いに助け合うなど、深い関係を構築できたと感じているケースも多い。この場合の同郷人とは、出稼ぎ前から知り合いだった同じ村の出身者だけではない。出稼ぎ先の職場で新たに知り合った山東省出身者も含まれる。

＊「仕事場にいたのはほとんど農村出身の同僚だった。都市出身者も何人かいたが、あまり接触しなかった。悩みごとがあれば、同僚に相談した」

「職場に同年配の若者が多かったので、たくさん友達ができた。ほとんど山東省出身の人だ。他の出身地の人もいたが、やはり同郷がつきあいやすい」

「どこでも友達がいないと、いじめられる。山東省人は人数が多く、友達を大切にするので結束力が強かった。だから山東グループは一番強い。山東グループの誰かがいじめられたら、皆で一緒に相手を殴る（笑）」

第６項　帰郷へ（表3-12）

以上のように、出稼ぎ者達は、都市での労働ー生活において、出稼ぎ前に抱いていた夢と現実のギャップに直面し、また家族との離別の寂しさや差別体験、孤独・疎外感に苛まれる中で、都市への定住を断念した。また同時に、送金・貯金、技術習得、同郷者との交際等によって帰郷後の起業に向けた資金・技術・人脈も準備した。　こうした中で、帰郷者は出稼ぎを中止し、帰郷する道を選んだのである。

表3-12　帰郷について

			男		女	合計
			60年代生	70年代以降生		
			8	20	5	33
帰郷の理由（複数）	結婚・子供の出生・子供の教育		3	9	3	15
	自営業がしたいから		1	8	1	10
	収入が低い・仕事が不安定だから			5	3	8
	家族と同居したいから		3	2		5
	前途が見えないから			4	1	5
	都市生活に慣れないから			4	1	5
	歳をとって続けることが難しくなったから		4			4
	障害があったから		1		1	2
	人間関係が冷たくて難しいから			1	1	2
	仕事がきつくて自由がないから			2		2
	差別が強いから			1		1
帰郷後の計画の有無	ない		3	4	4	11
	ある		5	16	1	22
	あるの場合	実現した	15	1	21	21
		実現しなかった	1		1	1

資料）実態調査より作成

ただし、実際に帰郷を決断するには、何らかのきっかけが必要である。

年長者の場合、年齢的に都市での仕事の継続が難しくなったことが、帰郷のきっかけとなった。転職の際、新たな就職先を探すのに苦労したり、また就業中の仕事がきつくなり、帰郷を決断したのである。

若年者では、「自営業を起業したい」、「出稼ぎを続けていても将来性がない」、「出稼ぎ先での収入に満足できない」、さらに「子供が生まれたので子供の教育のために」といった理由により、帰郷を決断している。

そして３分の２の出稼ぎ者達は帰郷にあたり、農村での起業の計画をもっていた。一方、特に帰郷後の計画をもたないまま出稼ぎを中止したケースも、年長者や女性を中心に３分の１を占めている。

第３節　帰郷後の労働・生活

では次に、帰郷後の労働・生活についてみよう。

第１項　帰郷後の労働（表3-13）

帰郷者達は帰郷後、多くが自営業を開設している。帰郷前に考えていた計画を、まずは実現しているといってよい。帰郷してよかったこととして、「自分のもっている技術や専門知識が役立った」、「自営業をやる夢が実現できた」、「仕事が安定した」などが、各世代とも一定の位置を占めている。

自営業の業種は、運輸（運転手）、および木材加工が多い。年長者では木材加工が多く、その月収は半数が2000元未満にとどまる。一方、若年者には運転手が多く、月収2000元以上を得ている。

こうした差異はありつつも、帰郷後の仕事については、世代・性別の違いを問わず、おおむね満足している。すなわちまず帰郷後の収入は、出稼ぎ時と比較しても、平均すれば若干だが高くなっている。収入面だけでなく、「技術・経験が生かせる」、「周囲から信用を得られやすい」、「仕事の実績に見合った収入が確保できる」、「出稼ぎよりも仕事が楽で労働時間が短い」、「仕事に将来性がある」、「家族と同居して一緒に働ける」など、多方面にわたって、帰郷後の仕事は高く評価されている。

特に運転手の帰郷者は、出稼ぎ先で習得した技術・経験を生かして高収入を得られることに満足している。建築関係の自営業でも、同様である。

＊「木材工場で運転手をしている。出稼ぎ先で運転手の経験を積んだ。運転手だけでなく、売上金の回収、商品管理も担当している。夜の運転が多く、遠くへ行く場合も多いが、一度もトラブルはない。社長は僕を信用してくれている。もちろん給料も一番高い。出張手当も入れて、月4000元以上もらえる。出稼ぎしていた時の給料より高い。家族とも疎遠にならないし、とても満足だ」

「運輸の自営業だ。自分と運転手１人で、２人だけの会社の社長だ（笑）。自分でトラックを買い、運転手を１人雇って、２人で交替で運転している。仕事は、石炭の配給所で請け負う。あまり遠くない所へ運ぶので、ほとんど日帰りで毎日、家に帰れる。出稼ぎの時の収入より高く、自分の車だから自由もあり、とても満足している」

「運転手の仕事が大好きだ。どんな仕事よりも運転が一番おもしろい。特に今、自分のトラックを持っていて、運転手兼社長だ。石炭の運送を請け負っているが、人間関係がよく、信頼されているので、他の運転手より多く仕事がもらえる。月収も高ければ１万元位になる。満足はしているが、もっと多く稼ぎたい」

「出稼ぎ先で身につけた技術で、郷の中でも唯一の門窓製造の店を自営している。利益は少ないが、競争相手が少ないから、生活費としては十分だ。このまま続ければ、子供の学費や家の購入費も

大丈夫だ。ただし、帰郷者が多くなれば、同じ技術を持つ人もいるだろうし、競争が激しくなる。その時は、郷以外の市場も開拓するつもりだ」

木材加工の仕事に従事している帰郷者も、出稼ぎ先で培った人脈・経営や作業の能力を発揮し、しかも比較的高収入が得られ、満足している。

＊「４人の知人と共同で、木材工場を設立した。郷の中で一番大規模な工場だ。周辺に、木の皮を剥いで板を作る工場が多数あるが、僕の工場はそれらの板から合板を作っている。作業内容は全然違うが、繋がっている。だから、原材料が簡単に入手できる。合板を上海・北京・天津・蘇州などへ売っている。僕は商売の才能があるかもしれない。今まで順調に進んでいる」

「以前、天津の木材工場で働いた事がある。仕事の流れがよく分かるし、木材の品質や木材市場の動向もよく分かる。近頃、故郷に木材工場がどんどんできたので、僕も木材工場をつくろうと思い、帰郷してすぐつくった。順調に利益も出ているし、自分自身の事業だから、すごく満足だ」

「今ある材料を利用して、最も簡単な作業で最大の利潤を得る。これには頭の良さが一番大事だ。共同でつくった工場で、僕は営業を担当している。大都市へ行き、取引先を探す。人間関係の構築能力、頭の回転、市場の洞察力、ネット情報の分析などが、商売成功のためには必要条件だ。出張が多いが、自分の好きな仕事ができて、自分の能力を活かせて満足だ」

出稼ぎ先の都市でファッションや料理など文化的素養を身につけ、これを生かして自営業をしているケースもある。ここでも肯定的な評価が聞かれる。

＊「服飾店を経営している。最初は大変だった。広州などいろんな地域をまわり、服を入荷してきた。出稼ぎ先で販売の経験があり、入荷先も何か所か知ったので、役立った。農村なので、ファッションは大都市より遅れている。特に若者はほとんどまだ出稼ぎ中だし、帰郷者はほとんど既婚者で、服装にあまり気を使わない。だから、大都市のファッションを参考にすると絶対に失敗する。失敗した後、よく考え直した。大都市から県城まで視野に収め、農村での好みに合うセンスに変えた。すると売上も上がった。満足とは言えないが、これから、もっといい店を作る自信がある」

「高校を卒業してすぐ済南の料理養成学校に入り、コックの資格をとった。そして出稼ぎ先で２年ほど大きなレストランでコックとして修行した。帰郷後、現在の食堂を作った。大きな利益を出すのは難しいが、家族全員で努力していて満足だ」

「出稼ぎ先では、食堂での見習いやコックなどの経験が多かった。いろんな料理を勉強して将来、故郷で食堂を開こうと思っていた。５年ぐらいの出稼ぎ生活を通して、貯金もできた。妻のお金も加え、食堂の資金が十分になるとすぐ帰郷して、すぐ開業した。今、経営はいい」

「炭鉱の開発で各地の人が集まってくるし、出稼ぎ者たちも村に帰ってくると、商売のチャンスが生まれる。飲食業は、必ず需要がある。特に今は、人間関係作りのために高級レストランが必要だ。普通の食堂は多くあるが、高級レストランがなかったので、僕は今の店を作った。郷の中で一番高級なレストランという自信がある。もちろん資金はローンで借りた。料金は他の店より高いが、僕の店が一番人気がある。毎日忙しく、特に週末や年末年始は、お客様がひっきりなしだ」

ごく一部だが、年長者の中には、帰郷後、新たな農業生産、および伝統的な地場産業に従事しているケースもある。

＊「出稼ぎ前は、両親と一緒に葡萄・林檎・山査・杏・桃などを栽培していた。出稼ぎ中は、そんな手間がかかる栽培はやめていた。でも帰郷してから、いい仕事が見つからないし、農業に興味もあるので、また栽培を始めた。子供がインターネットでいい品種の葡萄を調べてくれ、僕もいろんな所へ実際に行って調査・見学をした。そして寿光（地方名）の葡萄の苗を購入して、栽培を始めた。葡萄栽培の本もたくさん読んだ。やはり品質が良い葡萄はよく売れる。今年から他の種類の葡萄も始めて、規模を拡大したいと思う。収入もよいし、とても満足だ」

「柳編みは祖先から伝えられてきた伝統工芸だ。僕は小さい頃から、祖父や父に柳編みを教えてもらった。出稼ぎから帰郷して、他の仕事で起業するより、自分がよく知っている仕事が一番いいと思い、柳編み工場をつくった。大きな利益はないが、家族の生活費としては十分だ」

しかしこうした自営業を初めとする帰郷者の生業が、それぞれ大きな問題を抱えていることもまた、事実である。

まず、運転手の帰郷者では、トラックのローン返済、必要経費の高さ、運転技術の未熟さなどにより、満足する収入が得られないケースがある。「賃金または利潤が少ない」は、最も大きな問題である。

＊「石炭運搬の運転手で月収は悪くないが、ローンでトラックを購入したため、利子が高くて困っている。収入から必要経費を除くと、残金はほとんど利子返済に充てなければならない。車の修理にもお金が結構かかり、あまり貯金はできないから不満だ」

「出稼ぎ先で兄が亡くなり、両親に心配をかけたくないから早めに帰郷した。それで、運転技術を十分に学べなかった。一応、運転手の速成コースで学んだ。郷里では石炭運搬の運転手が不足しているので運転手になったが、やはり経験不足だし運転技術も下手で、仕事を見つけにくい。今は運転助手をしている。給料も低くて1500元しかもらえない。将来、自分で運転できるようになれば、給料も3000元までアップしてくれるのだが…」

木材加工でも、やはり開業資金のローン、経営の困難など「賃金や利潤の少なさ」に悩まされているケースは多い。

＊「皆、自営業をしていたので、僕も何かしようと思った。木材加工の工場を作ったが、出稼ぎの貯金を使い果たし、ローンも借りた。僕は会社の経営が上手くないので、利益は多くない。毎月の利子を返済すると、ほとんど残らない。これからどうするか不安だ」

「市場は不安定だ。今年（2010年）、都市の不動産市場に対する国家の政策が変わり、住宅用の木材生産にも大きな影響があった。生産量の減少、木材価格の低下など、経営が厳しくなった。今のままでは厳しいので、家具や室内リフォーム向けの木材生産へ変えようかと迷っている」

「ローンが重く、毎月の利子も高い。表向きは自営業の社長で、とても成功しているようにみえるが、実際はローンを返済すると、残るお金はとても少ない。ぎりぎりで経営している」

「知り合いと共同で工場を経営している。人間関係が複雑で、どこで何をしても余計なお金がかかり、人脈作りも大変で、僕は疲れた。いつか経営を辞め、農業や他の仕事を探したい」

また木材工場の場合、行政府による土地の利用許可が起業の前提になるが、この許可の法的根拠・契約が曖昧で、今後に不安を感じているケースが多い。警察官になって行政の内情を知る帰郷者も、この問題で将来、農民や自営業者の不利益が生じることを危惧している。

＊「土地の使用権問題が不安だ。テレビで土地の違法転用摘発のニュースを聞くと、心配で眠れなくなる。自分の全財産と、親友からの借金やローンなど手を尽くして、今の工場をつくった。この付近の工場はどこも、土地の正規の使用権を持ってない。政府が貸してくれるが、契約書も何もない。ほとんどの人は、土地法を知らないから心配してないが、僕は法律を知っているから不安でしょうがない。僕の友達の１人は、都市の周辺に土地を借りて工場を開設したが、２年ほど経って投資がすべて終わり、さぁこれからという時に、政策変更で土地を回収され、せっか作った工場も一晩で潰されてしまった。友達はすごく悔しがったが、経済的負担が大きく、ついに自殺してしまった。僕も、この友達と同じようなことをやっている。もし中央政府に見つからなければ、何の問題もない。でも近頃、炭鉱の開発で付近の経済がすごく発　して、政府の偉い役人もよく来るようになったし、不動産業の抑制政策によって、土地の販売・転用に一層目を光らせるようになった。他の省では耕地の工場転用を取り消し、工場を潰す話もよく聞く。もしそんな日が来たら、僕はどうしたらいいか分からない」

「今、地方政府は経済実績を追求するため、国家の土地に関する法律を犯す形で、土地を販売したり、耕地を工場用地に転用している。違法だが、利益をあげるために隠れてやっている。上で決めた法律が、下では骨抜きにされている。しかしもし中央政府から注意されたら、一番被害を被るのは農民だ。自営業者の倒産や、地代の不払いなどが多数発生するだろう」

食堂等の自営業では、やはりローンや家賃の支払い、および中国農村の慣習であるツケ払いの回収が大きな困難になっている。

＊「食事代の不払い金を回収するのは大変だ。これは農村の習慣なので、すぐには変えられない」

「食事代が現金払いでなく、会社や政府の勘定につける事が多すぎる。年末、あちこちから代金を回収するのは大変で大嫌いだ。皆に現金で支払ってほしいが、農村の習慣は変わりにくい。また皆、知り合いなので言いづらい」

「店の家賃が一番大きな支出だ。近頃、家賃も年々上がっている。食堂経営にかかる費用のうち、半分は家賃だ」

農業に従事する帰郷者も、長時間労働、価格・収入の不安定に悩んでいる。また農業に従事する帰郷者には、帰郷後の具体的計画をもっていなかったケースもみられる。

＊「農業は労働時間が長い。毎日、朝５時に起き、夜10時頃までずっと働いている。昼食も夕食も栽培棚の中で食べる。特に収穫期が近づくと盗まれる恐れがあるので、１日24時間、離れられない。夜も家族の誰かが栽培棚の中で寝る。とても疲れる。それに毎日、作物の市場価格が変わる。価格の変化は前もって予想できないので、損得は運命に任せるしかない」

「肥料や資材の費用が高くなり、市場価格も不安定で、利益も少ない。赤字になることもある。例えば胡瓜が豊作になると、価格は絶対下がる。すると損が出る。酷い目に遭ったと思って諦めるしかない」

「何の技術も資金もない。出稼ぎで作った貯金は、子供の学費や家の建築費でほとんど使い果たした。だから農業をするしかなかった。胡瓜や白菜や人参などの野菜を栽培している。収入はあまり良くない」

「養鶏をやっている。僕は出稼ぎ前にも養鶏の経験があった。出稼ぎ後も妻や父が引き続きやって

いた。帰郷してから、何をやっていいか分からなかったから、とりあえず、家族と一緒にやっている。でも仕事は汚いし、伝染病なども心配だ」

表3-13　帰郷後の仕事と収入

		男		女	合計
		60年代生	70年代以降生		
		8	20	5	33
職種	運転手	1	10		11
	木材加工	4	4	1	9
	飯店		3		3
	栽培	2			2
	販売			2	2
	柳編み	1			1
	養殖		1		1
	警官		1		1
	門窓製造、リフォーム		1		1
	タオル製造			1	1
	主婦			1	1
雇用形態	自営業	8	16	1	25
	臨時		3	4	7
	契約		1		1
本人収入（月額）	なし			1	1
	1000元未満		1	2	3
	1000～1500元未満	1	3	1	5
	1500～2000元未満	3	3		6
	2000～2500元未満		2		2
	2500～3000元未満		4		4
	3000～3500元未満		1		1
	3500～4000元未満	3	1		4
	4000～5000元未満	1	2	1	4
	5000～6000元未満		2		2
	10000元以上		1		1
収入への満足度	いい		2	2	4
	ややいい	3	3		6
	まあまあいい	2	8		10
	どちらとも言えない	3	5	3	11
	やや低い		2		2

資料）実態調査より作成

第２項　帰郷後の生活・家計（表3-14、表3-15）

帰郷後、うれしいこととして、「生活が安定した」、「経済的に豊かになった」など、経済条件の改善が一定の位置を占めている。

表3-14　帰郷後の生活（複数回答）

		男		女	合計
		60年代生	70年代以降生		
		8	20	5	33
生活上の不満	経済的に苦しい	3	11	2	16
	子供の学校の教育水準が低い	1	9	2	12
	子供の生活を十分に見てやれない	3	7		10
	借金がある	1	8		9
	医療費が高い	3	5	1	9
	自分の健康・病気	3	2	1	6
	家族の病気・障害	1	2	1	4
	住宅が狭い	1	2	1	4
	お金だけが大事であるという考えが強い	1	2	1	4
	農業生産が大変	1	1	1	3
	将来の生活が不安	1	1	1	3
	親戚との人間関係が悪い		1	2	3
	近隣・村人との人間関係が悪い		2	1	3
	息子の結婚が困難	1	1		2
	差別がある		2		2
	知識が少ない	1	1		2
	人脈がない		2		2
	治安が悪い		2		2
	友達や親戚との付き合いが多すぎる		1		1
うれしい事	家族と一緒に暮らせる	8	15	3	26
	子供の教育をちゃんと見てやれる	4	9	2	15
	生活が安定した	4	6	2	12
	経済的に豊かになった	6	4	1	11
	自分の持っている技術や専門知識が役立った	3	6	1	10
	自営業をやる夢を実現できた	2	7	1	10
	仕事が安定した	1	5	1	7
	仲間が多くて楽しい		5	1	6
	差別されない		3	1	4

資料）実態調査より作成

表3-15　帰郷後、日常生活での支出（月額）

		男		女	合計
		60年代生	70年代以降生		
		8	20	5	33
食事代	200～400元未満	3	4		7
	400～1000元未満	3	11	5	19
	1000～1500元未満	1	3		4
	1500元以上	1	2		3
家賃	なし	8	15	4	27
	200元		1		1
	500元		1		1
	600元			1	1
	800元		1		1
	1200元		1		1
	2000元		1		1
娯楽費	なし	7	12	2	21
	100～200元未満		3	3	6
	200～400元未満		1		1
	400～1000元未満	1	4		5
必需品費	100～200元未満	3	4	3	10
	200～400元未満		2	1	3
	400～600元未満	5	11		16
	600～800元未満		1		1
	800～1000元未満		1	1	2
	1000元以上		1		1
医療費	不明	6	9		15
	100元未満		1		1
	100～200元未満	1	7	2	10
	200～300元未満	1	3	3	7
養老費	なし		9	2	11
	100元未満		1		1
	100～300元未満	6	8	2	16
	300～500元未満	2	2	1	5
支出総額	1000～1200元未満	4	3	4	11
	1200～1500元未満	4	10	1	15
	1500～2000元未満		7		7

資料）実態調査より作成

しかしそれでも帰郷後の生活で、最も大きな問題は依然として、経済的な困難、および将来の経済的な生活不安である。出稼ぎは、経済的困難を根本的な意味では解決していないのである。

まず食費がかさんでいる。現在の農村では前述のように農業生産がモノカルチャー化し、野菜・果物を自給していない。他の農村で作った商品作物は都市経由で運ばれてくるため、都市以上に価格が高くなっている。また特に子供がいる家庭では、安全な食品 ── ミルク等 ── の確保にも費用がかさむ。

＊「服や家具は都市より安い。でも、野菜や食品は安くない。地元では手間がかかる野菜は作らなくなっているし、地元で作っている数少ない野菜や果物はすべて都市に売っている。出来の悪い野菜や果物だけ現地で売っている。しかも高い。どうしても野菜は不足しているし、供給が需要より少ない現状を変えないと、価格は下がらない」

「日常の食費が一番かさむ。物価が高く、野菜・果物・子供用品も高くなっている。給料がよくても支出が多く、実際にはあまり残らない」

「子供用品に一番お金がかかる。今、ミルクの毒物混入事故が多いので、安心できるミルクを飲ませたくて、一番高いミルクを買っている。一缶200元で、月３～４缶で600～800元のミルク代が必要だ。ほかにも子供の服やおむつなど、お金がかかる」

子供の教育費も、特に年長の帰郷者では、切実な問題である。大学を卒業しても、就職難が厳しく、その後も結婚資金をはじめ、子供には莫大な出費が予想される（注１）。

＊「子供の大学の学費が高すぎ、年１万元かかる。生活費・寮代などを含めると、子供１人で年に２万元必要だ。今、上の子は大学１年生、下の娘は高校２年生で、来年娘も大学に入る予定だ。成績があまりよくないから、いい大学に入れないと、ますます学費が高い。２人の子供を同時に大学に通わせるのは大変だ」

「子供はいま高校３年生で、年間の学費は3000元ほどだ。寮代・生活費は月500元かかる。来年、大学に入るとさらに多額のお金がかかる。大学４年間だと、10万元の貯金が必要だ」

「子供が大学に行くと、負担が重くなる。４年間で10万元ほどかかる。大学を卒業しても、負担がなくなるとは言えない。いい仕事が見つからないと自立できず、両親からの援助が必要だ。結婚や子供の出産で、何でもお金がかかるよ」

「子供は一番お金がかかる。両親はみんな子供を大学まで行かせたいが、一生懸命に貯金して、やっと子供が大学を卒業しても、技術もない大学生は月収が農民工より低い。肉体労働をやりたくないとなると、卒業イコール失業だ。子供が結婚して自力で都市で家屋を購入するなんて考えられない。県城で家屋を購入するとしても両親からの支援は絶対必要だ」

高齢化した両親の養老費・医療費も、帰郷者にとって大きな負担となっている。農村にも医療保険が一応あるが、医療費は依然として大きな負担である。

＊「兄が亡くなり、１人の子供が残った。両親も高齢化している。自分にも２人の子供がいる。だから私達夫婦は、老人２人と子供３人の面倒をみなければならない。両親は日毎に調子が悪くなり、よく通院している。何の保険にも加入していない。新型医療保険の事は行政に聞いたが、手続きの手間がかかり、事前に申し込まないと補助金も出ない。結局、１回も補助されたことはない」

「両親は高齢で調子が悪く、近頃はずっと私の家族と同居している。夫と私の収入で、老人２人・子供２人・夫婦２人、６人の生活はぎりぎりだ。今は夫の両親はまだ大丈夫だが、それが無理に

なったら、うちはどうしようもない。今のうちにできるだけ貯金して、将来もしもの時のために用意しておくしかない」

「農村では、もし家族に何かあったり、家族の誰かが病気になったら、出稼ぎで何年間もかけて貯めた貯金を、いっぺんに使い果たす」

「無駄」と思わざるをえない交際費も、農村で自営業を営むに際して必要になる。

＊「農村で商売をするには人間関係が大事だ。人間関係を作るために、よく御馳走したり、祝儀を送ったり、年末年始にはいろんな関係の人にお歳暮や新年のお祝いを送らなければならない。すごくお金がかかる」

「交際に一番お金がかかる。人脈を多く作れば作るほど、商売の道も広がるが、当然、莫大なお金がかかる」

第３項　家族関係とその変化（表3-16）

帰郷して家族と一緒に生活できるようになったことは、帰郷者にとって大きな喜びである。

出稼ぎの経験が、夫婦関係に与えた影響は、それほど意識・自覚されていない。

ただし、年長の帰郷者では、出稼ぎに出たことで、夫婦関係が緊密になったという声が多い。それは主に出稼ぎ中、妻が両親・子供の世話を一手に引き受けてくれたことへの夫の側の感謝、および妻が経済的・精神的に自立したことへの敬意の現れである。

＊「夫婦関係はいい。結婚してもう20年も経つので、愛情とか言うのも恥ずかしいが、親密だ。特に僕は出稼ぎ中、家の一切のことをすべて妻に任せていた。僕が外で安心して仕事ができるように、妻は何か困ったことがあっても僕に一々言わず、すべて自分で解決した。僕の両親のこともきちんと気にかけてくれたし、妻自身も頑張って働いて貯金もしていた」

「僕の出稼ぎ中、ずっと妻が子供の面倒を見てくれてきた。２人の子供の勉強や生活の世話はすべて妻がしてくれた。恋愛感情とは違うし、あまり話し合うこともないが、それでもいい子供を育ててくれて、とても感謝している」

ただし、夫婦関係そのものに不満はなくても、それを取り巻く人間関係に不満をもつ帰郷者は少なくない。

＊「妻はとてもいい人で、僕や子供のことを気にかけてくれる。でも、妻の弟が３人いて、よく僕たちに借金にくる。貸しても全然返してくれない。貸してあげなければ、妻の両親に僕の悪口ばかり言う。妻の両親はすぐ僕の家に来て、妻を叱る。妻は誠実だから、言い訳もしない。妻の困っている顔を見たくないので、金を貸すしかない。妻には満足しているが、夫婦生活は２人だけのことではすまない」

「妻との関係は悪くない。ただし、僕の両親との関係は悪い。妻は結婚前、何年か出稼ぎの経験がある。出稼ぎ先でファッションセンスを身につけ、化粧が大好きなおしゃれな女の子だった。それは結婚しても変わず、毎日、化粧して綺麗な服を着て、農作業の時も工場の仕事でも、いつも服装を気にしている。僕の両親は妻に対してすごく不満があり、毎日僕に、『妖婦みたいに男を惑わす』と言う。もし妻が若い男性としゃべると、すぐ妻を叱る。最初、妻は僕だけに不満を訴えていたが、だんだん我慢できなくなり、よく両親と喧嘩している。僕は板挟みになってとても

困っている」

また若年者を中心に一部では、出稼ぎが夫婦関係に悪影響を及ぼしたと語るケースもみられる。

夫の側の妻に対する主な不満は、妻の嫉妬、出稼ぎの継続、家族に対する配慮・思いやりの欠如等である。

＊「結婚前、出稼ぎ先で恋愛をしたが、両親に反対されて別れた。その後、親戚の紹介で今の妻と結婚した。妻は僕の過去の恋愛を知っており、よくそれを話題にしたり、泣きながら『私のことが嫌いなら直接言ってほしい。離婚する』とか、『前の彼女を忘れられないなら、離婚してもいい。彼女に譲る』など、とてもうるさい。僕はだんだん妻と会話することが少なくなってきた」

「妻は強すぎる。仕事を追求しすぎて、子供の教育や生活に関心がない。僕は子供のために帰郷したが、妻は出稼ぎ先から帰ってこず、今は別居だ。もう離婚して、お金より家族を大事にする女性と再婚したい。こんな夫婦関係は嫌だ」

「妻は心が狭い。実家の両親はきちんと世話をしているが、僕の両親の面倒はみない。僕の給料はすべて妻に渡しているので、僕はよく嘘をついて妻からお金をもらい、給料の一部を隠したりして、両親に渡している。両親は何も言わないが、悲しい気持ちは分かる。僕は妻とよく喧嘩する。いつか離婚するかもしれない」

妻の側から夫に対する主な不満は、浮気である。出稼ぎによる離別、また経済的ゆとりが、こうした問題を派生させたと認識されている。

＊「皆分かっているから、私も隠さない。夫には外に女がいる。もちろん夫婦喧嘩も多い。夫は出稼ぎ中にその女と出会い、付き合い始めた。私が無理やり夫を帰郷させた。でも、女との関係は切れていない。よく誘って会っている。絶対許さない」

「男は金がない時はとても誠実だが、出稼ぎでお金ができるとすぐ女をあさる。近所でも、既婚の男が外で女と関係をもっているケースは多い。今、若い夫婦の離婚率が高くなっているが、そういう理由が一番多い。だから、金を稼ぐ能力のある男と結婚することが幸運だとは言えない」

そして夫婦間の家事分担については、世代の違いを問わず、出稼ぎの前と後で大きな変化が生じている。出稼ぎに出る前は「妻・女性が担うべき」と考えていたが、出稼ぎ後、「男女に関係なく担うべき」との考えが増加しているのである。男性も出稼ぎ先では自ら炊事・洗濯などを経験した。また、出稼ぎ先では男性といえども簡単に職がみつからず、女性でも男性以上の収入を得る機会もありうる。帰郷者の考え方の変化は、「男女平等」の理念というより、出稼ぎ先の現実をふまえ、「夫婦どちらでも仕事が見つからない方が家事を分担すべき」といった考え方が定着してきている。

子供の教育に関する問題・不満も少なくない。帰郷してうれしいことの一つは、「子供の教育をきちんとみてやれる」ことではあるが、その反面で子供の教育に関する不満も募ってきている。

まず一つは、郷里である農村の教育水準の低さ、都市との教育格差である。

＊「農村の子供の教育レベルは低い。今も正式な幼稚園がない。中学校の校舎の中に、中学校教師の子供専用の幼稚園しかない。小学校に入る前、子供は毎日遊んでばかりで、スタートからもう都市の子供より遅れている。もちろん小・中・高校でも学力が遅れる。それなのに大学入試では、都市の子供より高い点数を取らなければ合格できない。とても不公平だ。農村と都市の差別は周

表3-16　家族関係の変化

			男		女	合計
			60年代生	70年代以降生		
			8	20	5	33
夫婦間の問題	ない		7	15	3	25
	ある		1	5	1	7
	分からない				1	1
結婚の満足度	満足		7	13	3	23
	不満			1		1
	どちらとも言えない		1	6	2	9
出稼ぎが夫婦関係に与えた影響	ない		3	12	3	18
	緊密になった		5	3		8
	疎遠になった			2	2	4
	分からない			3		3
家事負担への考え方	出稼ぎ前	家事は本来、女性が負担すべきだ	1	9	3	13
		家事は、男女で平等に分担すべきだ	7	9	2	18
		家事は、男女を問わず、外で仕事がみつからない方がやるべきだ		2		2
	出稼ぎ中	家事は本来、女性が負担すべきだ		5		5
		家事は、男女で平等に分担すべきだ	4	9	5	18
		家事は、男女を問わず、外で仕事がみつからない方がやるべきだ	4	6		10
	帰郷後	家事は本来、女性が負担すべきだ		1	1	2
		家事は、男女で平等に分担すべきだ	8	12	1	21
		家事は、男女を問わず、外で仕事がみつからない方がやるべきだ		7	3	10

資料）実態調査より作成

知の事実だが、どうしようもない。例えば、ある北京人と結婚した人の子供は１歳の時から早期教育を受け、２歳半で幼稚園に入り、４歳から英語とピアノを学んだ。今５歳で、パソコン操作もでき、歌・ダンス・水泳も上手だ。100までの計算もできる。一方、僕の子供は何もできない。農村に生まれたことで、これからの運命がもう決まってしまった」

帰郷後、多忙のあまり子供の面倒を十分にみられないとの声も聞かれる。それとも関わり、子育てで妻に過重な負担がかかっているケースもある。

＊「自営業の仕事が忙しい。出張が多くてあまり家にいられず、子供のしつけも教育も十分に見てやれない。よく妻に文句を言われるが、仕事を変えない限り、今のまま続けるしかない」

「運転手の労働時間は長く、家族と一緒にいる時間が少ない。朝６時頃に家を出て、日帰りでも深

夜12時すぎに家に戻る。妻は何も言わないが、僕は申し訳ないと思っている。家事や農業、子供や老人の世話などすべて妻１人でやっている」

第４節　出稼ぎ・帰郷と社会意識の変容

本節では、出稼ぎ・帰郷に伴う社会意識の変化についてみる。

第１項　労働観（表3-17）

まず労働観である。

出稼ぎ前は世代に関係なく、仕事において帰郷者達は「収入の高さ」を重視していた。それに加え、年長者は「安定して仕事があること」、若年者は「仕事内容の面白さ」を求めていた。

出稼ぎ中は、年長者では「収入の高さ」を度外視し、とにかく「安定して仕事があること」を一層重視するように変化した。一方、若年者では「収入の高さ」を重視する傾向が依然として続き、それに加えて、「他人に縛られず自由に働けること」、「職場の仲間との人間関係がよい」なども重視するようになった。

そして帰郷後は、世代を問わず、「収入の高さ」を重視するとともに、「仕事内容の面白さ」が再び強く意識されている。

総じていえば、年長者では出稼ぎ前・中には「安定した仕事」を求めていたのに対し、帰郷後は「仕事内容の面白さ」を重視するようになっている。出稼ぎが、あくまで経済的な収入の多さ・安定性を求めた労働行為であったのに対し、帰郷後はある程度、仕事そのもののおもしろさ・生きがいを求めるようになっているのである。

＊「出稼ぎは何よりお金のために行った。高収入の仕事が大事だと思っていた。でも、出稼ぎ先での経験を通して、お金も大事だが、安定がもっと大事だと思うようになった。頻繁に転職したり、失業したら、稼げない。そして帰郷後は、せっかく帰郷したのだから出稼ぎ先とは違い、少しは自由な仕事や面白い仕事をしたいと思うようになった」

「出稼ぎに行く前は、絶対にお金を稼ごうと思っていた。でも出稼ぎに行ってから、失業・強制労働・差別など、予想もしていなかったことが次々に起きた。それで、安定した仕事があれば、たとえ給料はそんなに高くなくても、稼げるとわかった。穏やかに、安定した出稼ぎをすることが、一番大事だと思うようになった。そして帰郷してからは、自分のやりたいことをするのが一番大事だと思うようになった。もう自分の人生の半分はすぎた。将来、どうなるかは全くわからない。だからこそ、目の前の家族と一緒に自由に働き、自分がやりたい仕事をするのが一番大事だと思うようになった」

一方、若年者は、出稼ぎそのものにすでに仕事そのもののおもしろさや自由・新たな刺激・人間関係の構築を期待していたのに対し、帰郷後はそれとは異なる意味での仕事のおもしろさ、すなわち自営業等での自己実現を仕事に求めていることが伺える。

とはいえ、「収入の高さ」が、帰郷後も依然として重視されていることは、一貫して変わらない。前述のように、帰郷後の経済生活は、決して安定したものではない。また特に若年者に、帰郷後、むしろ「仕事の面白さ」にこだわらず、とにかく高収入の仕事を追及するようになったと語るケースも少なくない。若年者では、出稼ぎ前・中に比べ、帰郷後の方が「収入の高さ」を重視するケースが増加してい

る。少なくとも労働観に限っていえば、特に若年者の間で帰郷後、金銭至上主義が浸透しつつあるといえよう。

＊「収入の高さはいつだって大事だ。結婚費用もかかるし、結婚後は育児や子供の教育費、将来は子供に家を建てたり、子供の結婚資金も必要だ。いつになってもお金はかかる」

「現代の中国人はお金の奴隷だ。この社会ではお金がないと何もできない。子供の頭がよくても、お金がなければ大学にも入れない。お金がないため、病院に入れない病人も多数いる。平等な権

表3-17　労働観（複数回答）

		男		女	合計
		60年代生	70年代以降生		
		8	20	5	33
出稼ぎ前	収入の高さ	8	12	3	23
	仕事内容がおもしろいこと		9		9
	安定して仕事があること	4	3		7
	他人に縛られず自由に働けること		1	2	3
	危険でないこと		3		3
	仕事がきつくないこと	1	1		2
	休みが多いこと		1		1
	職場の仲間との人間関係がよいこと		1		1
出稼ぎ中	安定して仕事があること	6	4	4	14
	収入の高さ		10	2	12
	他人に縛られず自由に働けること	1	9	1	11
	職場の仲間との人間関係がよいこと	1	9		10
	休みが多いこと		4	1	5
	仕事がきつくないこと		2	1	3
	危険でないこと	2	1		3
	仕事内容がおもしろいこと	1			1
帰郷後	収入の高さ	2	13		15
	仕事内容がおもしろいこと	4	5	2	11
	他人に縛られず自由に働けること	4	3		7
	安定して仕事があること	1	4	2	7
	職場の仲間との人間関係がよいこと	1	6		7
	仕事がきつくないこと	1	1	3	5
	危険でないこと		2	3	5
	休みが多いこと		2		2
	仕事内容が簡単なこと	1	1		2
	労働時間が短いこと	1		1	2

資料）実態調査より作成

利とかいっても、実際には平等ではない。差別の唯一の基準は、お金だ。いつでもお金のことを最初に考えている」

「毎日、何のために一生懸命働いているか。どんなきれいごとをいっても、実際には誰の答えも同じで、お金のためでしかない。中国ではどこでもそうだ。お金のために、どんな悪い仕事でもする。毒入りミルクで乳児が死んだ事件でもそうだ。安い材料で安易にモノを作って稼げればいい。皆、そう考えている。良心を守れば、生活が苦しくなるばかりだ。僕もお金が一番大事だと思っている」

「お金も、安定した仕事も、面白い仕事も、どれも大事だ。でも、３つが揃った仕事はほとんどない。どれか１つだけを選ぶとすれば、やはりお金だ。貧乏なら、人から差別される。稼ぐ能力のない男は、妻にも軽視され、不幸になる」

「今の中国人は物欲が強く、しかも負けず嫌いだ。だから誰かが高い家を建てたら、隣人は絶対にそれよりもっと高い家を建てる。無駄使いであろうが、何であろうが、そうするしかない。金を稼げない人は、他のどんな能力があっても、親戚や知人から無能だと言われる。金持ちなら、どんな利己的な悪人でも人気がある。だから僕は、仕事では収入が高いことが一番大事だと思う。収入を重視しているから、自分のやりたいこと自体、だんだんなくなってきた。今はもう、自分が何をやりたいとか思いつかなくなっている」

第２項　結婚・夫婦観（表3-18、表3-19）

結婚・夫婦関係に対する考え方も、大きく変化した。

まず出稼ぎ前、年長者は結婚相手に「優しさ」を、若年者は「見た目のよさ」や「愛情」を、それぞれ重視していた。

しかし出稼ぎ中、年長者では「家族に対する責任感」や「正直さ・誠実さ」を重視する傾向が強まる。

＊「出稼ぎ前は、見た目のよさが大事だった。出稼ぎ後は、見た目のよさだけで生活できるわけではないと思うようになった。正直で誠実な性格、家族に対する責任感の方がもっと大事だと感じるようになった。今もそう思っている」

「出稼ぎ前は、結婚相手は優しくて正直で誠実ならいいと思っていた。出稼ぎ後、すべてを妻に任せるので、責任感があることが大事だと思うようになった。帰郷してもやはり責任感が大事だと思うし、向上心も大事だと思うようになった」

「出稼ぎ前は若かったので当然、女性の見た目を重視していた。結婚後、僕は出稼ぎに行って、家の事はすべて妻に任せていた。子供と両親のことや親戚づきあいなど、すべて妻が僕の代わりにやってくれた。今も僕は忙しいが、妻は家族に対する責任感が強く、隣人関係にもうまく対処している。結婚生活では、好き嫌いというより、夫婦間の信頼感が大事と思うようになった」

これに対し、若年者・女性では「家族に対する責任感」だけでなく、「仕事の能力」を重視する傾向が強まる。

＊「出稼ぎ前は、見た目のよさを重視していた。出稼ぎ中、仕事の能力が高い女性が何人かいて、あまり見た目は良くないが、すごく人気があった。その時、能力のある女性は、見た目がいい女性より魅力的だと思うようになった。帰郷後の今は、能力や見た目は別に大事ではなく、家族に対

表3-18　結婚観（2つまで）

		男		女	合計
		60年代生	70年代以降生		
		8	20	5	33
出稼ぎ前	見た目のよさ	1	9	3	13
	愛	1	6		7
	やさしさ	5	3	3	11
	正直さ・誠実さ	2	1	2	5
	経済力		2		2
	家族勢力		1	1	2
	高学歴		1		1
	仕事の能力		1		1
	責任感		1		1
	専門技術の保有		1		1
出稼ぎ中	仕事の能力		9	3	12
	責任感	5	5		10
	正直さ・誠実さ	6	2		8
	高学歴		5	2	7
	経済力	1	3	2	6
	専門技術の保有	1	3	2	6
	家族勢力		3		3
	やさしさ		2	1	3
	見た目のよさ	1	2		3
	人間関係をうまく処理できる能力		3	3	6
	都市戸籍の保有			3	3
	愛		2		2
帰郷後	責任感	6	11	4	21
	経済力		7	3	10
	正直さ・誠実さ	4	3	1	8
	人間関係をうまく処理できる能力	1	5		6
	家族勢力		3	2	5
	専門技術の保有		3	1	4
	愛			1	4
	やさしさ		3		3
	高学歴		2		2
	仕事の能力		1	1	2
	見た目のよさ		1		1

資料）実態調査より作成

表3-19　離婚に対する考え方

		男		女	合計
		60年代生	70年代以降生		
		8	20	5	33
出稼ぎ前	男女が一度結婚したら、絶対に離婚してはならない	4	11	4	19
	たとえ夫婦の関係が悪くなっても、できるだけ我慢して関係を修復すべきである	3	3	1	7
	たとえ夫婦の関係が悪くなっても、子どもがいる以上、子どものことを考えて離婚すべきではない	1	1		2
	夫婦の関係が悪くなったら、離婚することもやむを得ない		2		2
	結婚や離婚という制度に縛られず、自由に生きる方がよい		2		2
	夫婦の関係が悪くなったら、はっきりと離婚すべきであり、不幸な結婚生活を続けることはお互いにとってよくない		1		1
	現在の配偶者よりも好きな異性ができれば、離婚することもやむをえない				0
出稼ぎ中	たとえ夫婦の関係が悪くなっても、子どもがいる以上、子どものことを考えて離婚すべきではない	4	5	3	12
	夫婦の関係が悪くなったら、離婚することもやむを得ない	3	3	1	7
	夫婦の関係が悪くなったら、はっきりと離婚すべきであり、不幸な結婚生活を続けることはお互いにとってよくない		5		5
	男女が一度結婚したら、絶対に離婚してはならない		3	1	4
	現在の配偶者よりも好きな異性ができれば、離婚することもやむをえない		2		2
	結婚や離婚という制度に縛られず、自由に生きる方がよい		2		2
	たとえ夫婦の関係が悪くなっても、できるだけ我慢して関係を修復すべきである	1			1
帰郷後	夫婦の関係が悪くなったら、はっきりと離婚すべきであり、不幸な結婚生活を続けることはお互いにとってよくない	5	6	4	15
	たとえ夫婦の関係が悪くなっても、子どもがいる以上、子どものことを考えて離婚すべきではない	2	7		9
	たとえ夫婦の関係が悪くなっても、できるだけ我慢して関係を修復すべきである	1	1	1	3
	男女が一度結婚したら、絶対に離婚してはならない		2		2
	夫婦の関係が悪くなったら、離婚することもやむを得ない		2		2
	結婚や離婚という制度に縛られず、自由に生きる方がよい		2		2
	現在の配偶者よりも好きな異性ができれば、離婚することもやむをえない				0

資料）実態調査より作成

する責任感を持っている事が一番大事だと思うようになった」

「出稼ぎ前、絶対に見た目のよい女性と結婚しようと思っていた。でも出稼ぎ後、考えが変わった。仕事ができる女性と何人か出会い、最初はあまり見た目がよくないと思ったが、時間が経つと気にならなくなった。特に、人間関係をうまくできる有能な女性と付き合った。ただし故郷が遠く、彼女の両親に反対され、別れた。その後、今の妻と結婚した。妻は家族に対する責任感が強く、人間関係にもうまく対処できる。とてもいい妻だ」

さらに若年者や女性の場合、帰郷後は、単に「家族に対する責任感」だけでなく、それを裏付ける経済力も重視するようになっている。「仕事の能力」よりむしろ、さらに現実的な経済力が重視されている。ここでも少なくとも一面では、金銭至上主義が浸透している。

＊「見た目のいい男性と結婚したいという夢は誰でも見る。私もそうだった。出稼ぎ先で今の夫と付き合い始めた。夫はあまり見た目が良くないし、身長も低いが、専門技術を持っているし、頭もすごくよく、仕事もできる。彼と結婚したら将来経済的にもいい生活ができると思った。２人で帰郷してから、夫は専門技術を生かし、自営業を始めた。私の思った通り、すごくいい人だ。私にも子供にも優しく、責任感を持っている」

「若い時は小説の登場人物のように格好よくて、お金持ちで、優しい男性と結婚したいと思った。でも、そんな男性は現実には１人もいない。それでも私は見た目のよさを重視して結婚した。しかし結婚後、一緒に出稼ぎに行ってみると、彼の駄目な所ばかり目につきだした。仕事もまともにできず、ふまじめで、怠けたり、朝寝坊したり、仮病を使ったりした。ちょっとお金があれば、自分の服を買ったり、外食したり、私のことは全然気にかけてくれなかった。私は一生懸命に仕事をして貯金しても、すぐ彼に使われたので、よく喧嘩した。そんな生活を続けたくなかったので、離婚した。その後は、男性の仕事の能力や経済力、責任感を重視するようになった。見た目のよさではご飯は食べられない」

そして男女を問わず、出稼ぎ前には「男女が一度結婚したら、絶対に離婚してはならない」との考え方が強かった。これに対し、出稼ぎ中には「夫婦関係が悪ければ離婚するのもやむを得ない」、または「たとえ夫婦の関係が悪くなっても、子供がいる以上、子供のことを考えて離婚すべきではない」との意見が増える。さらに帰郷後は「夫婦関係が悪ければはっきり離婚すべきであり、不幸な結婚生活を続けることはお互いにとってよくない」との考えが広がっている。これらには、世代・性別等で顕著な差はみられない。どの世代・性別でもこうした変化が増幅しているのである。

＊「出稼ぎ以前は、結婚したら絶対に離婚してはいけないと思っていた。でも、だんだん考えが変わってきた。今の社会では人間はよく変わるので、将来の事は誰にも分からない。もし夫婦関係が悪くなったら、特に夫に愛人ができたら、たとえ子供がいても離婚すべきだと思う」

「出稼ぎ前、夫はとても優しかった。でも出稼ぎに出た後、夫婦間の会話は少なくなった。帰郷してもあまり話さなくなった。出稼ぎ先で夫が愛人を作ったという噂を聞いた。もし証拠をつかんだら、私は絶対に離婚する。子供も夫を許さないだろう」

「80年代に僕が結婚した時は、農村で離婚するケースは全然なかった。今、離婚は珍しいことではない。周りの知人が何人も離婚した。僕の考えも変わった。もし夫婦関係が本当に悪くなったり、互いに信頼しなくなったり、毎日喧嘩するくらいなら、離婚すべきだ。離婚しないで生活を続け

たら、逆に子供に悪い影響がある」

帰郷後、実際に離婚に踏み切ったケースもある。

＊「僕は２回離婚した。最初は親戚の紹介で結婚した。妻は５人姉妹の末っ子で、とてもわがままで、普段、子供の面倒もみず、農業も炊事や家事もしなかった。毎日寝たり、テレビを見たりだった。僕は怒って喧嘩した。妻は、産まれて３カ月の息子をソファに置いて、自分の服とお金を持ち、実家に戻ってしまった。それで離婚した。１年後、親戚の紹介で再婚した。最初は関係がよく、息子もできた。でも一昨年、妻は保険の仕事を始め、必死で走り回っていた。そのうちに男性の上司と噂になり、僕の反対も息子の懇願も無視して、家族に無関心になった。喧嘩も多くなり、僕は自殺未遂事件も起こした。去年、やむを得ず離婚した。僕の自尊心はひどく傷つけられた。その後、インターネットを介して、今の妻と付き合い始めた。美人ではなく、妊娠できない身体だが、僕にも２人の息子にも優しいから満足している。結婚や離婚は運命みたいなもので、人間はよく変わるものだ」

また「離婚すべきではない」という意見の中でも、経済的理由で「離婚できない」と語るケースも少なくない。男性による結婚費用の負担は、ここにも大きな影響を与えている。

＊「帰郷後、夫婦関係が悪くなったら離婚すべきだと思っていたが、結婚にはすごくお金がかかる。お金さえあれば、離婚しても再婚できるから大丈夫だ。でももし、両親や自分で一生懸命にお金を貯めて結婚したのなら、離婚は慎重に考えるべきだ」

「結婚費用は高い。付き合い始めてから結婚するまで10万元はかけないと結婚できない。このことは直接、僕の結婚観に影響している。夫婦関係が悪くなっても、金がかかるから離婚はしない」

「いい女性はもっといい男性と結婚したいわけで、ほとんど都市出身の男性やお金持ちの男性・公務員と結婚する。残りの女性も、経済状況をよく比較して少しでも有利な農村の男性と結婚する。男の側は結婚前に、多額の金を貢ぎ、新しい家を建て、妻になる女性の家族にまで県城でマンションを買ってあげたりしている。そこまでお金をかけている以上、離婚なんてできない」

第３項　子供観・教育観（表3-20、表3-21）

次に、子供観・教育観の変化をみよう。

まず、出稼ぎ前後を問わず、「血統の跡継ぎは男なので、できるだけ男の子がほしい」という意識が一貫して強いが、しかしその意識は徐々に希薄化している。むしろ「女の子の方が優しいので、できるだけ女の子がほしい」、「娘の方が息子より老後の面倒をみてくれるから、女の子がほしい」と考えるケースが徐々に増加しているのである。

また子供に希望する学歴は、一貫して大卒が多い。しかも、出稼ぎ中には「中卒でよい」との考えが消え、帰郷後には「高卒でよい」との意見も消える。若年者を中心に、出稼ぎ先で大卒者といえども就職難に陥っている現実を目の当たりにし、さらに高学歴の大学院・海外留学などを望む声が増加している。総じて、出稼ぎの経験を通して一層、高学歴志向が高まっているのである。

＊「出稼ぎ前は、大学入試がとても難しかった。自分の子供も大学には入れないから、高校までで十分だと考えていた。でも出稼ぎ先の都市で仕事を探すと、少しいい仕事だと募集条件に大卒のみと書いてある。だから、大卒じゃないとだめだと思った。今は大卒でも仕事がない。だからもし

大学に入ったら、絶対に博士まで行かせる。博士ならまだ仕事のチャンスも多いだろう。でも数年後は、博士でも仕事がない可能性もあるが（笑）」

「以前は大卒で十分だと思っていたが、近頃は大卒でもだめだと思っている。出稼ぎ先で僕達と一緒に働いていた大卒者もいた。肉体労働なのに力もないし、大卒の自慢ばかりして僕達を軽視して、とても嫌な人だった。そんな大卒なら要らない。将来、子供はアメリカやイギリスへ留学させたい。最低でも日本へ行かせたい。留学生はまだ人気がある。仕事のチャンスが、国内の大卒者より多い。そのためにはお金が必要だ。子供の留学費用を貯めなければ」

「以前は大学生が珍しかったが、今は大学生が多すぎる。大卒者は農民工と仕事を取り合い、しかも農民工より弱い。同じ職場でも、農民工より給料が低い大卒者も多い。面子のため、大卒者は帰郷しない。農民工なら帰郷しても誰にも何も言われない。でも、大卒者は帰郷したらプライドが傷つけられる。だから、大卒者は都市でどんなに苦しくなっても帰郷しない。両親にも本当の生活実態を話していない。自分の子供には、そんな生活を送らせたくない。親戚の子供は日本へ留学して博士号を取得し、昨年、上海の復旦大学に就職した。留学の博士は国内の博士より人気があると思うので、自分の子供は留学して博士になってほしい」

ただしごく一部ではあるが、出稼ぎ先で大卒者でも仕事がない現実をふまえ、有名大学でなければ、むしろ就職に有利な専門学校に子供を進学させたいと考えるケースも生まれている。

＊「2000年以前は大学生が少なく、特に農村から出て大学に入るのがとても難しかった。今は様々な大学ができて、お金があれば誰でも大学生になれる。当然、大学生の質も下がった。大学を卒業しても仕事がない。特に農村出身の大学生は、都市での人間関係も全くない。すごく優秀な子供以外は、農民工と同じ仕事をしたり、農村に帰って普通の仕事をしている。だから有名大学に入れないなら、専門学校に入った方がよい。専門学校の卒業生は大学生より仕事を見つけやすい」

将来、子供にどんな人間になってほしいかを聞くと、出稼ぎの前後を問わず、「いい学校に進学して、専門職・管理職・エリートになってほしい」、および「親や高齢者を尊敬する道徳的な人間になってほしい」という回答が大半である。高学歴を生かして専門職・管理職・エリートになり、同時に自分達のことを大切にする親孝行な子供を期待する姿勢が、鮮明に見られる。

そして子供に将来、どこに住んでほしいかは、やはり出稼ぎの前後を問わず、北京・上海などの大都市という答えが最も多い。出稼ぎ先の大都市で様々な苦難・疎外を体験し、理想と現実のギャップを熟知して故郷に戻った帰郷者達は、実際に帰郷してみるとやはり子供達の世代には大都市に脱出してほしい ── ただし自分達のような出稼ぎ者としてではなく、高学歴の専門職・管理職・エリートとして ── と念じているのである。

＊「出稼ぎ前、僕にとって北京・上海は夢のような都市だった。定住できるなんて夢にも思わなかった。当然、子供にもそんな大きな期待はしていなかった。北京で出稼ぎしていた時、北京に定住したくなった。でも、僕のこの一生では北京には定住できないと思った。だから、子供には将来、北京に定住してほしい。農村でどんなに頑張ってお金だけを貯めても、農民の身分は変わらない。つねに都市より後れてしまう。子供には都市の大学を卒業して、絶対農村に帰ってきてほしくない」

「人はいつも年長者から期待を託され、年少者に期待を託す。僕もそうだ。僕は、子供に人生の成

功者になってほしい。農村では将来が見えにくく、都市に行けば差別される。農村はどんなに発展しても、都市より後れてしまう。子供には農村を脱出して、大都市で自分の人生を送ってほしい。僕自身は以前、北京・上海に憧れを感じていたが、実際の出稼ぎの経験を通して、憧れはなくなった。でも子供には大都市に出ていってほしい」

「子供が農村に残ることは、全く望んでいない。僕は能力もお金もないから、大都市に定住できなかった。だから今、一生懸命に努力して子供を教育し、将来は大都市に定住できる能力を育てている」

表3-20　子供の性別・子供の学歴への希望

			男		女	合計
			60年代生	70年代以降生		
			8	20	5	33
子供の性別への希望	出稼ぎ前	血統の跡継ぎは男なので、できるだけ男の子がほしい	6	13	4	23
		子供が男でも女でも関係ない。どちらでもよい	2	7	1	10
	出稼ぎ中	血統の跡継ぎは男なので、できるだけ男の子がほしい	6	12	1	19
		子供が男でも女でも関係ない。どちらでもよい	2	5	2	9
		女の子の方が優しいので、できるだけ女の子がほしい		3	2	5
	帰省後	血統の跡継ぎは男なので、できるだけ男の子がほしい	6	9		15
		子供が男でも女でも関係ない。どちらでもよい		6	3	9
		現在、娘は息子より老後の世話を見てくれるので女の子がほしい	2	3	1	6
		女の子の方が優しいので、できるだけ女の子がほしい		2	1	3
学歴への希望	出稼ぎ前	中学校まで	1	1	2	4
		高校まで	1	5	1	7
		大学まで	6	11	2	19
		専門学校		3		3
	出稼ぎ中	高校まで			2	2
		大学まで	6	15	2	23
		院生まで		1		1
		博士		1	1	2
		専門学校	2	3		5
	帰省後	大学まで	6	8	3	17
		院生まで		1		1
		博士		4		4
		留学（日本、韓国、ヨーロッパ、アメリカなど）		7	1	8
		専門学校	2		1	3

資料）実態調査より作成

表3-21 子供の定住地・子供の将来への希望

			男		女	合計
			60年代生	70年代以降生		
			8	20	5	33
定住地への希望	出稼前	北京・上海などの大都市	6	11	5	22
		一般的な都市でいい	2	8		10
		農村		1		1
	出稼ぎ中	北京・上海などの大都市	3	6	3	12
		一般的な都市でいい	2	9	1	12
		両親の出稼ぎ先の都市	2	5		7
		農村	1		1	2
	帰省後	北京・上海などの大都市	4	8	3	15
		一般的な都市でいい	3	8	1	12
		外国		4		4
		農村	1		1	2
将来、子供にはどんな人間になってほしいか（複数）	親や高齢者を尊敬する、道徳的な人間になってほしい		8	16	4	28
	いい学校に進学して、専門職・管理職・エリートになってほしい		7	10	4	21
	友達や周りの人と仲良くできる人間になってほしい		1	5	2	8
	経済的に豊かになってほしい			4		4
	農民の身分を差別せず、農民を尊敬する人になってほしい			3		3
	社会的に弱い立場にいる人々に対して、思いやりのある人間になってほしい			1		1
	農村の発展に貢献できる人間になってほしい			1		1

資料）実態調査より作成

ただし、出稼ぎ先の大都市で体験した差別や疎外、理想と現実のギャップをふまえ、子供は大都市に住ませたくないと言う声も徐々にではあるが、増えている。ただしその場合も、農村にとどまるのではなく、中小都市に住むことを望んでいる。

＊「上海に出稼ぎに行く前は、テレビで上海の景色を見て、とても羨ましかった。そんな都市に生まれていれば幸運だったのにと思っていた。だから最初、あこがれの上海に出稼ぎに行った。でもそこでいろんな差別や不公平に見舞われ、都市は自分に合わないと実感した。将来、子供もこの都市に来ない方がいいと思った。１年後、別の中小都市に出稼ぎに行った。そこは、人間が素朴で、悪くなかった。今は故郷に帰ってきたが、あの中小都市が好きだ。子供が将来、農村を出る時も、中小都市の方が大都市より住みやすいと思う」

「出稼ぎに出る以前は、子供に将来、大都市に住んでほしかったが、今はそう思わなくなった。農村出身の大学生は、卒業して都市で働いてもとても生活が苦しいことがわかった。大都市では家

も買えず、結婚も難しい。若者はお金のことばかり考え、いろんな手段を駆使して大都市に残りたがっている。大学生の女の子が、身体を使って都市の男性の愛人になることも珍しくない。僕は自分の子供達にそんなことは望まない。過大な期待はせず、自分の能力の範囲で暮らせば、それで十分だ。中小都市でも近くの県城でも構わない。子供達が穏やかな生活を送ることが僕の望みだ」

「出稼ぎに行く前は、大都市の方がいいと思っていた。でも、出稼ぎをしている時、大都市は危ないと思うようになった。やはり農村の方が安全だ。それでも帰郷後、農村も以前とは変わっていた。肉親でもお金のためにいがみ合い、いい人間関係を作りにくくなっている。中小都市・県城が一番いいと思う。大都市よりストレスが少なく、農民どうしのつまらない競争意識からも離れられるから」

また実際に知人や親戚の子供が大都市で結婚・定住したが、それが決して幸福を意味しないという事実を知り、自分の子供には大都市に出てほしくないと感じているケースもある。大卒で都市に定住しても、都市出身者との経済格差や差別はなくならないのである。

＊「以前は、僕も大都市に幻想を持っていた。でも、今は変わった。知人の息子が都市の女性と結婚したが、あまり故郷に帰らず、親孝行も全然していない。息子は都市で奴隷のように働いているのに、それでも妻や妻の両親に農村出身者として差別されている。孫ができたので、知人が都市へ行くと息子の妻やその親戚からすごく差別され、我慢できずに２日目には帰ってきてしまった。もう２度と行かないと言っていた。当然、息子や孫も農村に帰ってこない。たまに、息子が妻に隠れてわずかな小遣いを知り合いに託し、農村の父母に送ってくる。そんなお金を受け取り、知人は惨めな気持ちになり、とても悔しがっている。必死に育てた息子がやっと大学を卒業して、都市で結婚して子供もできたのに、こんな結果になってしまうとは。息子は元々すごく頭もよく優しい子だったのに、都市出身の妻より経済力が劣っているというだけで、自分を卑下している。この知人の話を聞き、僕は学んだ。大都市ではなく、中小都市でいい。息子には同じような出身の女性と結婚して、自由なのびのびした生活を送ってほしい」

「親戚の息子はやっと大学を卒業して、都市出身の女性と結婚した。でも、お金のことで両家の関係は悪くなった。まず婚約や結婚の結婚資金について、嫁がすごく不満をもった。親戚は農民だから、都市市民のような多額の資金は出せない。また都市でマンションを購入したが、頭金が30万元必要で、２人の両親からそれぞれ15万元ずつ出してほしいということになった。嫁の両親にとっては15万元出すのは難しくないが、親戚にとって15万元はとんでもない金額だ。もともと、莫大な借金をして息子の大学費用を支払ったのに、その上に15万元など出せるわけがない。それで、嫁も嫁の親もすごく不満を感じた。頭金はすべて嫁の親が出した。腹立たしいのは、息子があまり帰省せず、年末も両親の誕生日も何もくれないことだ。今、親戚はとても悲しんでいる。自分が必死に節約してやっと息子を育てたのに他人の子供になってしまい、老後になっても頼れなくなっている」

第４項　人生観（表3-22）

人生観の変化をみよう。

出稼ぎ前は、世代・性別を問わず、「経済的に豊かな生活をしたい」との意識が強かった。

表3-22　人生観の変化（複数回答）

		男		女	合計
		60年代生	70年代以降生		
		8	20	5	33
出稼ぎ前	経済的に豊かな生活をしたい	7	16	4	27
	やりがいのある仕事につきたい		3	2	5
	専門的な知識・技術を身に付けたい	1	3		4
	他人との競争に勝ちたい	1	3		4
	故郷・両親を大切にしていきたい		2	1	3
	農業・農村の発展に貢献したい	1		2	3
	社会的な地位・名誉を得たい	1	2		3
	子供の将来を第一に考えていきたい	1		1	2
	無理をせず、堅実にいきたい		1		1
	現在の家族を大切にしていきたい	1			1
	何物にも縛られず自分の好きなように自由に生きたい		1		1
出稼ぎ中	専門的な知識・技術を身に付けたい	2	12	5	19
	無理をせず、堅実にいきたい	4	3	2	9
	故郷・両親を大切にしていきたい	2	4	2	8
	近所・仲間との人間関係を大切にしたい	1	4		5
	何物にも縛られず自分の好きなように自由に生きたい	1	3		4
	経済的に豊かな生活をしたい		3		3
	社会的な地位・名誉を得たい		2	1	3
	他人との競争に勝ちたい	3			3
	やりがいのある仕事につきたい	1	1		2
	現在の家族を大切にしていきたい		2		2
	子供の将来を第一に考えていきたい	1	1		2
帰郷後	子供の将来を第一に考えていきたい	4	8	4	16
	無理をせず、堅実にいきたい	3	5	3	11
	故郷・両親を大切にしていきたい	5	5		10
	現在の家族を大切にしていきたい		3	2	5
	他人との競争に勝ちたい	1	3	1	5
	経済的に豊かな生活をしたい	1	3		4
	やりがいのある仕事につきたい		2		2
	社会的な地位・名誉を得たい		2		2
	何物にも縛られず自分の好きなように自由に生きたい	1	1		2

資料）実態調査より作成

しかし出稼ぎ中、若年者や女性を中心に、「専門的な知識・技術を身につけたい」との意識が強まっ

ている。

＊「出稼ぎ前、絶対にお金を貯めて、家族の経済状況を変えようと決心していた。出稼ぎ中、僕はとても節約して、服も買わず、給料の半分は両親に送金した。残りの半分はほとんど貯金した。結婚費用の大部分は自分の貯金だった。また、専門技術を勉強しようと決めた。故郷では、トラックの運転手が足りないので、運転手の養成コースを選んだ。免許を取った時、ちょうど妻が妊娠した。それで帰郷を決めた。今は家族を大切にして、確実に仕事をして、子供をきちんと教育したい」

「出稼ぎ前は、テレビで大都市を見て、すごく行きたかった。都市の豊かな生活がしたくて、広州へ行った。でも出稼ぎ生活は、僕の考えを変えた。単純な肉体労働をしているだけでは、豊かな生活など絶対に実現できないと気づいた。それで仕事の窓・リフォームの技術を吸収し始めた。専門の本も読み、先輩にも聞いて、２年後、技術を身に付けた。帰郷後の今は、両親の調子が悪くなったり、子供も２人産まれたので、家族や子供の将来などを第一に考えるようになった」

「出稼ぎ前、農村は貧しく、裕福な家庭が羨ましかった。中学校を卒業したらすぐ出稼ぎに行って、早めにお金を儲けた方がいいと思った。でも出稼ぎ中、両親のことがとても懐かしくなった。何か技術を勉強して、早めに帰郷しようと思った。私は美容室で仕事して、技術を身に付けた。帰郷後の今は、子供のことを第一に考えている。私の人生はもう先が見えているが、子供の人生はこれからだ。子供のためなら、どんなことを犠牲にしても構わない」

「出稼ぎ前、僕の考えはすごく単純だった。結婚のため、両親の経済的負担を軽くするために出稼ぎに行った。でも、出稼ぎ先でいろんな経験をした。例えば、お金のために風俗店で働く10代・20代の若い女性、交通事故で亡くなった同僚、仕事場の毒物で身体を壊した友人。今、人々はただ貧しいからというより、貧しくなくても経済的な豊かさを追求する。お金のために、友人・家族・肉体など、すべてのものを犠牲にしている。不思議なことだ。しかも買い物をしている時に警察に呼ばれ、暫住証がなくて送還された同僚がいる。僕も、都市出身者に泥棒とか田舎くさいとか見られた。出稼ぎ期間が長くなればなるほど、都市で感じる寂しさは強くなる。僕は農民出身なので、永遠にこの都市には馴染めないと思った。自分の住むべき土地は故郷しかない、都市の方が給料が高くても帰るしかない、そう思った。帰郷後の今、２人の子供の父親だから、子供に責任を持っている。無理をせず、確実に自分の能力を発揮して、子供のために努力したい」

一方、年長者では「無理をせず、堅実に生きたい」、「故郷・両親を大切にしたい」との意識も増している。そして帰郷後には、「子供の将来を第一に考えて生きたい」を重視する意識が急速に強まっている。

＊「出稼ぎ前はとにかく経済的に豊かな生活をしたかった。出稼ぎ中は、経済的には多少改善されたが、家族と離れてとても寂しかった。それで故郷や両親が懐かしくなり、それらを大切にしていきたいと思うようになった。それが僕が帰郷を決意した理由の一つだ。また出稼ぎを通して、専門的な知識や技術が大事だと思った。帰郷後の今は、故郷と両親と家族を大切にして、無理をせず、堅実に生きたい。もちろん、子供の将来も大事だ。父としての僕の一切は、子供のためにある」

「出稼ぎ前は、経済的に豊かな生活を必死に追求していた。でも出稼ぎ中、人生でお金が一番大事ではないと思うようになった。父がガンになり、もっと両親を大事にしようと決めた。出稼ぎの

給料の多くは両親に送った。父が亡くなり、母も調子が悪くなったので、僕は出稼ぎを辞めて帰郷した。今は、余計なことを考えず、母と妻と子供を大事にして、子供の将来のために一生懸命に仕事して、無理せず自分のできる範囲で家族のために努力しようと思っている」

第５節　都市と農村をつないで

最後に、出稼ぎ先での都市生活の体験が、農村・故郷に対する態度をどのように変えたのかを見ていこう。

第１項　農村観の変化（表3-23）

出稼ぎを経験した結果、農村に対する考え方は大きく変化した。

まず、肯定的な変化としては、「都市での仕事より農業の方が自由だ」、「都市より、人間関係が暖かい」、「都市より、物価が安い」、「都市より、静かで落ち着いている」、「都市より、人間が正直で素朴」棟があるいわば都市での労働・生活体験が、故郷の農村の新たな価値に気づかせたといえよう。

＊「農業は出稼ぎの仕事より自由だ。用事があったり体調不良の時は、自由に休んでも構わない。都市の仕事で休んだら、給料を引かれたり、叱られたりする」

「農村の人は情に厚く、相互交流も頻繁だ。都市の人はみんなマンションなので、ドアを閉めると誰とも交流しない。隣人でも声もかけない。出稼ぎしていた時、僕は都市の人に積極的に声をかけてみたが、その人は怪しむような目で僕を見て、何の返事もなく行ってしまった。多分、都市の人は警戒心が強いと思う。もし同じことを農村でやったら絶対違う。何かしら返事してくれる。全く知らない人でも同じだ」

「都市は便利だが、うるさい。毎日、車が多すぎて、夜も静かではなく、事故も多い。農村は不便だが、静かで昼でも夜でもゆっくり休める」

一方、否定的な変化は、まず「都市に比べ、文化水準が低い」ことを改めて実感したことである。帰郷者の多くは、とりわけ出稼ぎ経験がない農民と都市住民のギャップを感じている。（注２）

＊「農村は文化水準が低い。出稼ぎに行ったことがない人としゃべる時、そんな感じがする。都市で毎日、目にすることも、農村ではテレビでしか見られない。農民にとってはテレビで見ることは夢のようで、僕達が都市で見聞きしたことを話すと、嘘とか大げさとか言われる」

農村の衛生状態の悪さを指摘する声も、特に若年層・女性を中心に多い。ただしその中には、農村の都市化に伴う環境悪化が多く含まれている。

＊「農村の衛生状態の悪さは言うまでもない。どこもごみだらけで、特に木材工場や石炭工場ができてから、汚染対策など皆無だ。今、河の水は真っ黒だ。僕が子供の時によく泳いだ川は、もうごみの川になり果てた。以前、僕はそこを通る時、とても懐かしかった。今はその名残もない。皆、地下水を飲んでいるが、以前のきれいでおいしい水では全くなく、ひどく濁っている。飲む前に何十分も待って不純物を沈殿させないと飲めない。味も塩辛く、砂も入っている」

「環境がすごく悪くなった。経済は発展したが、環境汚染への対策はまったくない。農産物への農薬の乱用、空気中の排ガスの排出、川への汚水の排出、電動自転車のバッテリーの廃棄等、いろんな汚染がある。最近、身のまわりで奇病が発生している。原因は分からないが、絶対に汚染と

関係があると思う。たとえば近年、子供の手足の奇形が毎年発生しているが、以前は全然なかった。このままにしていると将来、大きな問題になる」

表3-23　農村観の変化（複数回答）

			男		女	合計
			60年代生	70年代以降生		
			8	20	5	33
帰郷後の農村に対する考え方の変化	良くなった	農業の方が自由だ	6	8	1	15
		人間関係が暖かい	5	9		14
		物価が安い	2	8	2	12
		静かで落ち着いている	3	5	1	9
		人間が正直で素朴		6	2	8
		自然が豊か		5	2	7
		治安がよい	1	4		5
		差別が少ない		3		3
	悪くなった	文化水準が低い	5	12	3	20
		衛生が悪い	1	13	3	17
		治安が悪い	2	7	2	11
		差別が激しい	1	3	2	6
		干渉しすぎる		2	3	5
		貧しい	1	3	1	5
		農業がきつい		4		4
		不便		3		3

資料）実態調査より作成

第２項　農村の変化（表3-24）

では、出稼ぎの前後で、帰郷者達は、農村がどのように変わったと感じているのだろう。

まず年長者では、農村の人間関係が緊密化したと感じている。年長者は、出稼ぎ先で同郷の友達・親戚と労働・生活をともにし、また出稼ぎ先で同郷の新たな友人・知人を作っており、これが帰郷後も継続している。

＊「故郷での人間関係は、出稼ぎ前より緊密になった。出稼ぎ先で知り合った人と、帰郷した後も交流がある。まだ出稼ぎ中の知り合いが地元に帰ってきたら、皆で集まって酒を飲む。僕は、出稼ぎを通してたくさんの友達ができた。クラスメートみたいに純粋な感情を持っている『工友（労働者仲間）』もいる」

これに対し、若年者でも、一部には、出稼ぎ先で培った同郷人との新たな絆が、帰郷後も維持されているケースがある。また若年者の場合、それが自営業の起業や仕事上の相談相手として機能している点も特徴的である。

＊「事業で成功するには友達が必要だ。もし信用できる友達が１人もいなかったら、自分自身を反省するべきだ。僕は友達が一番大事だと思っているので、どこでもいっぱいの友達ができる。今も出稼ぎ先でできた友達が僕をよく手伝ってくれるし、励ましてくれる」

「出稼ぎ先でよく同僚達と一緒に遊び、仲良くなった。今は皆、バラバラになったが、よく電話したり、メールしたりして懐かしい。もし機会があれば、一緒に起業できたらいい」

「出稼ぎ先で話あえる人がいっぱいできた。困ったことがあれば、互いに手伝ったし、相談しあった。僕の結婚式に参加してくれた人も多かった。帰郷してからもよく連絡している」

「出稼ぎ先で一緒に遊んだり、悩みごとを相談したり、話したり、買い物したりした。私が帰郷した後も何回か連絡があった」

しかし総じていえば、若年者や女性には、人間関係が疎遠になり、悪化したと感じているケースが比較的多い。自営等の仕事に必要な交際は増えても、人間としての信頼関係は希薄化しているとの声が多い。

＊「疎遠になった。今は皆、一生懸命に働くばかりで暇がない。普段会っても、『いつか一緒に飲もう』とか『いつか話をしよう』とか声をかけるだけだ。仕事の付き合いでよく酒は飲むが、それ以外の心の交流はない」

「疎遠になった。たとえば以前は皆、暇だったので、よくトランプや麻雀をしていた。でも今は皆、仕事が忙しく、時間もない。旧正月でも皆、自宅でテレビを見ている。以前、農村にはあまりテレビがなかったから、皆、テレビのある家に集まり、賑やかだった。今は皆、テレビを持っているのでそんな集まりもない。もちろん自営業で起業する人が増え、仕事上のコネ作りの付き合いは多い。その中でいい友達ができることもある。ただしそうした付き合いは、目的があってのことだ」

「疎遠になった。小さい時の仲間が都市へ行ったり、仕事に没頭したり、結婚して多忙になったりして、会ってもあまり喋らなくなった。特に女性は、お互いの優劣を比較しがちで、本当の友達がほとんどできない。虚偽、嘘、拝金主義など、昔の知り合いも皆、人格が変わってしまった」

農村生活の変化については、同様の着眼点に基づいて、肯定的評価と否定的評価が錯綜している。すなわち、「出稼ぎによって村民の生活水準が向上した」ことと裏腹に「村民間の貧富の差が拡大した」。また「村民が子供の教育をより重視するようになった」と同時に、「子供達が出稼ぎに行きたがり、学習に興味を失った」。ただしいずれにせよ、農村生活については、過度な競争主義・拝金主義・虚栄の張り合い・賄賂の横行など、極めて多くの問題の深刻化が指摘されている。

＊「自営業者が増えて生活水準が上がったが、貧富の格差が急速に拡大している。それに伴い、人格の攻撃や拝金主義も強まった。今の人は拝金意識が強烈で、これが子供にも悪影響を及ぼしている。多くの子供達はとにかくお金を早く稼ぎたがり、勉強しなくなっている。僕はよく、知識はお金より大事だと自分の子供を励ましている」

「経済的に改善されたが、無駄使いが増えた。村では二階建の家がどんどん新築されているが、実際には無意味だ。もともと住宅の土地は広いのだから、平屋でも十分だ。都市なら土地の節約のために二階建にするのもわかるが、農村では土地が余っている。でも、メンツや虚栄心を満足させるためだけに高い屋根の二階建を建てるのだ。あなた（調査員）はもう長く農村に住んでいな

いから、こういう農民の心理が理解できないだろう（笑）」

「自営業者が多くなり、生活水準も上がったが、互いへの不信感も増している。貧富の差の拡大に伴い、昔の友達とも付き合いが薄くなった。皆、金儲けに必死だ。子供達もそんな大人の影響を受け、あまり勉強せず、成績も悪くなる。大人達は自分の子供の教育のために、学校の先生や管理職に賄賂を贈ったり、ご馳走したりしている。それが、当たり前になっている。昨今は、学校の先生も以前とは違う。賄賂を寄こさない生徒をあまり気づかわなくなったり、小さなことでよく叱ったりする。子供は差別されると、責任はすべて賄賂を贈らない両親にあると思っている。皆がやっているから自分もするのが当たり前になってしまっているが、この意識は怖いことだ。不当なことも、正当になってしまう。子供が差別されないよう、両親はますます賄賂を贈るようになっている」

「村民は皆、子供の教育をより重視しているが、子供の受けとめ方は逆だ。金持ちの子供が高い玩具・文房具・かばん・服などを学校に持って行くと、他の子供はそれを羨む。貧しい子供は学校で、生徒から『窮鬼』『小気鬼』といじめられ、先生にも平等に接してもらえず、だんだん学校へ行きたくなくなってしまう。僕の子供も何回かそんなことがあった。仕方がないから、子供に高い玩具やゲーム機・文房具を買ってあげたり、先生に賄賂を贈るしかない。よくないことだが、他にどうしようもなく、困っている」

「農村は急速に発展し、農村の生活条件はすごく改善された。自営業が発展に貢献し、農村にもビルやマンションが建っている。でも、すべての農民が余裕のある生活を送っているわけではない。貧しい農民も多い。ごく少数の農民しかマンションは買えない。自営業の増加は、裏返せば農業では暮らせない農民が増えたということだ。農業が衰退し、多くの農地も工場用地や道路・マンション宅地に転用されている」

そしてこうした農村生活の変化は、今や必要最低限の治安すら崩壊させつつある。女性の中には、その恐怖感が特に顕著である。

＊「農民の経済条件は以前より改善されたが、その裏腹で不信感が募っている。互いに本音を言わず、不審な行動がある。以前の『夜でも鍵をかけなくていい』生活は、過去のものだ。丈夫な鉄製のドアにすごく大きなカギを掛け、塀の上に割れたガラスを刺して並べ、電線を這わせている。こんなセキュリティの中でも、泥棒や子供の誘拐がしょっちゅう発生する。犯人はたいてい近所の人だ。だから、知人でも用心しないと危ない」

「治安が悪くなった。以前は皆、貧しかったので、夜にドアを開けたままで寝ても安全だった。今は皆、丈夫な鉄製ドアを作っているが、泥棒や痴漢が多い。特に最近、子供を誘拐して売ったり、夕方に一人で歩いている女性を強姦する事件がよく発生する」

「雰囲気がよくない。皆、お金のことばかり考えている。お金のために盗む、奪う、汚職に賄賂等。もともと悪事はあったが、近頃は、皆がそれを当然と思い、日常茶飯事になった。これは子供にまで影響を及ぼしている。子供達は欲しい物があった時、もし両親からもらえないと、親や他の大人から金を盗んでいる。しかも子供達が集団を作り、何人かで一緒に盗みを働いている」

「先日、勢力が強い家柄の子供達による殺人事件があった。65歳位の老人が、１人で道路わきの草地で羊の放し飼いをしていた。５～６人の若者が老人をおさえ、羊を車に積み込んだ。老人は車の前に立ちはだかったが、犯人達は全然気にせず老人を轢き、その上、老人の身体の上に車を乗

り上げた。付近の人が駆けつけると、老人は既に死んでいた。この事件の犯人は明白なのに、なかなか裁判が進まない。犯人が皆、勢力・権力の強い家柄の子供だからだ。勢力が強い人が、あからさまに弱い人をいじめることはよく起きる。取り締まられない」

表3-24　村民関係・村の変化

			男		女	合計
			60年代生	70年代以降生		
			8	20	5	33
村民関係の変化	緊密になった		5	7		12
	疎遠になった			8	4	12
	変化なし		3	5	1	9
村の変化（複数）	良くなった	出稼ぎによって村民全体の生活水準が上昇した	7	15	4	26
		村民の考え方がより柔軟となり、商売をやる人が多くなった	7	16	2	25
		農村の新築は以前と違った	6	11	4	21
		村民が子供の教育をより重視するようになった	6	9	4	19
		村民関係が緊密になった	4	5	1	10
	悪くなった	村民間の貧富の格差が拡大した	5	14	5	24
		子供たちが出稼ぎに行きたくなって、学習に興味を失った	6	12	3	21
		人身・財産の安全が脅かされるようになった	2	7	3	12
		村民関係が疎遠になった		7	4	11
		農業が衰退した（農地廃棄や怠慢経営など）	1	4		5

資料）実態調査より作成

第３項　行政への要望と諦観（表3-25）

こうした中で、帰郷者達は、中央・地方の政府に対し、「公正・公平な仕事の態度」を求めている。いいかえれば、現状の行政が公正・公平ではなく、コネや賄賂が横行しているということである。自営業者の増加に伴い、コネの有無は死活問題となっている。帰郷後、コネで公務員に就職したからこそ、行政の内幕を知り、問題を告発している帰郷者もいる。

＊「政府の役員は、本当に公平・公正のスローガンを尊重して仕事をしてほしい。政府に自分の知り合いがいれば何でもやりやすいということは、皆、分かっているよ」

「父は郷政府の公務員だから、僕はそのコネで契約警官になった。将来、正式採用になる可能性もあるし、安定して仕事も楽だ。政府の中で仕事をしているので、いろんな事を経験して、何があっても驚かなくなった。例えば、表向きと内実が違っていて、手間と資金を無駄にしていることが多い。郷と県城をつなぐ主要道路が何年間もかけて修繕されているが、なかなか進まなかった。でも去年、中央政府の人が視察に来ることになり、高賃金で付近の人を雇い、わずか数日で修繕を完成した。ところが視察官が帰ると、せっかく修繕した道路をすぐに潰してしまった。なぜな

ら工事が杜撰で、危険だからだ。また犯人を逮捕したとか、犯罪対策案を明らかにしたとか、警察の勇敢さや政府の公明さなどを報道する時、その取材はすべてあらかじめ用意された『やらせ』だ。僕はテレビのニュースなど信じないし、そもそも見る気にならない」

年長の帰郷者では、行政に医療保険に関する確実な情報提供を求める声も多い。中国では従来、農村には医療保険はほとんどなかったが、数年前から順次、新たな医療保険制度が実施された。しかしほとんどの農民はその制度を知らず、依然として高額の医療費にあえいでいる。またたとえ情報を知っていても、制度が複雑で、実際には適用対象外とされるケースが多い。

＊「医療保険については、ほとんど分からない。どんな病気なら保険がおりるのか、いくら補助されるのか、どんな手続きが必要なのか、行政は詳しく教えてほしい。去年、子供が手術を受けて4万元かかり、退院後、保険を申請したのになかなか補助されなかった。理由は、入院前に申請しないと補助されないというのだ。入院前は手術を受けるかどうか分からないよ。いろんな関係先をまわって、ようやく4千元だけ助けてもらった。でも、そのための賄賂に3千元かかった。本当に疲れるよ。保険制度なんて口先だけのごまかしに過ぎない。行政は皆に分かるように説明してほしい」

「医療保険が適用される範囲を、行政はきちんと教えてほしい。家族は体調が悪く、よく通院するが、1回も補助されたことがない。どんな病気になったら補助されるのか教えてほしい」

若年者では、子供が通う学校の教育環境の改善、および、自営業資金のローン申請手続きの簡素化、土地使用権の合法化などが、行政に対する要望となっている。

＊「学校の悪い雰囲気を変えてほしい。このままでいくと、子供の成長に悪い影響ばかり与えてしまう。今の子供は勉強の成績で競争せず、服や両親の仕事やお金持ちかどうかで競争している。学校の教師の汚職・賄賂もその原因の一つだ。教師がきちんと教育せず、拝金主義に走ったら、絶対に子供もきちんと育成されないだろう」

「ローンの申請手続きをもっと簡単にしてほしい。今、10人もの保証人を別々の家族から確保しなければならず、大変だ。土地も家屋も工場も担保にならない。ローンが組めないと、工場の規模拡大ができない。また、利子がとても高い。利子のせいで利益がほとんどない」

「土地の使用権の証明書を出してほしい。これは僕達にとって生死にかかわる問題だ。僕らは政府の許可をもらって工場を作り、税金もきちんと払っている。それなのに土地の使用権については明文化された文書がなく、政府の意向次第でどうされるかわからない。政府の土地政策と国家の法律との間に食い違いがあるからだ。工場用地の使用が完全に合法化されないと、工場の発展にとっては不利だ」

さらに女性を中心に多くみられる要望は、「村民の人身・財産の安全の確保」である。

＊「最近、交通事故や盗難事件が頻発している。特に子供の安全が深刻な問題だ。農村では、子供が誘拐され、よそに人身売買される話もよく聞く。農産物や家産の盗難事件も、しょっちゅう発生する。政府の警察はきちんと各村を巡回して、犯罪を防止してほしい」

以上のように、帰郷者の行政への要望はいずれも、生命・生業の維持にとって必要最低限の切実なそ

れである。また、法律の遵守・公正な運用という最低限の公共性の確保にすぎない。

しかしそれにもかかわらず、帰郷者の多くは、行政に期待しても無駄であるといった諦観に陥っている。そうだからこそ、前述のように、自分の子供には農村から脱出してほしいし、それしか生活を現実に発展させる道がないとの判断に達しているのである。

＊「政府に期待しても、意味がない。汚職や賄賂などが横行しているのは、改めて言うまでもなく、周知の秘密だ。誰でも知っている。それでも何も変わらない。中国の農村は変わらないよ。結局、自分で努力して、自分の子供をきちんと育てて、早く農村を脱出して、都市に定住する以外に、現実的な道はないよ」

表3-25　政府への要望（複数回答）

		男		女	合計
		60年代生	70年代以降生		
		8	20	5	33
村の現状を受けての政府への要望	公平・公正な仕事態度	3	16	4	23
	医療保険に関する確実な情報提供	7	8	3	18
	子供の学校教育の重視	1	13	3	17
	資金の提供	1	10		11
	土地の合法的な使用権利		11		11
	村民の人身・財産の安全確保	2	5	4	11

資料）実態調査より作成

第４項　将来の定住志向（表3-26）

こうして年長の帰郷者は、自らは今後、農村にとどまらざるを得ないが、子供は農村から脱出してほしいと考えている。自らが農村にとどまる理由は、「家族の面倒をみなければならない」、「都市に行っても年齢的に仕事をみつめることが困難」、「家を新築したばかりだから」等、多様である。

＊「両親の面倒も見なければならないし、妻の身体も弱いから、もう出稼ぎには行けない。もし息子が農村を出て都市に定住できれば、お金を貯めて、都市で家を購入してやるつもりだ。子供が結婚するまでは、今の自営業を続けるしかない。もし子供が経済的に自立できなければ、僕は今のままずっと頑張らなければいけない」

「もう歳だから、都市に行っても仕事がない。今の家のまま、ずっと農村に住むしかない。子供が自立したら、自営をやめて、孫の世話に専念したい」

「家を２年前に建てたばかりだから、このまま住み続けたい。子供が大学を卒業するまで今の自営業を続ける。僕はずっと子供に拘束されるつもりはない。老後の費用を貯めたら、自営業も辞めてゆっくり暮らしたい」

一方、若年の帰郷者は、自らもまた再び都市に出て、子供とともに都市で暮らしたいと考えている。「農村に残っていても、将来性がない」、「農村での工業自営には不安要素が多い」、「自営業の発展は農村では限界がある」などが、主な理由である。出稼ぎ先の都市生活で様々な疎外を体験し、また故

郷・農村の良さを再発見して帰郷したはずの帰郷者の中でも、農村の現状・変化をまのあたりにする中で、農村に最終的に見切りをつける気持ちが沸き上がってきているのである。自営業で一定の成功をおさめているようにみえても、いずれは都市に行ききたいとの気持ちも強い。

＊「自営業の規模拡大のために都市へ行くつもりだ。今、一生懸命に仕事をしているのは、将来、都市で家を購入するためだ。営業が拡大できる都市が一番いい。絶対家を購入できると信じている」

「都市に住みたい。子供を教育して、能力のある子供を育て、将来、私を連れて都市に定住してほしい。私は炊事や孫の世話など、何でもできる。今、都市でいい家政婦を見つけることも結構難しい。私は自分の子供の家政婦としては最適じゃないか、給料も要らないし（笑）」

「子供が都市の学校に入ったら、学校の近くで仕事したい。自営業でも臨時雇用でも構わない。僕は今後、すべて子供の行く所についていく」

総じて、農村の荒廃が進む中、農村に定住しようという帰郷者は極めて限られている。帰郷者は確かに資金と技術を農村に持ち帰り、自営業を開設している。しかしそれが単純に農村を活性化させていると見るのは、やや表面的と言わざるをえない。出稼ぎ、およびそれを生み出した経済社会構造は、基本的には農村を活性化させず、むしろ荒廃させつつあると言えよう。

表3-26　自分の定住地・仕事への希望

		男		女	合計
		60年代生	70年代以降生		
		8	20	5	33
自分の将来の定住希望地	今の家のままでずっと農村に住む	5	6	1	12
	お金を稼いで、将来は都市に住む	1	9	2	12
	今の古い家を新築または改装してからずっと農村に住む	2	3		5
	子供が行く所に従う		2	2	4
自分の将来の希望職種	自営業	6	15	4	25
	運転手		5		5
	主婦・主夫	1		1	2
	野菜栽培	1			1

資料）実態調査より作成

第6節　小括

以上、帰郷者の生活過程をふまえ、出稼ぎおよび帰郷が、帰郷者本人やその家族、農村、ひいては中国社会にとってどのような意味をもつのか、考察してきた。簡単に総括しよう。

帰郷者達は、経済的貧困からの脱出を目指し、都市に出稼ぎに出た。特に若年者は、彼らを取り巻く厳しい経済・就職事情の中で育まれたハングリー精神と強い成功志向をもち、単なる経済的利益にとどまらない多面的な自己実現を、出稼ぎに託していた。

出稼ぎの体験の内実には、明確な世代差がある。すなわち年長者の多くは故郷に近い中小都市で製造

業・建設業の臨時雇として単純労働に従事し、相対的には低賃金であった。年長者は、出稼ぎ先で極端な節約生活を送り、故郷に多額の送金を行った。送金・貯金ができたことは、彼らにとって喜びであった。一方、若年者の多くは、最初から沿海部・大都市に向かい、転職を重ねる中で運転手・コック等の技能を身につけ、相対的に高賃金で、一部は正規雇用契約をも確保した。出稼ぎ先ではやはり節約に努めたが、しかし娯楽費・交際費に一定の支出を行い、新たな仲間・友達も作った。とりわけ方言が通じ合う同郷者と新たに出会い、密接な信頼関係も構築した。都市生活を体験して視野を広げ、新たな技術を習得し、苦労をともにする相談相手や友人を得たことは、若年者にとってまさに多面的な自己実現の達成にほかならなかった。

しかし、都市での出稼ぎ体験は、決して理想通りのものではなかった。農村に比べて高賃金といっても、都市の物価の高さを考慮すれば、経済的な苦しさはいうまでもない。送金や貯金もギリギリの節約生活でようやく確保したものにすぎない。若年者の相対的な高収入も、頻繁な転職の過程で遭遇する賃金不払いのリスクと裏腹であった。長時間の重労働、劣悪な労働環境の中での健康破壊等、多くの労働問題もみられた。家族との離別による寂しさ、節約がもたらす居住環境の悪さ・娯楽の少なさ、そして都市市民への劣等感等、生活面での疎外も広範にみられた。都市市民との間には明確な差別があり、出稼ぎ者どうしの人間関係も言葉（方言）の壁によって同郷出身者の内部にとどまりがちであった。

一方で一定の資金蓄積や技術習得、新たな人間関係の構築がなされ、他方で都市における疎外と苦難に直面する。この双方の狭間の中で、帰郷者達は、故郷への帰還を選択していった。年長者は出稼ぎ先での仕事の継続が年齢的に困難になったこと、若年者は故郷での開業資金や技能習得にメドがつき、「このまま出稼ぎを続けていても将来性がない」と見切りをつけたことをそれぞれ契機として、そして世代を問わず、子供や家族との生活を大切にしたいとの思いをもって、故郷に戻っていったのである。

では、帰郷後の事情はどうか。帰郷者は、都市での経験を経て、自らがやりたい・面白いと思える仕事をするべく、起業していた。そして多くの場合、「技術・経験が生かせる」、「周囲から信用を得られやすい」、「家族と同居して一緒に働ける」等、帰郷後の仕事を高く評価していた。年長者は木材加工、年少者は運送業（運転手）での起業が多く、年少者の方が若干高収入を得ているが、年長者も含め、出稼ぎ先よりも高い収入を稼ぎ出していた。また出稼ぎ先で培った技術、人脈、作業や経営のノウハウが、様々な形で帰郷後の自営業に生かされていた。

しかし、経済的な苦しさが解消されたわけではない。自営業のローン返済、必要経費の高さ、経営の困難、賃金や利潤の少なさは、依然として大きな問題であった。木材加工業の自営は、行政府による違法な土地利用許可の上に成立しており、いつ摘発され、すべての投資が没収されるかわからない状況にあった。収入が高くても、子供の教育費・結婚費用、高齢者をはじめとする家族の医療費、自営業に不可欠の人脈作りのための莫大な交際費等、支出や将来のために準備すべき資金も急速に増加していた。今現在の収支だけでは、経済的な安定水準が評価できない点に、今の中国農村の大きな問題があった。結局、帰郷者が、起業して一定の成功を収めても、経済的問題を中心として、将来に対する不安はどこまでいっても拭いきれず、帰郷者を悩ませるのである。また若年の帰郷者の間では、当初の「仕事の面白さ」への関心が徐々に薄れ、経済収入額だけにこだわらざるを得ない状況もあった。

農民が所有する生産手段としての土地がもつ意味も、相対的に低下しつつあった。自営業の多忙さの中、零細な土地所有に基づく農業生産は、着実に衰退していた。農業生産は、主に省力化の観点から、自給用の穀物へとモノカルチャー化されている。野菜・果物等は、もはや他地域から運ばれてきたものを金銭で購入しており、食費の支出は膨張している。若年の帰郷者は、もはや農業技術・知識を継承し

ていない。農地の工業用地等への転用・貸与も ── 行政公認の違法転用も含め ── 、進んでいる。年長者も含め、農業で家計を維持することは、もはやほとんど不可能になっている。

帰郷者の家族も、大きな変貌を遂げていた。帰郷者は既婚で子供がいる。いいかえれば、既婚で子供がいる出稼ぎ者が、主に帰郷しているのである。彼らは主に核家族で、高齢の両親の介護が必要になると、女性（娘）も含めて条件のある子供が同居して、介護を行っている。かつての中国農村で一般的だった「養児防老（男児の跡取りが両親の老後を扶養する）」の慣習は、もはや過去のものとなっている。自分の子供についても、今もなお「家の跡継ぎとしての男児」を求める声は多いが、しかしそうした意識は徐々に希薄化し、「女の子の方が優しいので、女の子がほしい」、「娘の方が息子より老後の面倒をみてくれるから、女の子がほしい」と考えるケースが増加している。

帰郷者が出稼ぎを打ち切って帰郷するに至った動機の一つは、家族との同居・子供の養育にあった。実際、帰郷後、家族と同居できることは帰郷者の喜びの一つではある。また年長者を中心に、出稼ぎ中の留守を守ってくれた妻への感謝・敬意が増し、夫婦関係が緊密になったと語るケースも少なくない。出稼ぎ先で炊事・洗濯・掃除等を自ら行っていた男性が、帰国後、家事に積極的に参加する傾向もみられる。

ただしそうした変化は、決して「男女平等の理念」の浸透ではなく、「夫婦どちらでも仕事がみつからない方が家事を分担すべき」という現実に根差した対応である。結婚相手に求めるものも、「優しさ」や「見た目」「愛情」などから、「家族に対する責任」、さらにはそれを裏付ける能力や経済力へとシフトしている。出稼ぎ前には「離婚はよくない」との意識が強かったが、出稼ぎ経験を経て帰郷した後は、「夫婦関係が悪ければ離婚すべき」という意識が増幅し、実際に離婚に踏み切るケースも増加している。出稼ぎによる長期の離別は、夫の浮気や妻の嫉妬、さらに自立性を増した妻の個人的行為を増幅させ、夫婦関係に亀裂を作り出している。帰郷後の自営業による多忙も、夫婦のすれ違いの原因となっている。出稼ぎ中の客観的な離別とは異なり、帰郷後は同居しているにもかかわらず、心理的な距離が増してきているのである。

子供の教育についても、似たようなことがいえる。帰郷してうれしいことの一つとして、「子供の教育をきちんとみてやれること」があげられている。しかしその一方、帰郷後の自営業は多忙で十分に子供の面倒がみてやれず、子供が勉強に無関心になり、早く出稼ぎに出て金を儲けたいといった方向に走りがちになるといった実態も吐露されている。また帰郷者には、農村の教育水準の低さ、都市との教育格差も深刻な問題と受け止められている。帰郷者は出稼ぎ先で、大卒者といえども就職難に陥っている現実をまのあたりにし、自分の子供には一層の高学歴を期待している。また自分の子供には、高学歴を身につけて専門職・管理職になり、農村から大都市へと脱出してほしいと願っている。つまり出稼ぎ先の大都市で様々な苦難・疎外を体験し、理想と現実のギャップを熟知して故郷に戻ったはずの帰郷者達は、実際に帰郷してみるとやはり子供達の世代には大都市に脱出してほしい ── ただし自分達のような出稼ぎ者としてではなく、高学歴のエリートとして ── と念じているのである。だからこそ彼らにとって、都市と農村の教育格差は極めて深刻な問題である。

とはいえ一部の帰郷者は、出稼ぎ先の大都市で体験した差別や疎外、理想と現実のギャップをふまえ、子供が大都市ではなく、中小都市に住むことを望んでいる。都市の大卒者の疎外された生活や苦難を目の当たりにして、大学よりむしろ専門学校に子供を進学させたいと考えるケースもある。総じて、ステレオタイプな成功・上昇志向ではなく、地に足のついた生活の発展を希求する意識が芽生えつつある。ただしそれは決して農村にとどまり、子供に農業や自営業を継がせることではない。農村・農業からの

脱出は、もはや自明の前提となっている。

農村全体の様子はどうか。現在の農村には、都市化・工業化、要するに「近代化」の波が押し寄せており、利便性の向上や雇用の創出等、村民が恩恵を被る一面もある。また出稼ぎ先の都市で多くの疎外と苦難を体験した帰郷者達は、「都市での仕事より農業の方が自由」、「都市より、人間関係が暖かい」、「都市より、物価が安い」、「都市より、静かで落ち着いている」、「都市より、人間が正直で素朴」等、農村の価値に改めて気づいている。出稼ぎ先で培った技術や人脈が農村での起業に生かされ、一部では以前に比べて農村の人間関係が緊密になったとの見方もある。

しかし、農村は、衛生状態の悪化、貧富の差の拡大、拝金主義の蔓延、治安の悪化およびそれによる隣人への不信感の増大・人間関係の疎遠化等、「近代化」の負の要素にも覆われている。そして同時に、文化水準の低さ、人間関係の煩わしさ、家柄による差別等、伝統的・因習的な要素も依然として残存している。しかも、それらが絡み合ってしまった新たな現象も見られる。杜撰で違法の土地貸与契約、村民間での見栄の張りあい、政府内の人間にコネがあるか否かによる不利益、教師が公然と賄賂を要求してくること等である。

帰郷者は行政に「公正・公平」を求めているが、それは現実の行政がその対極にあり、コネや賄賂が横行していることの反映でしかない。帰郷者の行政への要望は、人身・財産の安全の確保、ローン申請手続きの簡素化、土地使用権の合法化、医療保険の情報提供等、いずれも生命・生業の維持にとって必要不可欠なそれである。また法律の遵守・公正な運用という最低限の公共性の確保でしかない。しかしそうした要望ですら、帰郷者の多くは、行政に期待しても無駄といった諦観を色濃く有している。だからこそ、出稼ぎ先の都市生活で様々な疎外を体験し、故郷・農村の良さを再発見して帰郷したはずの帰郷者の中でも、農村の現状・変化を目のあたりにする中で、農村に最終的に見切りをつける気持ちが沸きあがってきているのである。年長の帰郷者は自らは農村にとどまらざるを得ないとしても、子供には農村から脱出してほしいと願っている。若年の帰郷者は、たとえ農村で自営業を起業し、一定の成功を収めていても、それでも将来は自ら農村を脱出してさらなる成功を目指したいと念じている。

以上をふまえれば、出稼ぎからの帰郷は、確かに白・宋編（2002）が指摘するように「都市部での継続就業や定住制度的に拒否されたことによる、消極的な選択」という一面を有している。厳（2010）のいう「社会的、経済的、あるいは制度的要因で帰郷を余議なくされたという、消極的なもの」でもある。しかし同時に王・崔・超（2004）が指摘するように、「出稼ぎは起業のための前提であり、出稼ぎ経験こそが起業行為に影響を与え、物的資本と人的資本、すなわち資金・技術・情報・経歴などの蓄積が起業の決定要因」という側面もある。韓（2009）がいうように、「出稼ぎの過程で得た資金や技術を生かし、故郷での起業を通して地域経済の振興に貢献するなど、農民工の帰郷は資金や人的資本を都市から農村へ移動させることで、農村経済の振興に大きな意味を持つ」一面も、確かに存在するのである。少なくとも本稿の対象地においては、白・宋編（2002）のいう「起業した人数も帰郷者のほんの一部」、または厳（2010）のいう「帰郷の要因は故郷で事業を起こすといった積極的なものではなく、…帰郷者のほとんどは伝統的な農村社会に回帰」しているといった実態とは、かなり乖離している。まさに王・崔・超（2004）のいうように、「出稼ぎ者が継続的に増加するとともに、帰郷する民工にも増加傾向がみられる。帰郷して起業する者は大部分が農業以外に従事している」のである。

しかしまた現実は、王・崔・超（2004）や韓（2009）がいうほど楽観的なものではない。農村での起業が、単純に農村を活性化させているとみるのは、やや表面的といわざるをえない。そこでの困難は、厳（2010）がいうような、起業に適した人材が農村に戻らず、都市に定住する傾向があることに基づく

ものではない。むしろ農村で起業し、一定の成功を収めている当の帰郷者自身が、農村の将来に見切りをつけているのである。またそれは、小松（2010）が提起するような、小額信用貸付制度で解決できるほど部分的な問題でもない。出稼ぎ、およびそれを生み出した経済社会構造は、基本的には農村を活性化させず、むしろ荒廃させつつあると言えよう。そしてその農村の荒廃は、単に個別の起業の困難といったレベルの問題ではなく、生命・生業の最低限の安全をも脅かすほどの深刻なそれである。またそれらを解決できない行政に対しても徹底的な不信感と諦観が蔓延している。白・宋編（2002）や厳（2010）がいうように、都市への定住を断念せざるを得ず、都市から弾き出された帰郷者が、それだけにとどまらず、今や故郷である農村にも安住の地を見失っているのである。厳（2010）がいう、出稼ぎ者が回帰すべき「伝統的農村」など、もはや存在していない。

総じていえば、出稼ぎからの帰郷が、都市からの排除にすぎないか、それとも農村活性化の契機となるかといった先行研究の論点それ自体が、もはや楽観的にすぎるのである。帰郷は、一時的な農村活性化にはなるが、決して持続可能なものではない。むしろ帰郷者は、もはや都市にも農村にも住むべき地をもたない新たな住民として、矛盾を深めつつある。そしてそれは、帰郷者諸個人の資質や金融等の個別のシステムの問題ではなく、中国の社会構造そのものの変革を抜きには解決困難な問題といわざるを得ないのである。

注

注１：一人っ子政策違反の罰金を課されているケースもある。「下の子を出産した時、罰金を取られた。戸籍登録を申請する時も戸籍管理部門の担当者に賄賂を渡したり御馳走したりして、何千元もかかった」

注２：それらに加え、「人間関係が干渉しすぎて煩わしい」など、旧来からの農村に顕著な問題も指摘されている。ただしこうした農村に顕著な問題も、出稼ぎで都市の生活を体験した帰郷者だからこそ、より不快に感じているのである。

＊「農村は人間関係が細かい。たとえば、両親の遠い親戚の子供が結婚する時、僕が全然知らない人でも、お金でお祝いをしないといけない」

終章　中国農民出稼ぎ者に関する研究

本論文では、現代中国における農民出稼ぎ者・留守家族、および農村への帰郷者を対象としたインテンシヴな面接聞き取り調査に基づき、彼・彼女らの生活過程のレベルに降りて、農民出稼ぎや帰郷の社会的意義を分析・考察してきた。

以下、全体を総括しよう。

第１節　出稼ぎの動機と背景

まず、農民達が出稼ぎに向かう動機は、基本的には「稼ぐ」こと、つまり経済的貧困からの脱出である。その意味で、出稼ぎを生み出す基盤に都市と農村の経済格差があることは間違いない。

ただし、それは単純な「流入地と流出地の収入格差」（プル・プッシュ理論）にはとどまらない。現に帰郷者達は、出稼ぎ先よりも故郷で高額の収入を確保している。都市と農村の経済格差が存在することはいうまでもないが、それぞれの地域における階層間格差をも視野に入れなければ、出稼ぎを生み出す経済的動機は、十全には理解できないのである。

また出稼ぎ者、特に若年者の動機は、単に経済的利益だけにとどまらない。それと同時に、「視野の拡大」や「新たな技術の習得」、「都市生活を体験してみたいといった欲求」等、極めて多面的な自己実現を出稼ぎに託しているのである。そこには、彼らを取り巻く厳しい経済・就職事情の中で育まれたハングリー精神、および強い成功志向がある。したがって農村から都市へと出稼ぎに向かうのは、必ずしも農村で最も貧困な、いわば食い詰めた人々から順番に、絶対的な貧困に押し出されて都市に排出されるわけではない。むしろ、よりよい生活を求め、多面的な自己実現を模索する主体的な選択の一つとして、出稼ぎという現象が起きているのである。

さらに、都市と農村の格差が深刻な問題であればあるほど、それをもたらす一因としての農業の衰退それ自体を、出稼ぎの社会・経済的背景として直視してく必要があるだろう。

従来、しばしば、出稼ぎによる人口流出が「農業活動に負の影響を与えている」（馮、2009、129～150）といった指摘がなされてきた。そのこと自体は、間違いではない。しかし同時に、農業生産の低生産性や費用対効果の低さが、逆に出稼ぎ・兼業を不可欠にしている事実も見逃してはならない。こうした農業の固有の問題が出稼ぎを生み、その上で、出稼ぎ・兼業への傾斜が農業生産をさらに困難にするといった悪循環がみられるのである。　すなわちまず農業生産の基礎になる土地所有についてみると、個々の家族は零細な土地分配しか受けず、しかもその分配は村内の家族勢力の強弱によって不平等になされている。個々人の意欲・能力等に支えられた農業生産の大規模化・生産性向上の道は、最初から大幅に制約されている。また農産物販売価格が安く、農業生産自体が高コスト・低収入となっており、そのためほとんど食糧自給用のためにしかなされなくなってきている。

そこで出稼ぎ者の家族は、農業だけでは生活が維持できず、生きるためには出稼ぎが不可欠となっている。基幹労働力が出稼ぎに出ることにより、農業生産の労働力不足が顕在化し、高齢の父母・妻が農業の主な担い手となっている。そこで省力化の観点から、農産物を一層モノカルチャー化させ、また農薬を多用している。これが農業の高コスト化・低収入化に拍車をかけ、また留守家族の健康破壊をもたらしている。

出稼ぎを中止する帰郷者が増え、「人口流出」に歯止めがかかっても、農業は活性化しない。このこ

とは、単に人口流出が農業に負の影響を与えているだけではないことを雄弁に物語っている。農業の低生産性こそが、非農業的生業への依存を不可欠にしているのである。現に大半の帰郷者は帰郷後も農業に従事せず、農業以外の自営業を起業している。農産物のモノカルチャー化や自給用生産化には、歯止めはかからない。農地の工業用地等への転用・貸与も、行政が公認した違法の転用を含め、進展している。若年の帰郷者にはもはや、農業技術・知識も継承されていない。

今や中国の農村は、農業生産によって自立的生活が可能地域ではなくなっている。「出稼ぎで資金・技術等を獲得することによって農村を活性化させる」といっても、それは農業生産の発展を意味しない。これが、現在および将来の中国（および世界）の安定的な食糧供給に与える深刻な影響は、決して無視しえないであろう。そして出稼ぎによる「農村の発展・活性化」が農村の「都市化」を意味するのであれば、それはどんなに「都市化」しても、結局は大都市からみれば農村が常に「遅れた」地域であり続けることを自ら宿命づけるものである。出稼ぎを生み出す経済・社会基盤の重要な一つとして、農業の低生産性・費用対効果の低さを正面から問わなければ、出稼ぎのもつ社会・経済的意味も十分には理解できないように思われる。

第２節　出稼ぎ者と留守家族の生活

では次に、出稼ぎ者と留守家族の生活について総括する。

第１項　出稼ぎ先での労働・生活

年長の出稼ぎ者は当初、故郷に近い中小都市に向かい、後に一部が大都市へと移動した。出稼ぎ先では、製造業・建設業の単純労働に臨時雇として働き、相対的には低賃金であった。

これに対し、若年の出稼ぎ者は当初から沿海部の大都市に向かい、当初は単純労働に従事していたが、転職を重ねる中で運転手・コック等の技能を習得した。相対的に高賃金を獲得し、一部には正規雇用の契約を結んだ者もいる。

こうした世代差を含みつつも、出稼ぎ者は出稼ぎに出る以前よりも明らかに高い収入を確保し、その中からかなりの金額を故郷に送金または貯金していた。また、若年者を中心とする出稼ぎ先での頻繁な転職も、単に雇用者側の都合だけでなく、出稼ぎ者自身による選択による場合も多かった。よりよい労働条件求めて、または短期的にはたとえ低賃金であっても新たな技能の習得に資する職場へと、多くの出稼ぎ者が自ら選択して転職を繰り返していた。さらに若年の出稼ぎ者は、都市での生活体験を通して、「視野が広がった」、「新たな技術が習得できた」、「新たな友人・仲間ができた」等、多面的な自己実現を実感していた。総じて出稼ぎ者達は、もともとの出稼ぎの目的・動機を一定程度、達成し、その限りでは満足を感じていた。

そしてこうした出稼ぎ者の主体性は、個々人の能力というより、同郷者のインフォーマルな集団によって支えられていた。出稼ぎの開始や出稼ぎ先での転職は、公的機関の斡旋・紹介ではなく、同郷者の私的なネットワークによって媒介されていた。出稼ぎ先での悩みの相談も、方言・言葉が通じる同郷者のネットワークの内部でなされていた。特に若年の出稼ぎ者では、故郷にいた時からの知人・友人だけでなく、出稼ぎ先で新たに出会った同郷者との人間関係が構築され、そこに一定の信頼関係も生まれていた。

こうした諸点をふまえれば、出稼ぎ者達は、単に「“３Ｋ”労働を担う貴重な限界労働力」（熊谷、2002、150）であるばかりでなく、自ら新たな生活展望を模索する主体であるといえよう。また出稼ぎ

に対する満足度も、当面の賃金の多寡と単純に相関せず、多様な動機や目的、人間関係を含むトータルな生活の中で出稼ぎがもつ位置・意味づけによって変わってくるのである。

しかし同時に、客観的にみれば、出稼ぎ先での労働条件が、極めて劣悪ものであることは否定しえない事実である。頻繁な転職は、単に自分の選択だけでなく、いうまでもなく雇用者側の都合による解雇も含んでいる。そうでなくともサービス残業は常態化しており、長時間の重労働やそれに伴う健康破壊もみられる。農村に比べて高収入であることは間違いないが、しかし都市の高物価の中で経済的な苦しさは依然として大きな問題である。故郷への多額の送金や貯金は、出稼ぎ先での医療費・住居費・娯楽費等をギリギリまで節約した生活によって、初めて確保されているにすぎない。若年の出稼ぎ者の選択的な転職にしても、それはその都度、賃金不払いのリスクを伴った危うい転職ではある。そして同郷者との深い信頼関係の構築も、それは言い換えれば、都市市民による差別や排除、都市市民に対する劣等感、そして他の地域出身の出稼ぎ者との間にある言葉の壁や有利な仕事の争奪競争が作り出した閉鎖的な社会関係にほかならない。出稼ぎによる家族との長期に渡る離別は、出稼ぎ者に多大な寂しさ、孤独感をもたらしている。

第２項　留守家族の生活

一方、出稼ぎ者を送り出している留守家族の生活は、基本的な生活費、教育費・医療費等のすべてに渡り、出稼ぎの送金に大きく依存している。出稼ぎ先からの送金なしには、もはや農民の生活は考えられなくなっている。高齢の父母の医療費は現状でも大きな負担だが、農村の医療保険が極めて不十分な中では、莫大な医療費がいつ必要になるかわからず、つねにできるだけ多くの貯金をしておかねばならない。子供の教育費が莫大であることはいうまでもないが、さらに加えて子供の結婚費用の負担もあらかじめ貯金しておかねばならない。要するに、現時点での家計収支が黒字であればよいのではなく、将来のための多額の貯蓄が不可欠であり、しかもその費目が最も基本的な医療費や教育費、あるいは社会的に「常識」とされる子供の結婚費用等となっているところに、農民の重い経済的負担の特徴がある。

こうした諸点を考慮すれば、単純に出稼ぎ先からの送金で「留守家族の経済状況が大きく改善された」（馮、2009、129～150）とは、必ずしも言い難い状況にあるといわざるを得ない。むしろ実態としては、極めて不安定な経済状況の中で、出稼ぎの送金によってかろうじて生活を維持し、緊急時に私的に備えているという方が近いであろう。留守家族が「出稼ぎの送金で生活が改善された」と感じるのは、決して、より豊かになったという意味ではない。むしろ「出稼ぎの送金がなければ、とても生活を維持できない」という意味である。ただしそれは現時点での収支だけでは十分に把握できず、中国の農村における公的福祉の欠如、医療・教育の市場経済化、それらに起因する将来生活の不安定さによって構築された、測定し難い貧困にほかならない。

第３節　帰郷という選択

こうした中で、一部の出稼ぎ者は出稼ぎを中止し、帰郷するという選択に至った。

第１項　帰郷の選択

帰郷の決断の背景には、次の要素がある。

一つは、前述の都市での労働・生活における疎外・苦難の体験である。

いま一つは、資金蓄積、技能習得、視野の拡大、人間関係の構築等、出稼ぎの元々の目的がある程度、

達成されたことである。

この二つの要素の狭間で、年長者は年齢的に出稼ぎの継続が困難になったことを直接のきっかけとして、また若年者は故郷での起業のメドがたち、「このまま出稼ぎを続けていても将来が見えない」との思いが強まってきたことを契機として、それぞれ帰郷を決心した。また世代を問わず、家族・子供との生活を大切にしたいとの思いも、出稼ぎを中止して帰郷を選択する一つの動機となった。ちなみに本稿の帰郷者は全員、既婚で子供がいる。　そして調査時点でなお出稼ぎを続けている出稼ぎ者の多くも、一方で都市に定住したいと願いつつ、しかし同時に都市で多くの苦難・疎外に直面し、都市生活に馴染めない気持ちを合わせ持っていた。また都市への定住に際しては戸籍制度が引き続き巨大な壁となっており、住宅購入・子供の学費等、農村戸籍である出稼ぎ者にとっては多くの不利・差別待遇が厳存していた。都市戸籍目当てに「北京出身者と結婚」を夢見る女性の出稼ぎ者も少なくないが、それもほとんどの場合、「夢」にすぎないことを彼女たちは認識していた。

馮（2009）が指摘するように、確かに高学歴、長期滞在、「夫婦と子供」で出稼ぎにきている人ほど、都市により強い定住意識をもっていること、また収入ではなく職種が定住意識に影響を与えていること、農村戸籍所有者の定住意識が低いこと（馮、2009、195～210）といった傾向は、確かに見られるだろう。しかし、高学歴・安定した職種・都市戸籍をもつ出稼ぎ農民はもともとごくわずかしかいない。実際には、圧倒的多数を占める低・中学歴、不安定な職種、農村戸籍の出稼ぎ農民の中でも、年齢・資金蓄積・技能習得・人間関係・家族構成等、多様な要因の絡みあいの中で、都市への定住の可能性を夢見つつ、帰郷後の生活に向けて準備も進めるといった両睨みの葛藤の中で、当面の出稼ぎが継続されているのである。

そして厳（2010）が述べるように、「若者や教育水準の高い人は、…自身のことを、農民より労働者だと見なす意識が強い」、「労働者と自認する人は農民と自認する人と比べ、現に住んでいる都市への帰属感が強い」、「身分意識および都市への帰属意識は、定住か帰郷かの意思選択において、比較的重要である」こと（厳、2010、210-217）も、もちろんある程度までは正しい。しかし実際に起業に適した人材が農村に戻らず、都市に定住する傾向があるかといえば、そうではない。農村に戻る帰郷者のかなりの部分は起業の計画や資金・技術をもっている。逆に起業に適した人材であっても、都市に定住しえないことの方がむしろ多い。

さらに帰郷は、白・宋編（2002）がいうように「都市部での継続就業や定住制度的に拒否されたことによる、消極的な選択」であり、厳（2010）の指摘のように「社会的、経済的、あるいは制度的要因で帰郷を余議なくされたという、消極的なもの」（厳、2010、207）という一面を確かに有している。しかし同時に、王・崔・超（2004）が述べるように「出稼ぎは起業のための前提であり、出稼ぎ経験こそが起業行為に影響を与え、物的資本と人的資本、すなわち資金・技術・情報・経歴などの蓄積が起業の決定要因」（王・崔・超、2004）であり、また韓（2009）が述べるように「出稼ぎの過程で得た資金や技術を生かし、故郷での起業を通して地域経済の振興に貢献するなど、農民工の帰郷は資金や人的資本を都市から農村へ移動させる」（韓、2009）という一面もないわけではない。

都市からの排除が厳然として存在する以上、帰郷は「消極的な選択」である。しかし同時に、いかに制約された条件の中であっても、帰郷の「選択」には一定の主体性がある。そして農村への帰郷は、決して「農村経済の振興」というほど明色に満ちたものではなく、やむをえない「選択」である。都市への定着、農村帰郷後の起業の双方の可能性をにらみつつ、葛藤の中で将来を模索するところにこそ、出稼ぎ－帰郷者の主体性が存在するのである。

しかもまた、こうした中でもごく一部の帰郷者は、都市生活の疎外感をふまえて、都市に対する批判的なまなざしを醸成している。「都市での仕事より農業の方が自由」、「都市より、人間関係が暖かい」、「都市より、物価が安い」、「都市より、静かで落ち着いている」、「都市より、人間が正直で素朴」等、農村の価値を再発見しているのである。就職難に喘ぐ都市の大学生の実態、都市市民と結婚して都市への定住を果たした農村出身者が抜け出せない差別や困難も目の当たりにする。帰郷者は、単に都市から排除されて運命に翻弄されるだけの客体ではなく、中国社会、とりわけあこがれていたはずの大都市が決して人間を幸福にしないことを見抜いていく主体でもある。そうした中で年長者だけでなく、若年者も含め、単純なサクセスストーリーではなく、より地に足のついた現実的な生活の発展を模索するようになっている。

以上の諸点をふまえれば、現代中国の農民出稼ぎをめぐる状況は、新たな段階に入りつつあるといえよう。朱（2005）は中国の農民出稼ぎの４つの画期を指摘し（朱、2005、30～32）、1985年以降の第４期、農村から都市への労働力流動を抑制する政策が徐々に撤廃され、戸籍制度は依然として存在しているが、農民は自由に都市へ出稼ぎに向かい、都市に長く滞在することが可能になり、沿海部の工業化により中国国内の地域間格差が拡大、大規模な農民出稼ぎが発生してきたと述べている。確かに今日、それ以前に比べれば、政策は緩和され、都市への長期滞在も法的・政策的に可能になっている。しかし実際には、出稼ぎ者の多くは都市での将来展望が見えず、むしろ一定の主体性をもって農村に帰郷するという選択をする人々も増えている。大規模な農民出稼ぎとともに、大規模な農村への回流、しかも必ずしも政策によって強制されたものではない帰郷が一定の規模で発生し、それが農村社会に何らかのインパクトを与えている。農村から都市へという一方向的な変化ではなく、都市から農村へという人の動きが農村にもたらす社会的意義が問われる、第５期ともいうべき新たな段階が、到来しているといってよい。

第２項　帰郷後の生業・生活

現にそうした帰郷者の多くは、本稿の事例に即していえば、農村で自営業を起業している。対象地域には、木材加工、石炭等の地場産業がある程度存在しており、これが自営業開設を可能にしているのである。

したがって本稿の対象地域においては少なくとも、白・宋編（2002）がいうような「起業した人数も帰郷者のほんの一部にすぎない」、または厳（2010）が指摘する「帰郷の要因は故郷で事業を起こすといった積極的なものではなく、…帰郷者のほとんどは伝統的な農村社会に回帰し、出稼ぎ経験がない者とあまり変わらない就業の仕方をしている」（韓、2010、207）というような実態とは、かなり乖離している。むしろ王・崔・超（2004）が述べるように、「出稼ぎ者が継続的に増加するとともに、帰郷する民工にも増加傾向がみられる。帰郷して起業する者は大部分が農業以外に従事している」（王・崔・超、2004）のである。

こうした帰郷者は、出稼ぎ先で獲得した技術・経験、人脈、市場・経営感覚等を生かして自営業を起業し、それによって出稼ぎ中よりも一層高い収入を確保している。また単なる経済的利益だけでなく、「自分がやりたい、面白いと思う仕事」で起業し、「技術・経験が生かせる」、「周囲から信用を得られやすい」、「家族と同居して一緒に働ける」等、帰郷後の仕事を肯定的に評価している。このような側面だけをみれば、前述の王・崔・超（2004）の「出稼ぎは起業のための前提であり、出稼ぎ経験こそが起業行為に影響を与え、物的資本と人的資本、すなわち資金・技術・情報・経歴などの蓄積が起業の

決定要因」、韓（2009）がいう「出稼ぎの過程で得た資金や技術を生かし、故郷での起業を通して地域経済の振興に貢献するなど、農民工の帰郷は資金や人的資本を都市から農村へ移動させることで、農村経済の振興に大きな意味を持つ」（韓、2009）との指摘は妥当であるかのようにみえる。しかし、実は、帰郷して起業した自営業者の多くは、依然として経済的な苦しさに悩まされている。開業に要した多額のローン返済、必要経費の高さ、経営の困難、賃金や利潤の少なさは、大きな悩みである。自営業に不可欠の人脈作りのための莫大な交際費も、帰郷者の負担となっている。木材加工業の自営業は、地方行政府による違法な土地利用許可の上に成り立っており、いつ摘発され、すべての投資が水泡に帰すかわからない危うさの上で運営されている。

農村での生活費も、高騰し続けている。農業生産のモノカルチャー化に伴い、農村でも野菜・果物等は他地域から運ばれてきたものを金銭で購入するようになり、食費の支出も膨張している。食品の安全が揺らぐ中、安全な食品を確保するために、さらに高額な食費支出が不可欠になっている。前述の如く、子供の教育費・結婚費用、医療費等、将来のために準備すべき必要経費も莫大で、現時点の家計収支だけでは測定し難い貧困・経済的不安が蔓延している。

こうした中で、帰郷者が農村で起業して、一定の成功を収めていたとしても、将来に対する経済的不安、ローン返済や用地没収の可能性も含めた経営不安は、ますます膨張している。若年の帰郷者においても、起業当初の「仕事の面白さ」への関心は徐々に薄れ、経済収入額だけにこだわらざるを得なくなってきている。農村で起業した帰郷者の経営・生活実態は、王・崔・超（2004）や韓（2009）がいうほど楽観的なものではない。農村での起業が、「農村経済を振興」させているとみるのは、やや表面的にすぎるであろう。そこにある困難は、厳（2010）がいうように起業に適した人材が農村に戻らず、都市に定住する傾向があるからではない。また小松（2010）が提起する小額信用貸付制度で解決できるほど部分的な問題でもない。それは、実際に自営業を一定成功させている「起業に適した人材」自身が直面している、中国農村の構造的な問題なのである。

第４節　農村社会の変貌と展望

そこで次に、農村社会の変貌と展望について総括しよう。

第１項　家族の変貌

まず、農村の家族の変化である。

出稼ぎ者の留守家族からの聞き取りによれば、夫の出稼ぎに伴い、子供の世話、老親の扶養・介護、農業生産、安全確保等の必要に基づいて、父母と妻の共働、また同居が増加している。先行研究（Yuan、1987、36-46、張・李、2004、48、杜、2000、77-99、馮、2009、135）では、出稼ぎは家族の小規模化・核家族化をもたらすとされているが、本稿の調査結果は、それとは逆に出稼ぎが拡大家族化をもたらしている事実を明らかにした。しかもこの拡大家族化は、伝統的な家父長制の復活・強化では決してない。むしろ父母と妻が同居しても、家計面では別世帯であり、家計を裁量する妻の権限は強まっている。家族にかかわる意志決定も、出稼ぎ中の夫ではなく、妻が主に担うように変化している。妻が、自らの父母を経済的に支援するという「隠れた拡大家族」化もみられる。要するに、生活上の相互扶助の必要に基づいて拡大家族の形態をとりつつ、しかし経済的には互いに独立しているという核家族的な要素も併せ持ち、その中で出稼ぎ者の妻の権限・意志決定権が強まっているのである。妻の多くは、子供の性別（跡継ぎとしての男児）にもこだわらなくなっている。その点でも、男尊女卑・家父長制は崩れ

つつある。

一方、出稼ぎをやめて故郷に戻った帰郷者からの聞き取りによれば、帰郷者の家族は核家族であることが圧倒的に多い。夫が帰郷すれば、もはや父母等との同居の必要はないのである。ただし、高齢の両親の介護が必要になれば、女性（娘）を含めて条件のある子供が同居・介護しており、ここでもまたかつての中国農村で一般的だった「養児防老」は過去のものになっている。自分の子供には今なお「家の跡継ぎとしての男児」を求める声は多いが、しかしやはり帰郷者の中でもそうした意識は徐々に希薄化し、「女の子の方が優しいので、女の子がほしい」、「娘の方が息子より老後の面倒をみてくれるから、女の子がほしい」といった声が増加している。そして出稼ぎ先で炊事・洗濯・掃除等を自ら行っていた男性は、帰郷後も家事に積極的に参加している。年長者を中心に、出稼ぎ中の留守を守ってくれた妻への感謝・敬意から、夫婦関係が一層緊密になったとの声も聞かれる。

このように、出稼ぎ者の留守家族、および帰郷者はそれぞれ異なる形ではあるが、いずれも家族内での男女平等、「妻の地位上昇」が進んでおり、その限りでは「近代化」が進んでいる。こうした事実は、先行研究（Zhang、1998、193-211、馮、2009、146）が指摘する通りである。「農業生産活動および家事における妻の役割の変化は男性の流出によって生じた空白を埋めることにすぎず、従来の夫婦間の勢力関係には影響していない」（Entwisle etc. 1995、36－57）との指摘もあるが、これはやや一面的で、女性・妻の意志決定権・地位は確実に上昇しているのである。

ただし、ここで特に留意すべきことは、こうした「女性の自立」、「妻の地位上昇」、「男女の平等な共働」等をポジティブな文脈だけで捉えることには、無理があるということである。

出稼ぎ者の留守家族において、妻には農業と家事・育児の両立、高齢者の介護等で極めて大きな負担がかかっていた。父母と妻の同居は、農業や生活の最低限の維持の切実な必要に迫られたものであり、または治安悪化の中に取り残された女性・子供・高齢者の自己防衛の営みであった。妻は、遠隔地に出稼ぎに行っている夫との心理的距離・寂しさ・孤独に悩まされ、一部には実質的な家族崩壊の危機もみられた。妻は経済的収入の必要、および家族関係の不安のアンビヴァレントな心情の上に、かろうじて出稼ぎを肯定しているにすぎない。妻が子供の性別にこだわらなくなっているのも、もはや男児（跡継ぎ）の存在が老後生活を保障し得るものではなくなっているからである。夫婦の家事分担の平等化も、「夫婦どちらでも仕事がみつからない方が家事を分担すべき」という現実の必要に根差した変化であり、いいかえれば夫・男性に必ず仕事があるとは限らないという生活の不安定化がもたらした変化である。

もとより、近代における女性の自立・男尊女卑の払拭が、決して明色に彩られた選択的なものではなく、自給自足的農業生産に基づく安定した生活の崩壊、および市場経済の渦中での貧困化と不安定化・孤立化の中で、個々人に選択の余地なく押し付けられるものであるとするならば、現在の中国の農村では確かにそれが着実に進んでいるといえよう。

そしてそうであるがゆえに、家族それ自体の手段化・道具化、個人主義化に伴う家族の脆弱化という形での近代化も、着実に進んでいる。前述の出稼ぎ者にみられた「北京戸籍目当ての結婚」も、その一つの現れである。出稼ぎ者は出稼ぎ先で、将来の成功を目指す立場から、結婚相手に「高い能力」を求めるように意識を変えている。帰郷者が結婚相手に求めるものも、「優しさ」や「見た目」「愛情」から、「家族に対する責任」、さらにそれを裏付ける「高い能力」や「経済力」へとシフトしてきている。出稼ぎ前は、「離婚はよくない」との意識が強かったが、出稼ぎを経て「夫婦関係が悪ければ離婚すべき」との意識が膨らみ、実際に離婚も増加している。出稼ぎによる長期の離別は、夫の浮気や妻の嫉妬、自立性を増した妻の個人的行為を増幅させ、夫婦関係に亀裂をもたらしている。帰郷後の自営業での多

忙も、夫婦のすれ違いの原因となっている。出稼ぎ中の客観的な離別とは異なり、帰郷後は同居しているにもかかわらず、心理的な距離が増している。出稼ぎ先で家族との離別による孤独・疎外が、帰郷者をして出稼ぎを打ち切って帰郷させるに至った動機の一つであった。帰郷後、家族と同居できることは帰郷者の喜びの一つである。しかしそれにもかかわらず、帰郷者の家族には、新たな疎外感・危機が発生しつつある。馮（2009）は、出稼ぎ者の家族について、一方で「配偶者の流出は夫婦関係の疎遠化をもたらしていない」としつつ、他方で「配偶者には、孤独感を感じている人々の割合が高い」（馮、2009、129～150）と、一見矛盾する指摘をしている。これは実は、上記のような留守家族の“孤立した共同”ともいうべき近代化の両側面を表している可能性がある。

第２項　子供と教育

こうした出稼ぎ者・留守家族・帰郷者にとって、子供は一つの大きな希望である。

ただし具体的にどのような期待を子供に託しているかをみると、高学歴を身につけ、専門職・管理職になり、農村から脱出してほしいといった内容に集中している点に、大きな特徴がある。それが子供にとって唯一の幸福実現の道であるという確信、および自らが果たせなかった夢を子供に託すという意味も、そこに込められている。教育の重視は、農村での生活の充実・改善のためではなく、農村から脱出するための手段であり、それゆえ直ちに社会的地位の上昇手段としての「学歴」とほとんど同義になる。

大都市に子供を同伴した出稼ぎ者は、子供の教育費の高さに大きな問題を感じていた。子供を故郷に残した出稼ぎ者は、離別の寂しさにさいなまれていた。帰郷者にとって、帰郷の動機の一つは子供と同居することであり、帰郷してうれしいことの一つは「子供の教育をきちんとみてやれること」であった。

都市での出稼ぎ体験を通して、子供への高学歴・農村脱出という期待はますます高まった。都市生活の体験を通して、現在および今後の中国社会の中でチャンスを得るには大都市の方が圧倒的に有利であることを実感したからである。しかも都市では大卒者でも就職難に見舞われている。この現状を目の当たりにした出稼ぎ者は、自分の子供には大学院・留学などさらなる高学歴を期待するようになっている。出稼ぎ者は、自分の子供には北京定住への期待・願いを一層強めている。出稼ぎ先の都市で様々な苦難・疎外を体験し、理想と現実のギャップを熟知して故郷に戻ったはずの帰郷者も、実際に帰郷してみるとやはり子供達の世代には大都市に脱出してほしい ── ただし出稼ぎ者としてではなく、高学歴のエリートとして ── との思いを強めている。

しかしその一方で、こうしたステレオタイプな成功志向・子供への期待が徐々に揺らぎつつあることも、事実である。

まず第１に、都市での大卒者の就職難を目の当たりにした出稼ぎ者・帰郷者の一部は、就職における学歴の価値低下を実感している。出稼ぎ者には、単に学歴だけではだめということを子供達に伝えたいと語るケースがある。帰郷者も、一流大学に行けないなら、むしろ専門学校に進学し、大都市ではなくむしろ中小都市に居住してほしいと子供に願っている。農村にとどまること・農業への従事は決して期待しないが、しかしステレオタイプな夢ではなく、地に足のついた生活発展を希求する意識が芽生えているのである。

第２に、都市と農村の教育格差の実感である。大学への進学は、都市出身者の方が圧倒的に有利である。農村戸籍の出稼ぎ者が、都市の学校に子供を通わせるには莫大な学費が必要になる。子供を北京に同伴した出稼ぎ者の中では、前述の如く、北京での高い学費が大きな懸念となっている。そして農村に戻った帰郷者は、特に都市と農村の教育格差の激しさ、農村の教育の劣悪さを、改めて強く実感してい

る。

第３は、出稼ぎによって教育費を確保し、子供に期待を託すという方法自体が、子供に様々な悪影響をもたらしている現実の認識である。出稼ぎ者は、離別に伴う教育上の悪影響を懸念していた。留守家族も、出稼ぎ者が都市での生活体験をふまえ、子供の教育を重視し、知識の重要性を再認識して教育熱心になり、教育費を稼ぐために出稼ぎに行っているにもかかわらず、子供達はますます「学習に興味を失い、出稼ぎに行くことを望むようになっている」と語っている。帰郷者もまた、帰郷後の自営業が多忙であるため、十分に子供の面倒がみてやれず、子供が勉強に無関心に、早く出稼ぎに出て金を儲けたいといった方向に走りがちであると指摘している。そして何より、いくら親が子供に高学歴のエリートになり、農村から脱出してほしいと願っても、実際にすべての子供達がそれを実現できるわけではないことも、当然、出稼ぎ者・留守家族・帰郷者は知っている。

先行研究の多くは、「人口流出が子供の生活の質の低下をもたらし、彼らの性格にも影響を与え、一部の子供の間に自閉症、劣等感、またはコミュニケーション障害などの問題が発生した」（呂、2006、49－56）、「親からの関心と愛情が欠如したため、孤独感を持ち、学習への意欲も失われ、成績が悪くなった留守子供が多い」（黄、2004、4）等、マイナスの影響を指摘している。じかし、こうした子供の生活や教育に対する悪影響は、出稼ぎそのものがもたらした影響というより、むしろ出稼ぎを生み出さざるをえない農村の経済・社会状況がもたらした悪影響というべきであろう。現に出稼ぎを中断して農村に戻った帰郷者の家庭においても、子供の生活・教育は問題に満ちているのである。また、出稼ぎ者に子供に対する「愛情と関心が欠如」しているわけでは決してない。むしろ愛情と関心の表出の道筋が、高学歴の獲得による農村からの私的脱出という極めて制約された形でしか現しようがないところにこそ、大きな問題が存在しているのである。一方、「親の流出は、留守子供の物質的生活にはプラスの影響を与えてきたが、子供の教育にはそれほどの影響を与えなかった。一方、子供の性格についての調査結果からは、自閉症や劣等感の発生、学習意欲の低下などの問題現象は見られない」（馮、2009、149）との指摘もある。確かに自閉症や劣等感、学習意欲の低下と、出稼ぎの有無が直接の因果関係にあるわけではないだろう。しかし出稼ぎやそれを生み出さざるを得ない農村の経済・社会状況は、子供の生活・意識にとって決して適切な環境といえず、量的なアンケート調査では把握しきれない深刻な問題が存在しているのである。

第３項　農村社会関係の変容

最後に、農村における社会諸関係の変貌についてみよう。

出稼ぎ者の留守家族の聞き取りによれば、農村では、出稼ぎ者の流出に伴い、農作業での共同、および困った時の助け合いなど、必要に迫られた隣人関係が強化されている。その限りでは、出稼ぎ・人口流出の増加が村の社会関係を疎遠化させているとは、一概にはいえない。出稼ぎ先で培われた社会関係が、農村に持ち帰られ、出稼ぎ以前にはなかった新たな関係が構築されているケースもある。

しかし、それでもなお留守家族が語るところによれば、村内の人間関係は着実に疎遠になっている。女性・子供・高齢者だけが農村に取り残され、生活の不安定化が進んでいる。とりわけ治安の悪化は極限に達している。　帰郷者からの聞き取りでも、一方で、出稼ぎ先で培った人脈が農村での起業に生かされ、一部では農村の人間関係が緊密になったとの声もある。

しかし他方で、農村の衛生状態の悪化、貧富の差の拡大、拝金主義の蔓延、治安の悪化およびそれによる隣人への不信感の増大・人間関係の疎遠化等、近代化の負の要素も、帰郷者は数多く指摘している。

また帰郷者は、農村の文化水準の低さ、人間関係の煩わしさ、家柄による差別等、伝統的・因習的な要素の残存も、都市生活の体験をふまえて特に強く実感している。さらに、近代化と伝統が絡み合ってしまった新たな現象、すなわち杜撰で違法の土地貸与契約、村民間での見栄の張りあい、政府内の人間にコネがあるか否かによる不利益、教師が公然と賄賂を要求してくること等も、深刻な問題として列挙している。

こうした農村社会の問題は、石（2003）が指摘するような「計画経済の時代から持ち越され、今なお市場経済の歩みを阻んでいる『旧制度』の問題点」とは言い難い。むしろどちらかといえば、改革開放以降の市場経済・近代化がもたらした新たな問題点といえるだろう。今日、農村で進んでいる事態は、脱封建・旧社会、または旧制度からの脱却・解放といった明色の「近代」ではなく、苦汁と不安に満ちた「近代」である。そのような意味において出稼ぎや帰郷は、確かに中国の農村社会を「近代化」している。

そして現在の行政は、こうした諸問題を解決する能力をもっているのだろうか。

出稼ぎ者の留守家族は、政府に対し、人身・財産の安全、および出稼ぎ先での賃金不払いの防止といった、ごく当然の最低限の要望しか持っていない。しかも実際には、そうした要望の実現すら行政に期待しても無駄であるといった諦観が蔓延している。帰郷者も、行政に「公正・公平」を求めているが、それは現状の行政がその対極にあり、コネや賄賂が横行しているからである。帰郷者の行政への要望もまた、人身・財産の安全の確保、ローン申請手続きの簡素化、土地使用権の合法化、医療保険の情報提供等、いずれも生命・生業の維持にとって必要不可欠なそれでしかない。または、法律の遵守・公正な運用という最低限の公共性の確保である。それにもかかわらず、そうした要望ですら、帰郷者の多くは、行政に期待しても無駄だと感じている。

そうであるからこそ、出稼ぎ者・留守家族・帰郷者はいずれも、子供の世代にはこのような農村から脱出してほしいと感じざるを得ないのである。留守家族の中には、子供が都市のエリートになるか、あるいは地元の公務員になってほしいとの声も多い。地元の公務員になるというのは、全体の奉仕者というよりむしろ公的権力を身内のために利用しうる立場（公務員）になり、「現実的」に問題の緩和・解決を図るということであり、それ以外に展望がないという諦観の現れである。出稼ぎ先の都市生活で様々な疎外を体験し、故郷・農村の良さを再発見して帰郷し、そして農村で自営業を起業して一定の成功を収めたはずの帰郷者もまた、農村の現状・変化を目のあたりにする中で、農村に最終的に見切りをつけつつある。年長の帰郷者は自らは農村にとどまらざるを得ないとしても、子供には農村から脱出してほしいと考えている。若年の帰郷者は、たとえ農村で自営業を起業し、一定の成功を収めていても、将来は自ら農村を脱出することを望んでいる。ここに、現代中国の農村問題の深刻さが端的に現れている。

出稼ぎと帰郷、およびそれを生み出した経済社会構造は、農村を活性化させず、むしろ荒廃させつつある。農村の荒廃は、単に帰郷者の起業の困難といったレベルの問題ではなく、生命・生業の最低限の安全をも脅かすほど深刻である。そしてそれらを解決できない行政に対しても、深刻な不信と諦観が蔓延している。白・宋編（2002）や厳（2010）がいうように、帰郷者は、都市への定住を断念せざるを得ず、都市から弾き出されている。しかしそれだけにとどまらず、弾き出された帰郷者は、今や故郷である農村にも安住の地を見失いつつある。厳（2010）がいう出稼ぎ者が回帰すべき「伝統的農村」など、もはやどこにも存在していないのである。

出稼ぎからの帰郷が、都市からの排除にすぎないか、それとも農村活性化の契機となるかといった先行研究の論点それ自体が、もはや楽観的にすぎると言わざるをえない。帰郷による起業は、一時的な農

村活性化にはなるが、決して持続可能なものではない。帰郷者は、もはや都市にも農村にも住むべき地をもたない新たな住民として、矛盾を深めつつある。それはまた、帰郷者諸個人の資質や金融等の個別システムの問題ではなく、中国の社会構造そのものの変革を抜きには解決困難な問題である。出稼ぎ者・留守家族・起業者は、自らの生活を通して、そうした現実を明らかに認識しつつある。単なる起業の成功や高学歴を目指した教育の試み等にとどまらず、このような認識の形成の中に、現代の出稼ぎ者・留守家族・帰郷者の最も本質的な主体の形成がみてとれるのである。

引用・参照文献

●日本語文献

浅野慎一、1993、『世界変動と出稼ぎ・移民労働の社会理論』、大学教育出版社

浅野慎一、2005、『人間的自然と社会環境――人間発達の学をめざして』、大学教育出版

石田浩、2002、『中国内陸農村の貧困構造と労働力移動』、研究双書第129冊

石暁紅、2003、『中国における農民出稼ぎ労働の社会・経済背景と出稼ぎ労働書の構造的特徴』、『現社会文化研究』28号、新潟大学大学院現代社会文化研究科

大島一二、1996、『中国の出稼ぎ労働者―農村労働力流動の現状とゆくえ』、芦書房

熊谷苑子・桝潟俊子・松戸庸子・田嶋淳子編著、2002、『離土離郷―中国沿海部農村の出稼ぎ女性』、南窓社、

厳善平、2009、『帰郷と都市定住の間をさまよう農民工の選択―2008年珠江デルタ9市農民工アンケート調査に基づく―』

小松出、2010、「中国における帰郷起業と小額信用貸付支援」、『中国西部地域農村社会近代化に関する調査研究』

座間紘一、2007、「中国における『社会主義新農村建設』と『農村総合改革』」、『山口経済学雑誌』第55巻6号

南亮進・牧野文雄編著、1999、『流れ行く大河　中国農村労働の移動』、日本評論社

馮文猛、2009、『中国の人口移動と社会的現実』、東信堂

布施鉄治、1976、『社会機構と諸個人の社会的労働――生活過程』、北海道大学「教育学部紀要」第26号

郝在今、1997、『民族の大移動』、中国ジャーナリスト集団著『世紀末中国』、東銀座出版社

楊世英、2007、『中国経済―経済成長と労働力移動』、新青出版

ルイス、アーサー、1969、『世界経済論』、石崎昭彦・森恒夫・馬場宏二訳、新評論

若林敬子、2005、『中国の人口問題と社会的現実』、ミネルヴァ書房

●中国語文献

王西玉・崔傳義・超陽、2004、『走出二元結構――「打工与回郷：就業転変和農村発展」』、中国発展出版社

温鋭・悠海華、2001、『労働力的流動与農村社会経済変遷』、中国社会科学出版社

韓俊編、2009a、『調査中国農村』、中国発展出版社

韓俊編、2009b、『中国農民工戦略問題研究』、上海遠東出版社

黄艶梅、2004、「不可遺忘的角落―農村“隔代監護”問題的研究」、『教育導刊』、2004年第1期

朱農（2005）『中国労働力流動と三農問題』、武漢大学出版社

白南生・宋洪遠編、2002、『回郷？還是進城？――中国農村外出労働力回流研究』、中国財政経済出版社

鍾水映、2000、『人口流動と社会経済発展』、武漢大学出版社

張文娟・李樹茁、2004、「労働力外流背景下的農村老年人居住安排影響因素研究」、『中国人口科学』2004年1月
湯夢君、2004、『浅析“留守妻子”現象』、社会科学文献出版社
李強、2003、『影響中国城郷流動人口的推力与拉力因素分析』、中国社会科学雑誌者編『中国社会科学』1月号
李紅衛、1990、『農村労働力回流—中国農村発展的沉重包袱』、中国農村経済出版社
呂紹清、2006、「農村児童：留守生活的挑戦—150個訪談個案分析報告」、『中国農村経済』、2006年第1期
中国国務院、2007、『中国農民出稼ぎ労働者調査研究報告』、中国統計出版社
全国人口抽様調査弁公室編、2008、『人口変動サンプル調査』、中国統計出版社
中国山東省統計局　、2008、『山東省統計年鑑』、中国統計出版社
中国国家統計局　、2007、『地方統計年鑑』、中国統計出版社
中国共産党第16届中央委員会第3回全体会議、2003年10月14日、「中共中央関于完全社会主義市場経済体制若干問題的決定」
中国共産党第16届中央委員会第4回全体会議、2004年9月19日、「中共中央関于加強党的執政能力建設的決定」

●英語文献

Yuan, F (1987) The Status and Role of the Chinese Elderly in Families and Society. In J.H. Schulz &D.D. Davis-Friedman(Eds.) *Aging China:Family, Economics, and Government Policies in Transition,* WashingtonD.C:The Gerontological Society of America
Entwisle, Barbara, et al. (1995) : “Gender and Family Business in Rural China,” *American Sociological Review 60(1).*
Zhang、W. (1998) “Rural Women and Reform in a North Chinese Village”, in F.Christiansen and J.Zhang (eds), *Village Inc.:Chinese Rural Society in the 1990s. Surrey, England: Curzon Press.*
杜 peng and Tu ping (2000):Population Ageing and Old Age Security, In Peng Xizhe & Guo Zhigang(Eds):*The Changing Population of China,* Oxford:Blackwell.